

悠遊

第二十一号



企業OBペンクラブ

ペン・フォト句 (前編)



荒ぶるが**あ**んた私に踊らされ 風**去**って日向ぼこする落葉かな
平尾 富男 大越 浩平



近眼に乱視**老**眼入り混じり
中村 晃也



テキーラを今宵**紙**めたや
カルメント
安藤 晃二

神様も毎晩辞書と**首**っ引き
下山 健夫

悠遊

第二十一号

企業OBペンクラブ

表紙の絵「ランを描く」

安藤 晃二

五月のある日、外から帰った娘が花束を玄関に放り出して、また飛び出して行った。「パパ！ 忙しいから、あとで活けておいて」。友達からの誕生日プレゼントだと云う。そのまま忘れて数日が経過した。包みからのぞく黄色い添え花が枯れ始めている。これは大変と、花瓶に移す。メインの花は一種類、シンガポールにある白いランである。その強靱な熱帯の生命力は放置された時間をものともしない。切子風のガラスの花瓶を逆光に置くと、白と透明の取り合わせが風格に満ちた不思議な趣を醸し出した。年に一度の水彩の絵筆を取った。初めてランを描いた。

目次

▽巻頭言……………	西川 武彦 4
-----------	---------

Ⅱ特集Ⅱ 我が世代の負の遺産

▽自給自足の復権……………	森田 晃司 6
▽カネ本位の社会……………	大野ただし 8
▽孫どもに負の遺産を残したくない……………	山縣 正靖 10
▽残すものは何か……………	野瀬 隆平 12
▽負の遺産 安倍内閣……………	大越 浩平 14
▽「我が世代の負の遺産」を残さぬために……………	上田 信隆 16
▽我が世代を生きて……………	安藤 晃二 18
▽禍福はあざなえる縄の如し……………	門屋 信行 20
▽「いいところ取り」の文化……………	野上 浩三 22
▽良くも悪くも「団塊」……………	首藤 静夫 24
▽「超」が過剰で「Too Much」……………	西川 武彦 26
▽医薬品開発のジレンマ……………	玉山 和夫 28
▽わかつちやいるけど……………	新山章一郎 30
▽小さなハチドリ……………	大平 忠 32
▽「耐えがたきを耐え」のお言葉……………	稲宮 健一 34
▽お江戸日本橋……………	富田 佳瑞 36
▽地球の怒り……………	鶴飼 直哉 38
▽年金問題 総ざらい……………	鳥海 博 40
▽我々が次世代に残す負の遺産……………	大泉 潤 42
▽原発事故と赤字国債……………	都甲 昌利 44

Ⅱ特集Ⅱ 男と女

▽男と女―異性への目覚め―……………	岩崎洋一郎 48
▽男と女の昭和史……………	平尾 富男 50
▽男と女の間にあるものは……………	富岡喜久雄 52
▽人生の勘所……………	小寺 裕子 54
▽「我が世代の負の遺産」と「男と女」……………	市川 忠夫 56
▽男が女に追いつく日……………	細谷 博 58
▽とかく浮世は色と酒(色亭三步)……………	三 春 60
▽宝塚歌劇一〇〇周年!……………	清水 勝 62

Ⅱ自由テーマⅡ

▽父と子……………	原田 信 66
▽六代目九右衛門……………	矢澤 正二 68
▽ママさんランナーの挑戦を見続けて……………	松谷 隆 70
▽ストレンジ先生 生誕百六十年祭……………	高橋 孝蔵 72
▽志とサステナビリティ……………	橋本 政彦 74
▽奥多摩吟行いろいろ……………	保坂 令華 76
▽零戦パイロットの話……………	横内 則之 78
▽親子三代で築く文化……………	上原 利夫 80
▽私の八十五年……………	中川路 明 82
▽大ジンバブエの遺跡……………	阿部 典文 84
▽隠れ里の仏たち……………	浜田 道雄 86
▽老人と研究支援……………	吉寄 清己 88
▽歌は世につれ……………	廣澤 重穂 90
▽「誇り高くない」フランス人……………	古川 幸雄 92

▽約 束……………	濱口須美子	94
▽スイスはなぜ重武装国家であるのか……………	志村 良知	96
▽庶民の新教皇フランシスコ……………	松浦 俊博	98
▽沖縄について考える……………	田原 敬	100
▽スマートフォンが進化と未来……………	杉浦 右藏	102
▽信州の菅江真澄……………	大月 和彦	104
▽卒業五十周年記念長崎旅行……………	羽田 壽夫	106
▽四川大地震地帯……………	中村 晃也	108
▽季節があり、時がある……………	新井 良侑	110
▽三陸を旅して……………	猪股 重子	112
▽ステコ世代のぼやき……………	松浦 武弘	114
▽原中観音の使者……………	西田 昭良	116
▽小さな手が小さな歴史を作った……………	木村 敏美	118
▽指定席……………	池田 隆	120
▽おシス先生……………	濱田 優	122
▽古都山尽くし……………	新田由紀子	124
▽春の奈良……………	水原亜矢子	126
▽好きなもの……………	内藤真理子	127
▽日本人にとっての色彩私見……………	下山 健夫	128

Ⅱ 創作短編Ⅱ

▽あげまん……………	馬場真寿美	130
▽男と女の人間模様・アメリカ物語……………	福本多佳子	133
▽「反」沢直樹の倍返し……………	大西 宏	136

Ⅱ 悠遊の記Ⅱ

▽近況報告……………	中村 爽	140
▽沈黙する携帯電話……………	金京 法一	141
▽「悠遊百歳の会」を発足しませんか……はやしたかし……………		142

Ⅱ 分科会報告Ⅱ

▽サロン21……………		46
▽ペン・フォト句会……………		64
▽ペン俳句のこの一年 佳句鑑賞……………		143
▽二〇一三年「ペン川柳」勉強会の成果……………		148
▽「800字文学館賞」……………		150
▽英語を読もう会……………		152
▽何でも書こう会……………		154
▽掌編小説勉強会……………		155
▽インターネット関連……………		156
▽企業OBペンクラブの本年の歩み……………		157
▽会員名簿……………		162
▽編集後記……………		164

表紙制作 表紙の絵 カット

野瀬 隆平	
安藤 晃二	
松浦 武弘	野瀬 隆平
山縣 正靖	福本多佳子
田原 敬	

卷頭言

ふるさとを創る

会長 西川 武彦

「兎追いしかの山 小鮒釣りしかの川 夢は今も めぐりて 忘れがたき ふるさと……」。当クラブの会員なら 諸んじて歌える文部省唱歌です。故郷を離れ遠い地において 子供の頃過ごした野山の風景を懐かしむ。コンサートで最後にお客様と斉唱すると、会場に叙情が溢れます。

筆者には故郷が二つあります。疎開して小学校の三年間を過ごした長瀬、戦後帰京したあと夏休みを過ごした父方の本家がある近江八幡。どちらも沢山の思い出があり、半世紀以上の年月を経た今でもたまに訪れます。

長瀬では衣食住に苦勞し、苛めも味わい、自作の草履で一駅歩いて通学したほどの貧しさ。父親は出征、母親は危うく一命を落す大病を患いましたが、沢遊びや山登り、手作りのバットとボールで野球も覚えしました。苦樂が入り組んでむやみに懐かしい。

近江八幡では、家が琵琶湖に通じる水辺にあったので、

小鮒を釣り、舟遊びもしました。お盆には大勢の親族が帰郷して灯籠流し。

敗戦のあと復興と高度成長の過程で、地方は過疎化して寂れ、唱歌の世界が消えたのは寂しい限りです。人々の心の荒廃に繋がっているかもしれません。わが身を省みても、高度成長時代の典型的駄目オヤジで、子供たちには筆者が味わったような故郷はありません。

その反省から、せめて孫たちに故郷を造りたいという思いもあって、八ヶ岳山麓に小さなログハウスを建てました。そこでは、同じ思いの仲間と共に稲作で汗を流し、孫たちも休みには泊りがけで少しかけ手伝う。魚釣りを楽しみ、トンボや蝶や蛙を追いかけて、山林を探検して茸狩りもやる。親たち、つまり筆者の子供たちもそれに付き合う。子孫にふるさとを創ったと思います。

残り時間が少なくなった我々ですが、子供たち、孫たちに知恵を絞って夫々の形で故郷を残しませんか？ 世情に潤いを戻すことを信じながら……。

特集・我が世代の負の遺産



自給自足の復権

森田 晃司

「自給自足」を国語辞典で引いてみると、「自分や自国に必要な物資をみずからの生産だけでまかなうこと」とあります。自分のものを自分で賄おうというのですから、誰からも咎めを受ける必要のない至極まっとうな生き方の筈です。しかし、なぜかこの言葉には時代遅れな負のイメージが付きますといま。

「自給自足」と言えばすぐに思い浮かぶのは太古の原始的な生活ですが、とてもそんな暮らしには戻れないと感じてしまいます。また、「自給自足」と持続可能な安定した社会を実現し、世界史上に類をみないほどの高い精神文化を形成した江戸時代も、そうした成果よりも、近代化において西欧に後れを取ったという負のイメージが際立ちます。あるいは、退職後のサラリーマンが山里や過疎の村に移り住んで農作業に挑戦しつつ目指す自給の生活。天晴れと応援したくはなるものの、どこか浮世

離れて、自分には出来そうもないとの思いもよぎります。

産業革命が起こった十八世紀の後半から破竹の経済成長が始まります。幕末の日本もそのおりを受けて開国し、近代化、西欧化路線が始まります。その後は百五十年ほどにわたって、大恐慌や戦争によるとん挫はあったものの、一貫して経済は拡大を続けてきました。経済成長のもたらした恩恵は莫大で、日本のみならず、少なくとも先進国では人々は飢餓から解放され、豊かで便利な物質文明を謳歌しています。その原動力は言うまでもなく科学技術の大発展にあります。同時に市場主義という経済の枠組みの果たした役割も大きなものでした。

人々は「自給自足」という狭い経済から抜け出し、市場を通しての物資の自由な交換というシステムへ飛び込むことで公正な競争と効率化を実現してきました。

したがって、「自給自足」には人間に幸せをもたらす経済成長の、いわば、対極にある閉塞的で時代錯誤な負のイメージが付きまといっているのです。

ところで、筆者の友人は幾度か四国巡礼を経験してい

ます。毎回、四十日前後をかけて難行苦行の末に踏破します。最初は用心のためにあれこれと荷物を抱え込んでしまうものの、回を重ねるごとに本当に必要なものだけに絞り込まれていくそうです。思えば、私たちの人生は無駄なものや不必要なものを大量に背負い込んで四国巡礼をおこなっているようなものです。

仏教には「捨つれば満つる」という言葉があります。

無駄なものや煩惱を捨てることができれば、逆に心は満たされる、という教えです。この言葉は誰にでも理解できます。ところが、身の回りの無駄なものを整理できない、処理できない。それどころか、かえって新たに不必要なものを抱え込んでしまうのが凡人の性です。

古来、人間は物欲への妄執をいかに断ち切るかに悪戦苦闘を重ねてきています。幾多の宗教家、哲学者が奢侈を戒めてきています。それでも、文明が進歩し経済が発展すればするほど、なお一層の奢侈を求めます。豊かになれば、それに満足するのではなくて、一層の物欲を刺激されてしまうのが人間の性であり、「足るを知る」精神も歴史のかたに消えかかっています。

思えば、自給自足の時代には、奢侈にも限度がありました。自給できる範囲でしか奢侈も叶はず、継続できる範囲でしか資源も使用できない。自給自足の生活はおのずから持続可能な社会でもあったのです。しかし、今や市場主義経済万能の時代です。市場での自由な交換を通じて強者は無制限に世界中の財や資源を集めることができる一方で、格差や不安定を常時生み出しています。

開国からの百五十年で国のかたちは大きく変わりましたが、幸い現在も、世界の強国と伍して行けるだけの国土、国民、歴史と文化、最新の技術力があります。日本は経済成長の呪縛から脱した、世界の手本となる循環型近未来を作り出す国力を備えた数少ない国の一つと言えます。かつて理想の自給社会を築いたDNAも日本人の心の隅で出番を待っています。歴史と文化に科学技術を融合させて、近未来を築く道に歩み出すことが私たちの後世への責任だと言えます。勿論、経済的のみならず政治的にも、真に自立した国家を確立することが、長い道のりへの第一歩であることは言うまでもありません。

カネ本位の社会

大野 ただし

僕が新入社員になったのは一九五七年のことでした。まだ日本の企業には敗戦の傷跡が残っていて、僕の入った会社も財閥解体の後の資本金十九万五千円からやっと抜け出したような状態でした。

初任給は僅か一万円。下宿代を学生だった弟と一緒に親に払ってもらってやっとの生活でした。それでも会社の雰囲気は若い者にとっては前向きで、所属はボート部、夏は登山、冬はスキートの青春を謳歌しました。そんな会社が年が経つにつれて住み心地の悪いものになったのは、単純に年齢のせいなのか、それとも高度成長の歪が企業に大きく影響を与えたのか、考えさせられます。日本経済は一九七三年のオイルショックまでは順調だった、といえるのではないのでしょうか。

問題はその時の首相が田中角栄だったことです。「列島改造論」を引っさげて政権を握ったこの人の仕

事を今冷静に振り返ると、いわゆる高度成長が止まるのはこの時期と一致しています。「列島改造論」で経済は大きく飛躍したといわれていますが、データが示すように、この時期を境に日本経済は高度成長と別れを告げ、三、四パーセント台の普通の国になってしまったのです。経済学者の先生方は「オイルショックのせいだ」とおっしゃいます。果してそうなののでしょうか。

「列島改造論」とは何だったのか。今まで高度成長のために企業に重点的に配分していた予算を、地方の政治屋のためにばら撒きはじめたというのがその政策の本質でした。

戦前の政治家には、「井戸堀代議士」といわれる、政治のために全財産を投げ出した人が大勢いました。戦後では岸信介に身ぐるみがされた藤山愛一郎が思い出されます。僕の田舎の選挙区でも、佐藤内閣の官房長官を勤めた木村俊夫のお父さんがそういわれています。

その政治稼業を金儲けの手段に変えたのが河野一郎でした。先輩から聞いた話ですが、橋梁業者の集まりに時の河野建設大臣から直接電話がかかってきて「今回の入

札はどこそこに決める」と指示されたよし。

息子の洋平が今一つ人気が出ないのは、周りの人々がこんな親父の行動を知っているからでしょう。

この河野一郎の行動をさらに発展させ、我々国民の税金を巻き上げる手法を完成したのが田中角榮でした。政治家の収入で、なぜ目白御殿を持つことができるのか。

再稼働が問題になっている原子力発電にしても、刈羽・柏原の用地を予め買収して高額で東京電力に売りつけたのは角榮の秘書軍団でした。その土地が活断層の上にあることを承知で東電が買ったとすれば、木川田社長以下歴代社長は株主に対する特別背任罪にあたいします。

この政治屋による税金収奪システムはアベノミックスでもまた復活しています。自民党の多くの代議士が電力会社の支援を受けて当選しています。我々の税金は湯水の如く福島原発に注ぎ込まれています。

小泉純一郎が安倍晋三をかつて後継者に育てた時に、晋太郎さんの息子なら、という考えがあったのではないのでしょうか。ただ晋三の頭のなかには祖父の岸信介しかなかったようです。

そこから今の日本の不幸がはじまりました。

岸も藤山愛一郎を食い物にしたようにしたたかな政治家でした。デュッセルドルフに最初に出来た日本料理屋は日本館といって岸の秘書が経営するものでした。

岸の引退後その派閥を引き継いだのが福田赳夫だったことから、同じ思想の人と見られがちですが、その差は小泉と安倍晋三を見れば明らかです。岸は満州国を立ち上げ、戦後日本の骨格を作った人ではありませんが、一方でやはり戦犯として巣鴨に入った人でした。

一例を挙げましょう。

小泉は何故あそこまで「郵政改革」に血道をあげたのか。それは地方の特定郵便局が角榮の集票マシンであり、地域への利益誘導型のシステムだったからです。

晋三は第一次内閣のときにこの小泉改革を骨抜きにしています。やっつけることは田中や竹下と同じで、税金を自分勝手に使うことに何の抵抗もない人なのです。

「公共事業―住民置き去り」、十二月三十一日の朝日新聞朝刊は「先ず土建屋ありき」と報じています。

これがアベノミックスの正体です。

孫どもに負の遺産を残したくない

山縣 正靖

わが『悠遊』の編集子は人をそそのかす名人である。去年のお題は「日本再生のために」で、会員一同頭をひねり、更にそれはサロン21の「日本の目指すべき方向」に引き継がれて喧々諤々、活発な討論を呼んだ。かく申す私も皆様から大いに学び、刺激を受けた。この辺で個人としても一旦中締め、総括をしておかねばと思っていたら、編集子ご指定の今年のお題は「残したくない負の遺産」ときた。

これは小生も目の当たりに見たことであるが、日本国民は戦後に過去からの負の遺産を二つ清算している。一つは小作制度の清算、農地解放である。もう一つは東条、岸内閣のとき頂点に達した軍部、新官僚支配体制の清算である。

これらの清算の後の戦後体制の下、日本国民は自由闊達に経済活動を行い、見事な芸術、娯楽、信仰、体育、

言論活動を展開した。新体制には欠点もあれば情勢の変化もあったが、日本人は応用・運用の達人である。その都度うまく対応して、たとえば精強なる自衛隊も育て上げた。

小生は、国民に自由闊達な活動や生活を保障する現在の体制を孫達に残してやりたいと思う。無謀な戦争に散った三百万の英霊がわれわれに残して下さった、世界に誇るべき遺産だと考えている。

しかし、土地を取り上げられた地主の系譜、栄光を奪われた軍部、新官僚の系譜には別の考えもあるだろう。今の日本は駄目だ。昔は良かった。昔の美しい日本に戻せと。概してこの系譜は対外強硬論、国内強硬派である。他方、昔の体制の下で徹底的に抑圧された系譜には、抜き難い不信感、抵抗がある。自衛隊すら認めないという極論まである。

最近、奇貨として政権についた党派が猛然と一挙に先祖がえりを図り、それが久しぶりに反対運動を誘発。両極論が対峙して国論おおいに乱れるの感がある。国民はどうすればよいのか。考えてみれば両極論派はおのおの

人口の10%位だろうか。残り80%の一般国民としては、これほどの一大事、両派は一体何を狙っているのか判りやすく説明して貰い、「万機公論に決すべし」といきたいものだ。

ところでこの対外強硬派は日本だけではなく、中国にも、ロシア、米国にもいる。何度も戦争をやってきた国には、その間に力をつけてきた有力な軍部の系譜が存在する。

その国が不景気になると対外強硬派が国政を握り、国民の不満をそらすために、外国を悪者にして外国を攻撃、挑発してくる。挑発された側でも、その中の対外強硬派が挑発にのって深みにはめられてしまう。世に戦争が絶えないのは、どの国も対外強硬派を内蔵しているからである。

さて、日本の再生のためには、サロン21でも挙げられた諸問題の解決が迫られている。失敗すれば孫達に負の遺産を残すことになる。多くの問題があるが、小生は次の四問題を取り上げたい。

(1) 国内産業が価格競争力で敗れ、新製品開発競争でも劣後して、国内産業が衰退しつつある。恐ろしいのは、早くも貿易収支が赤字に転じたことである。

(2) 農業が価格競争で劣後し、さらに高齢化が進んで、生産が減少しかねない危機にひんしている。

(3) 財政破綻、後世に天文学的な借金を残しつつある。国力が衰えると国債は空売りのターゲットになるだろう。

(4) 中国が凶暴な帝国主義国家になり、日本、アジア、アフリカ、そして米国まで侵略の挑発を受けている。歴史上かかる凶暴な帝国が長続きた例はないのだが、すくなくとも今後二〇年間は、この脅威に対峙していかねばならない。

これらの問題をどのように解決するか。編集子はわれわれに解決戦略策定の覚悟を問うているように思える。われら企業OBは孫どものためにこの挑戦を受けて立つうではありませんか。念ずれば花開くとお釈迦さまも言うておられるではないか。

残すものは何か

野瀬 隆平

次の世代に残す負の遺産といわれて先ず思い浮かぶのは、膨大な国の借金であろう。確かに、国債の残高が大きいのは好ましくないが、思っているほど大きな問題なのだろうか。かねがね疑問を抱き、色々な場で私見を述べてきた。国債を買っているのは主に国内の銀行で、元はと言えば我々が預けた金である。従って、実質的には自分の金を自分で使っていることになる。

国債の残高をもって借金を残すと言うのであれば、国債に見合った「債券」を持っている人の資産も、同時に引き継がれることを勘定に入れなければ、バランスを欠く。更に、将来物価が上がり経済が発展するにつれて、相対的に残高は目減りするので、長いスパンでみると借金は膨大なものではなくなる。すぐ返すのでなければ、あまり大きな問題ではない。

残すのは負ではなく、むしろプラスの遺産の方が大き

いのではないか。よく耕された田畑は言うに及ばず、整備された都市のインフラ、病院や医療に必要なサービス提供のシステムなど。戦後の焼け野原から築き上げた資産をそっくり残してゆくのだから。このような主旨のことであつた。

今回のテーマが、「我が世代の負の遺産」だと聞いたとき、私見に対して、それはおかしいのではないか、もっと負の面も直視しろと言われたような気がした。

あえて負の遺産と言うならば、国債の残高よりも、原発を残してゆくことの方が、よほど重大ではなからうか。原発から出る廃棄物の処理方法さえ見いだせないままに稼働させてきて、間違いなく膨大な費用の掛かる後処理をすべて次世代に押し付けるのであるから。

ところで話は少し飛ぶが、今年の正月にイギリスの新聞『デイリー・テレグラフ』に、中国の駐英大使が寄稿した論説が掲載された。安倍首相が靖国神社を参拝したことにふれて、日本の軍国主義を非難するものである。それも、イギリスを始め世界的に広く知られている悪者

の象徴、「ヴォルデモート卿」を引き合いに出すという方法で。ヴォルデモート卿とは、世界的にヒットした小説で、映画にもなったあの『ハリー・ポッター』の中に出てくる悪役の魔法使いの名前だ。「軍国主義が日本に付きまとうヴォルデモートだとするならば、靖国神社はその国の魂の最も暗い闇を表わした分霊箱のようなものだ」と言うのだ。

これをきっかけに、世界各国の中国大使が、同様の非難を次々と始めた。中国のこのやり方は是非はともかく、我々の前の世代が、70年も前に行った行為が消え去ることなく、未だに日本を非難する材料として残っているのである。

我が世代に直接の責任はないかもしれないが、あの戦争のことを真摯に考え総括して、隣国とのわだかまりをなくす努力をしてこなかった。むしろ問題を直視せずに逃げてきて、次世代にまで禍根を残してゆくことは、我々の大きな負の遺産と言えるのではないか。

ここで、全く違う次元のことだが、先ずは次の文章を

読んでいただきたい。

「あなたはいつまで生きるのですか。我々の将来を語り、我々の現在を潰して、あなたは今を生きる。あなたの語る若い人はどこに？ あなたの言う未来は誰のために？ 政治が悪い。企業が悪い。社会が悪い。世の中、思いやりがないとかいろいろ言うけれど。全部、あなたへの言葉だとなぜ気づかないのですか？」

これは、「800字文学館賞」に応募してきた作品の中の一部である。20歳の若者が我々世代に投げってきた厳しい言葉だ。

自分たちで築いてきたと思っているものに対しても、
「勘違いもはなはだしい。あなたは偶然その時代に生まれただけなのです」

ということになる。

一部の偏った考えの持ち主なのだろうか。いや、少なくともこの様に考える人を生み出したこと自体が、我が世代の負の遺産かも知れない。

負の遺産 安倍内閣

大越 浩平

「人間の心理を考慮しながら、経済を分析する必要がある」。ノーベル経済学賞を受賞した米エール大学のロバート・シラー教授はそう主張し、ITや住宅バブルに警鐘を鳴らした。

安倍首相は、米国レーガン大統領の経済政策が「レガノミックス」として流行した造語に倣い、自らの経済政策を「アベノミックス」と称した。意に添う人物を日銀総裁に据え、「異次元な金融政策」を行うとして、日銀に市場の国債を購入させ、代金を市場に大量にばらまくと言った。「お金がばらまかれれば、お金の価値が下がってインフレになる。それなら今のうちに物を買おう。円安ドル高になる筈だから株も上るし、輸出関連企業は儲かる」と国民に思わせた。アベノミックスが発表されてから政権交代まで一円の緩和も行われないのに、ドルも株も大幅に値上がりした。先を見越した海外マネーの仕業だ。

株を持っている人々や、証券会社、自動車産業は喜んだ。円安で輸入物価は上昇し、消費者物価も上がり、インフレ効果も見込まれる。そして今、政府、日銀、銀行では大量の国債が売買され、政府の借金は膨張し、銀行には現金が唸っている。政府は大企業に、賃金を上げてくれと頼んだ。非正規労働者とは益々賃金格差拡大となる。そして今年は消費税増税だ。そもそも増税の目的は、社会保障制度の存続と膨らむ借金の解消、財政の健全化だった。しかし消費税増税関連法の付則一八条では、増税で財政にゆとりができた際には「成長戦略および事前防災・減災に重点配分する」とある。麻生財務相は、一四年度予算案決定後、「財政健全化と景気回復、どちらの優先順位が高いかといえば、経済成長」と言った。結果、公共事業関係費は前年比一二・三%増となる。加えて復興特別法人税の前倒し廃止と、大企業の交際費減税で接待を盛んにする方針を打ち出し、法人税減税を目論む。景気は上向き、デフレも収まると、安倍提灯記事が氾濫し、政権の高い支持率に貢献している。

果たして実体経済は成長しているのか。だが今、銀行

から金を借りる企業は少ない。国内で投資に見合う需要が見えないからだ。マネーの行き場がなく、この金が投機市場に流れたら、国民は、国はどうなるのか。

安倍内閣は高い支持率をバックに、舵を大きく右に切り出した。「改憲と戦争の出来る日本への流れ」だ。集団的自衛権に反対する内閣法制局長官を容認派に替えた。

また、首相に近い人物がNHK会長に就任。就任会見では従軍慰安婦、尖閣問題等、安倍政権の主張と同じ発言を重ね、放送の中立・公正性に疑問を残す。言論誘導、御用放送化の臭いがする。

極め付きは「特定秘密保護法」の成立だ。昨年の参院選の自民党選挙公約に、「特定秘密保護法案」の文字は無い。遺憾の意を表明したのは、先の戦争を体験した国民、文化人、学者だ。地方の公聴会では七名全員、参院の参考人質疑の三名全員が、慎重姿勢を示すなか、法案は国会提出から一カ月、修正審議二時間で、「何が特定秘密なのか」も不明のうちに強行採決された。

石破幹事長は二〇〇五年の著書で、「報道の自由、知る権利と言うが、我々には知らせない権利がある」と書

いた。そして昨年、自身のブログで特定機密法反対や脱原発デモについて、「単なる絶叫戦術はテロ行為と変わらない」とデモを敵視した。後に撤回しているが、本音であろう。そして昨年末、安倍首相は靖国神社に参拝した。近隣諸国が懸念を示している参拝には、配慮を示すのが大人の政治だ。首相は「鎮霊社」で、「不戦の誓い」をしたという。だが今年の自民党運動方針案から「不戦の誓い」は削除され、「積極的平和主義」と「国際貢献」が新たに加えられた。事前の話し合いで処罰される「共謀罪」の創設が検討され、武器輸出推進が閣議決定されるだろう。既に政府見解を転換し、人道上の理由として韓国に弾薬譲渡を決めた（韓国国内より批判が出て国連に返却されたが）。また自衛隊を「国防軍」に名称変更するという。首相は株価を毎日チェックするといわれる。ケネディ大統領の父親は、「靴磨きまでもが株の話に夢になっっている、これは異常だ」と、株を手放した。安倍内閣の中枢は戦前の戦争推進派の二世、三世の世襲達だ。安倍内閣は「民が国家の主である」という民主主義を知らない。「我が世代の負の遺産」そのものである。

「我が世代の負の遺産」を残さぬために

上田 信隆

物事は完璧に進むことはなかなか難しい。人生においても、およそ自分の思うように事は進んではくれない。政治の世界でも、自分の押している政党は、政権をとつてもなかなか思うようには機能しなかった。まあ日本人はせっかちなので、すぐ結果が欲しいのかもしれないが。

私の祖父は私が小学五年生の時に七十二歳で他界した。父はそれよりずっと若い六十二歳で、呆気なくこの世を去った。決して長命とはいえぬ父方の家系ではあるが、私は今年七十三歳を迎えようとしている。出来れば傘寿、卒寿に挑戦しようと頑張っている。決して長生きだけをセールスポイントにしたいわけではないが。

祖父も父も芸術家（彫刻家）であつた。私が中学生のころ父から「お前は将来なにになりたいのか？」と聞かれて、「小説家になりたい」と言ったら、猛烈に反対されたのを覚えている。芸術家は経済的な苦勞が絶えない

ことが主な要因だと理解していたが、私はそれでもなぜそんなに反対をするのか不可解でもあつた。少々の反対があろうとも押し切るほどの情熱は、私にはなかった。しかしながら、最近父が私の才能を見抜いていたのではないかと考えることがある。そのことは大変ありがたい判断であると思うし、よい結果をもたらしたと父の判断に感謝しなければならない。

どのジャンルでも、プロと称するには高いハードルがある。才能と努力と運の積み重ねあつてこそ人に認められるのだと思うが、受験などの短期の勝負とは違った、毎日のリングの世界はそう簡単には結果が出ない。先代は生涯を通じて芸術の世界で生きる難しさを知っていたに違いない。父は私と同じように反対されながらも、隠れて天井部屋で彫刻の勉強をしたという。私などはこと芸術においてそれほど覚悟もなければ才能もなく、まったく先代には齒が立たない。よく鷹が鷹を生むというが、鷹のままで今日を迎えている。ときどき「子は親を超えられない」と思ったりもする。平凡な生活を送らせたい親の判断は適切ともいえる。親としては、子供に好き

なように生きさせることもひとつの選択だが、子供の才能を見て身の丈にあった選択をさせることも時には大事だろう。

さて本題である「負の遺産」は充分に気を付けなければならぬ。「負の遺産」は、油断をすればここかしこに生じてしまう。「負の遺産」とは相対的に見て後世が決めるものだと思えば、私たちは今をどのように過ごせばよいかを課題として突き付けられている。正解などは多分ないであろう。

戦後、私たちは民主主義のもと自由に経済成長を謳歌してきた。基本的人権は守られて、確実に生活は向上した。特にひもじさを体験した世代においては、飽食は目指すべきひとつのステータスでもあった。しかし日本人が絶好調を迎えた時、見事にバブルがはじけ、長い「失われた時代」が始まった。阪神淡路、東日本大地震にも見舞われた。時代は平穏には推移してくれない。

グローバルな世界観をもちたいと思えば、隣国は次から次へと過去を穿りつけて、我が国に非難を浴びせてくる。いいかげんにしやがれと日本人なら誰でも思うに違

いない。反省すればするほど相手は突いてくる。無視しても開き直っても咎めだてられる。完全に苛めの世界だ。「負の財産」と思うから、腰が引けるのかもしれない。どこの国でも過ちは犯しかねない。原爆を落とす非難より、落とされた非難が優先された歴史を、私たちは押し付けられた。その代わりに民主主義という果実を手に入れた。「負の遺産」と引換に、何倍もの遺産を手に入れることが出来たのだ。

「我が世代の負の遺産」を残さぬためにも、私たちは人の意見に耳を傾けなければならない。結論的にいえば、国も個人も真摯にものを見つめて行動するべきだ。何事も諦めずに一生懸命に生きなければ神は手をさしのべてはくれない。明日の心配もさることながら、今日の現実はどう対峙するかが一番大切なことではなからうか。残念ながら誰も助けてはくれない。「負の遺産」を残さないために、これからも覚悟をもって生きていかなければならない。その結果を後世はきっと評価してくれると期待している。

我が世代を生きて

安藤 晃二

人は皆、世代の子供である。空襲警報が鳴り、防空壕に飛び込んで息をひそめる、そのうち終戦となった。翌年入った小学校の入学式、誠に不思議な話ではあるが、教頭先生が衣冠束帯姿で、奉安殿から教育勅語の巻物を押し頂いて、講堂の壇上の校長へ捧げ渡す。「朕思うに皇祖皇宗……」昭和二十一年は混乱を極めていた。

校庭の朝礼では、炎天下でぐずをしている生徒が教師に呼び出され、衆人環視の下、往復ビンタを張られた。

その頃、校長は県庁所在地のGHQの出先に頻々と出張した。帰ると、朝礼のメガホンを高鳴らせて、校庭を合衆国に例え、柳の大木辺のジョージア州出身の、GHQ担当将校の人となりや、アメリカ札賃の話が連日続いた。時を同じくして、ビンタの先生、鬼のように厳しい女教師までもが、手のひらを返したように、優しい先生方に変貌した。恐らく心中大いなる混乱を感じながら。

教育がこの変化に耐え得たとは、とても思えない。やって来た進駐軍を大人達は沿道を埋めて大歓迎した。

日本中の小学生達が等しく目撃したに違いない時勢の変化の中で、大勢におもねる人間の姿勢を肯定する生き方が、小学校低学年という時期と相俟って、後に大人となる我が世代の生活態度や思考を支配する底流として、無意識の世界で擦り込まれたとは言えないだろうか。

終戦時の幼児達は、戦時教育を叩き込まれた兄貴共や、数年後に現れて兎角体制に抗う動きに出た「団塊の世代」と比べても、微妙に「常識的」でおとなしい大人に育っていたのである。

その後の我が世代の戦場は、高度成長時代にあった。企業論に支配されつつ、全世界に雄飛せんとばかりにひたすら働いた。「国破れて山河在り」の状態から、驚くべき産業社会が実現した。しかし、この数十年の歴史を振り返るとき、日本人として言い知れぬ無念さとも思われることが多々ある。

ある日、会社の財務部に、「専門家の意見」を求めて電話をする。為替の動向を問うと、案の定「判らない」

と正直な答えである。一九八五年、プラザホテルでの大蔵大臣の記者会見を思い出す。主要国の合意を意気揚々と報告していた。それから二、三か月の間に、一ドル二六〇円前後の対ドル為替レートは、一四〇円台の大幅円高に雪崩れ込んだのである。世界第二の経済大国は、地球上の隅々まで進出しながら、未だかつてしぶとい金融政策の仕かけ手の側に回ったことがない。グローバル経済の主役を任じつつ、常に犠牲者の立場に甘んじ、打たれ強く働き続ける。世界のあらゆるレベルで台頭する欲望の権化、シャーク達に対抗し、日本がイニシアチブを発揮する為には、明治以来の対欧米翻訳文化を超えた領域での対応能力や問題解決能力が求められるのだが、その道は未だ遠い。我々は平和な時代に尖兵として世界に送られながら、その意味での成果はいま一息であった。「居場所がない」反乱軍としての子供達の叫びに、ある日親たちは愕然とする。学校では「いじめ」が横行する。この様な現象は社会の在り方と無縁ではないどころか、それを映し出す鏡なのである。ワーカホリックだった我々は仕事の忙しさにかまけて、家庭で子供達の心の

豊かさにどれほど寄与することができただろうか。

若者の晩婚化、高齢人口の急増に伴う介護の諸問題、出口の見えない原発問題など、社会は深刻な問題に直面し続ける。働き詰めの我々の将来には一条の光が見えていた筈であった。しかしそれは今や暗澹たる雲に覆われ、不安は募るばかりである。この素晴らしい精神文化の伝統を受け継ぐ日本で、人々が幸福感から遠のいて行く。

敗戦という極限状態から我々を育ててくれた親の世代を引き継いで、我々は未だこの国の将来に納得の行く道筋をつけていない。だが、自虐的にはなるまい。The end is near ではあるが、夫々の経験を以て、命ある限り、進化を求めて政治に参加しよう。そして若者達を励まして行こう。私は「今時の若者は」などとは余り考えない。満員電車のシルバースーツに陣取ってつけまつ毛の手入れに余念がない若い女性は頂けない。しかし、若者の緊張感に満ちた軽快な動き、スポーツ選手達や慶弔時の若者のしっかりとした挨拶にしみ出るものを感じる。我々のバトンを引き継ぐ若い世代、グローバル人材も多く、期待して余りあるものがある。

禍福はあざなえる縄の如し

門屋 信行

時は六十九年を遡る。

これが私の人生の始まりである。敗戦の色が濃い昭和十九年、海軍軍人であった父の横須賀の官舎で生まれた。すでに四人の兄弟がいた。最後に生まれたのが、双子の兄妹であった。母はさぞかし驚いたことであろう。ほどなくして敗戦を迎えた。軍隊の解体により父は失業し、兄弟はそれぞれ親戚を頼って各所に疎開していたようである。一歳の私に当時の記憶はない。戦後は父の船舶操縦技術を職業の武器にして、民間船に雇われて転々とした。八戸、大湊、加古川と。ようやく落ち着いた先は母の実家、原町（沼津市）であった。私たちの人生は全てを失った状況から始まった。戦後の混乱期は地方の家族や親戚の温かい懷によって支えられてきた。二〇年が経ち、昭和四〇年頃から若者たちが都市部に集まってきた。国家目標である経済成長を支えるためであった。

国民皆の努力の甲斐があつて日本は目覚ましい復活を遂げた。というよりも更なる繁栄と成長を遂げた。

新幹線、高速道路、東京を中心にした高層ビル群、住宅建設などのインフラ整備、豊富で多様な衣類や食料、教育の大衆化、衣食住とインフラの充実などにより、先進国中二位と言われるまでになった。国家目標である経済成長の賜物である物質的豊かさは、極限に達したといえるまでになった。これらは正に国家目標とした経済成長の遺産と言えるかも知れない。しかし、経済成長の陰に隠れて喪われてきたものにも気付く。自然破壊、河川の汚れ、山林の放棄、個人主義の蔓延による人間関係の希薄化、家族の崩壊、地域の崩壊などである。その後はバブルが崩壊し高度経済成長はストップした。それを政治や経済の世界では「喪われた二〇年」と呼んでいる。行き着いた繁栄の後のショックに狼狽し、過去への回帰にのみ固執したことによる、未来への創造性の欠如であったと言う方が正しいだろう。しかし我々は何を喪ったのだろう？ その間の実質GDPは増え続け、二〇年前の一・二倍に増え続けているのである。

喪つたものは経済成長目標であり、豊かさへの過剰な依存願望である。それが停滞したことによる自信喪失の時代がしばらく続いたのが、この二〇年間であった。そこで夢をもう一度と登場してきたのが、アベノミックスなる復古調の経済成長政策である。掛け声だけの政策の効果で株式市場だけが囃してている。しかし経済的な豊かさが人間の幸福感にどれほどの満足をもたらしたであろうか。私たちはもはや充分に学んだはずである。経済的豊かさは幸福をもたらす切り札ではないことを。そして「正」の遺産作りにまい進しながら「負」の遺産を積み上げて来たことを。工場や企業のない過疎地に危険な原子力発電所を作るため、札束で横っ面をひっぱたいて黙らせて誘致に協力させ、ひたすら東京や地方の大都市に電力を供給させる政策を行ってきた。福島第一原発の事故が無ければこの政策はうまくいったと考える人がいるかもしれない。しかし地震や津波が発生しなくても原発の危険性とはつくに分かっていたのだ。経済至上主義のもと眼をつぶってきただけではないか。電力供給という大義名分を振りかざし、原子力産業の育成に手をか

してきたのだ。国家目標という大義のもとに。そろそろ国家目標という大義から距離を置いた生き方に変えてみよう。人間としての新たな価値観の創成が必要である。さて、喪われた二〇年の後に生まれてきた子供たちに眼を転じてみよう。その子たちも二〇歳代になってきた。彼等の顕著な特徴は優しいことだ。いたずらに他人と競争しない。大企業に就職することや出世して経済的な豊かさを追求するよりも、自分の心からの生き方を探している。この時代の若者を元気がないとかやる気が乏しいと非難する人を見受けるが、彼らは企業戦士から離脱しただけである。私が関係するNPO団体に参加してくる若者たちを観ていると、彼らの人生観は経済的豊かさの追求よりも、自己実現の追求、自分の価値観に根差した生き方を探している。経済至上主義が残した多くの「負」の遺産があったことは、紛れもない事実である。しかし「喪われた二〇年」という世代の若者たちは、まさにその時代だからこそ生まれてきた日本の「正」の遺産である。「正」の遺産か「負」の遺産かは、まさに「あざなえる縄の如し」である。

「いいとこ取り」の文化

野上 浩三

二〇一三年一二月、特定秘密保護法が多くの反対意見を退けて強硬採決された。国際社会で重要な情報を得るために必要な法律であるという立法趣旨は理解できる。

しかし問題は、弊害を阻止する措置が二の次にされたことであつた。立法手続きも非常に拙速であつた。

わが国は多くの制度を欧米から輸入したが、その都度「いいとこ取り」を行なつてきた。都合の良い部分だけを模倣し、制度に付随する厄介な部分（負の部分）は軽視してきた。特定秘密保護法でまた悪例が増えた。

同様に国の骨幹に関わる「いいとこ取り」の例として、民主主義の基本や日本銀行の独立性がある。

民主主義の基本については、権利意識は根付いたものの、義務の観念は定着していない。総選挙における投票率は低く、官尊民卑の精神風土が未だに残っている。

日本銀行の独立性は、物価安定という重大な任務を遂行するために不可欠である。しかし、わが国では日本銀行総裁の任免が時の政権によって恣意的に行なわれ、日本銀行の独立性を脆弱なものにしている。

福島原発事故の直後に新聞に載つた次の発言は事故の本質を突いていた。

「原子力には核兵器や事故災害という負の部分が常につきまとう。原子力の技術は我々の世代から次の世代に引き継いだと思うが、負の部分への思考を引き継げなかったのではないか」

発言者の笠井篤氏は日本の原子力開発に創成期から携わつた研究者であり、原子力開発機構の研究室長である。

福島原発事故の場合は負の部分が、皮肉にも大災害で万人の目に明らかになった。しかし、負の部分が闇に葬られている事例は枚挙に遑がない。会社経営の分野では、株式会社制度と株式の時価発行制度がその事例の筆頭である。

株式会社制度には取締役会と業務執行役員陣という二階層制が備わっている。前者が経営の基本方針を作り、後者がその方針に従って業務を執行し、前者がその業務執行を監督・評価するシステムである。

このシステムは取締役会と業務執行陣の間に独立性が確保されて初めて機能する。ところが、わが国では便宜的に代表取締役社長という機関が設けられた。代表取締役社長は取締役会と業務執行陣の双方に対して圧倒的な権限を有する。これでは企業統治機能が発揮される筈がない。

株式の時価発行制度は、企業の国際競争力を強化する目的で一九六八年に導入された。それまで新株の発行は額面（多くは五〇円）に限定されていたが、時価で発行できるようになった。この変更は資本市場や金融市場に甚大な影響を及ぼす革命的なことであった。しかし、弊害を防止するための立法措置はまったく講じられず、甚だしく基本を逸脱した時価発行増資が横行した。

①人為的に時価を大幅に高めて新株が発行された。

②一九八六～九〇年の五年間に七〇兆円という巨額の資本が調達された。③その資本の相当部分が株式などへの投機に流用された。その結果、未曾有の大金融バブルが発生し、その崩壊によってわが国は大不況に陥った。

「いいとこ取り」の文化を根付かせた原因は二つ考えられる。

一つは、戦後の経済復興の成功体験である。復興の過程では既成の制度を取り入れるだけで復興は成功した。その成功に自信を持ち過ぎた結果、その後「負の部分」を重視すべき段階に至っても、「いいとこ取り」が続けられた。

一つは、制度は一旦導入されると既成事実化し、その当否が再吟味されることが無いことである。その典型的な例が代表取締役社長制度や時価発行制度である。

この事態を改めるには立法府の率先力が必要不可欠である。そしてその為には、二大政党体制が確立して相互にチェックし合うことが必要である。

良くも悪くも「団塊」

首藤 静夫

僕ら団塊組が若いころは、フォークやグループサウンズはじめ歌謡全盛の時代であったが、若者の誰もが知っていた歌がある。北山修作詞『戦争を知らない子供たち』と寺山修司作詞『時には母のない子のように』である。

紙面の都合で多くは紹介できないが、前者は、

（♪戦争が終わって僕らは生まれた 戦争を知らずに僕は育った……）。後者は、

（♪時には母のない子のように 黙って海を見つめていたい……）。

これらが僕らベビーブーマーの若いころの精神風土だったという、単純すぎるだろうか。ちなみに後者の寺山は昭和十年生まれ。父親は戦病死し、母親が苦労を重ねて育てたという。彼は自分のことでなく、僕らの世代を詠ったのだ。

こうして毎年二百五十万人以上が青春を謳歌し、社会

に出て行った、僕もふくめて。

年月が経ち、社会にもなじんだころ、会社のある重役が言った。

「君たちを見ていると金太郎飴みたいだなあ……」

どこを切っても同じ顔しか見えない個性のない集団。反面、均質で行儀よく、大量ゆえに拡大発展期には大いに役立つ、といったかったようだ。

僕らが社会に出たころはあらゆる分野で路線がすでに敷かれていた。政治や経済・労働・社会・文化のすべてにわたり、前世代かその以前に方向は固められていたのだ。僕らはその中を大勢で同じ方向に駆けさえすればよかった。逆走したり、横に走ったりしてはいけない。大都会の駅から毎日吐き出される人々のように、同一方向に進まないと迷惑がられるのである。

冒頭の歌がはやっていた昭和六十年代後半から七十年代初めは、若者のエネルギーが爆発した時期だった。学園闘争や反戦闘争・安保闘争・文化闘争と「闘争」だらけだった。遅れて生まれてきた世代がこの時とばか

りに飛び跳ね、短期間で、散つてゐった。最初から予定していたように……。一生ぶんのエネルギーがここで費消されたかのようなのだ。

それでもその後がなばつて世代の名を上げるのに貢献している人達的一端をご紹介したい。少し広げているが、

政治 菅直人、鳩山兄弟、海江田万里、舛添要一
起業家 柳井正

作家 村上春樹、北方謙三、赤川次郎

画家 ヒロ・ヤマガタ

碁・棋 中原誠

芸能界 ここだけは山ほどいる

八百万人以上生まれた団塊世代だけあつてすごいものだろう。特に政治分野の質・量の豪華なこと……。

結局、団塊世代とはマッスの強さと弱さであるといえるだろう。狙いが定まった時の爆発力や足並みを揃えやすい同一性は、経済成長の申し子にふさわしい。こうして大量生産と大量消費に貢献したのだ。

またマッスへの帰属性というのか、嗜好・行動が不思議

議なほど似通っている。ゴツゴツしていないから個として目立つ人材が少ないといえる。

平和な時代に育った者の特徴といえればそれまでだが、同様の傾向は以前にもあった。

大正期に生まれ、「大正ロマン」で育った世代がそれである。白樺派文学に代表される、自由主義・理想主義・エリート主義の時代思潮の中で育ったひとたち。第二次大戦の後まで明治生まれの風下におかれ、彼らも遅れて来た世代であつた。一兵卒で戦争最前線におかれたのも彼らだ。彼らはちょうど僕らの親世代にあたる。親子二代で似た育ち方をしていることになる。

僕らがいなくなったあと、若返った日本に戻るだろう。もはやマッスに頼つてやみくもに突き進む経済・社会はかなわない。日本は経済大国でなくなっているかも知れない。かつてのスペインやオランダのように……。しかし、その方がハッピーなことだつてあると思う。今の内からその心構えと準備を行つておいてはどうだろう。

「超」が過剰 Too Much

西川 武彦

超高度成長で「Japan as Number One」ともちあげられた拳句、風船が弾けてからまもなく四半世紀たちます。一人当たりGDPで頂上から滑り落ちたとはいえ、世界的に俯瞰すれば、豊かさが溢れる国には違いありません。物は溢れ、どこでも相対的には清潔で安全です。

ただし、経済成長より大事なものを見出せないまま、社会全体が超混迷し、寂しく漂流している感じが拭えません。

我ら卒サラの高齢者男性は、現役時代、夜の「蝶」が大好きでしたが、前述のような環境で育った今の若者たちは「超」がお好きなようです。超カワイイ、超ダサイ、超カッコイイなどが、会話の骨格を成しているといえるかもしれません。義務を忘れた権利と自由が身に染み付いてふわふわと浮かれ、超ジコチュウの誤った個人主義がはびこる。

世界に冠たる物づくりは健在ですが、近隣諸国の躍進に拮抗すべく、家電、車をはじめ、とにかく性能の進化は止まることを知らないようです。これでもかこれでもかというように、超精密で超精緻な装置が次から次へと誕生する。使う方がついていけないほどです。

高速道のお休みどころやホテルのトイレットなど、助けがないと「用が足せない」ほど、超精巧な造りになっています。サービスではなく、お客様がServiceする（仕える）態様といえなくありません。

交通機関が分刻み・秒刻みのダイヤで運行するのはありがたいものの、それが過ぎて動きがとれなくなることもままあるようです。電車で飛び乗ると今度は、分刻みで音量が超大きいアナウンスが止めどなく続き、心身が休まる暇ありません。車内を見渡せば、公德心のおかげでもないような若者たちがずらりと座席を独占して、超横並びでスマホに超夢中です。

「超」は若者だけではありません。警官、お役人、では裁判官までが超弛緩してセクハラする有様。勿論、やられる方も超無防備ではありますが……。

俺々詐欺や振り込め詐欺だつて世の中の超弛緩の象徴といえなくもありません。

電車を降りて街中を歩けば、スマホに嘯りつきながら歩いたり自転車走らせたり族(やから)で超危ない。溜息ついて空を仰げば、超派手な色彩のどぎつい広告・看板が目飛び込んでくる。ナビが普及して、ネットで誰でも簡単に調べられるから、「お店はここにあるのが分からぬのか」と言わんばかりの広告も看板も幟もいらぬのに……。お洒落心が超欠落しているのです。疲れきって帰宅してTVをつければ、賑やかなCMが分刻みで続きます。「0120……どどうぞ」と超しつこく誘いかける。好評なドラマなど、五分間隔で長いコマーシャルが入るから、筋書きを追うのが超苦しいほどです。このように弛みきった社会に現われたのがアベノミクス政権です。消費税8%とデフレ退治を餌に、国家予算を史上最高にまで超膨張させました。積極的平和主義とやらで、国家安全保障会議を設置、特定秘密保護法が立法化されると、次いで解釈改憲による集団的自衛権などが視野に入ってきました。脱原発の見直しも……。

昨年の後半からあれやこれやが続いて、法学者軍団、有識者という怪しげな種族(識者というより、「色」がついた一族と呼べなくもない)、日本ペンクラブ、国際ペンクラブ、内外のマスコミ、民衆のデモ、エトセトラで世の中が沸きました。直下型大地震などの天変地異よりも怖い尖閣でいつ火がつくかわからない情勢もあります。さすがにSilent Majorityも少しざわついています、超冷めやすい国民ですから、いつまで続くやら心配ではありません。あつと気がついたときは引き返しができなくなっている？

といった状況のなかで、幼稚さとおごりが共存するかに見える宰相のもと、御国が超右よりに走って再び破滅の悲劇を迎えないよう、超熱しやすく超冷めやすいマスコミを叱咤激励し、あるべき国のかたちを求めて世の中になにかと発信するのが、インテリジェンスに少しは長けた当ペンクラブの役目かもしれません。

経済でも、超バラマキが再登場して土建国家に戻り、二〇二〇年にまたも風船が弾けるなんて御免蒙りたいものですからね……。

医薬品開発のジレンマ

玉山 和夫

安倍内閣は医薬品の開発を成長戦略の一部として掲げているが、果たして可能であろうか。今回大きく新聞記事にもなったが、ノバルティスファーマ社が販売する高血圧治療薬「ディオバン」の臨床研究のデータが不正に操作されていたことが明らかになった。これは日本の臨床研究に対する信頼性を大きく損ねるなど、国益にもつなぐる重大なことである。

もともと高血圧の治療薬には、ARB、DRI、Ca拮抗薬、ベータ遮断薬と利尿薬とがあり、この各分類の中でも数種の薬がいろいろな会社から出されていて、非常に競争が激しい。この中でノ社が二〇〇〇年にディオバンを発売するにあたって、普通の方法で売ったのでは苦戦が予想された。それでねつ造したデータをもとに「降圧効果のみならず、脳卒中、狭心症、心筋梗塞などの発生を他の薬より抑える」という臨床研究結果を発表

し、これを基にディオバンの優位性を強調して販路拡大に成功した。ピーク時には年千四百億円を売り、今でも一千億円といわれているノ社の主力商品である。

ノ社は研究に関与した五大学の研究室に総額十一億円以上の寄付をしており、三〇八一人を対象にした臨床研究であったとしても金額が多く、会社と医学部との癒着が非難されてもいる。

しかし今回の事件は特にスケールが大きかったとはいえ、特異なものとはいえない。医薬品開発のジレンマが露呈したものといえる。

日本政府の予算は大学に研究費を十分に渡していないから、各大学の医学部は研究を継続するためには、臨床研究を引き受けることで製薬会社からもう委任研究費や寄付金に頼らざるをえない、すなわち治験がないと研究機関としての医局を維持できない状態になっている。

一方、製薬会社が新薬を市場にだす許可をとるには、少なくとも数百人に投与した結果が求められている。

治験を引き受ける医局は、多くの場合資金稼ぎのためと考えて重要視しないから、その仕事を若い医者にまか

せる。ところが彼は診療や自分の研究で忙しいので、依頼した製薬会社の社員に色々な面で頼ることになりがちである。治験データの整理などは手間がかかるので、カルテを見て社員が集計することもありうる。ノ社の例では、元社員が会社の利益の為にデータを操作したのではないかと疑われてもいる。

治験にあたっては新薬の有効性を確かめるために、既存の薬あるいは偽薬と比較する二重盲検試験が行われる。これは患者にも担当する医師にも、どの患者に新薬と既存薬のどちらが投与されたかわからない仕組みになっている。この試験で新薬が既存薬より劣っていると判定されると、その新薬は発売出来ないことになるので、製薬会社にとっては社運を左右する重大な結果になる。

そのため製薬会社はその新薬が効果をあげそうな地域あるいは患者群を選んで治験を行うよう研究室に内々依頼することもありうる。

また、治験を担当する医師には、どんな薬を患者に投与しているかわかなければ良心的な治療ができないと考える人もいる。新薬も既存薬も同じカプセルに詰められ

ていて外観は同じなので、カプセルをこじ開けるなどしてどちらの薬か判別する人もありうる。そして患者に投与して効果がなさそうと分った時に、医師は薬効の確立していない新薬を患者に投与することに疑念を感じ、患者の為を考えてほかの薬に切り替えることもありうる。こういう患者は治験の対象から除外されるから、もし二百人の患者を対象とする治験でこのような除外例が二人もであれば、新薬の有効率が2%も向上することになり、製薬会社としては望ましい結果が得られることになる。この例のように臨床研究が公正に行われていない場合もありうるのが、構造的なジレンマである。

日本はiPS細胞の基礎研究では先頭をいっている。しかし実際にひろく患者の治療に使う段階にいたるまでには、広範囲の臨床実験で有効性と副作用のないことを合理的に実証しなければならないが、日本でうまく出来るであろうか。臨床実験のジレンマをかかえている日本は、実用化の段階では米国などに追い越される可能性が高い。このジレンマの改善は容易ではないが、後世に負の遺産とならないことが望まれる。

わかつちやいるけど

新山 章一郎

昨年末の安倍首相の靖国神社参拝は、中国、韓国はもちろん、世界中から総スカンを食った。同盟国のアメリカにも、「失望した」とまで言わせてしまった。中韓両国のエゲツナイ宣伝で、日本の歴史認識が世界的に云々されるまでになっている最中のことである。これはまずい。

本来、自国のために命をささげた兵士の御霊を慰めるために、その国の首相がその靈廟に参拝しただけの話だ。実質的な影響という点では、中国の防空識別圏の一方的設定の方がはるかに重大なのに、この愚挙によりそんなことはどこかに吹き飛んでしまって靖国参拝ばかりが喧伝され、従来はそんなことに関心をしめさなかったEUまでが懸念を表明する事態に発展させてしまった。

太平洋戦争後の日本のイメージは、それ以前の侵略国家から一転し、まれに見る世界的な紳士国として国際社会に認められてきていたと思う。確かに日本は韓国や中

國の度重なる執拗な挑発にも、自国民から見れば齒がゆいほど極めて抑制的に対処してきた。韓国の大統領が行く先々で日本を批判・中傷して回っても日本はひたすらに沈黙を守った。そのおかげで事態は、同大統領の方が他の国々から「近所に悪口を言いふらす『おばさん外交』もいい加減にしたら」とささやかれるほどになった。対中国関係にしろ、日本はその抑制により、強圧的な大国にいじめられる軍事小国というイメージで、世界から同情的に見られていたようだ。これは国際世論上非常に大切だ。ところがこの愚挙によりその日本の善良なイメージは大きく損なわれてしまった。

国内の新聞にも「首相の靖国参拝で一変」というような見出しが躍った。首相の執念の靖国参拝はまさに国益の点から百害あって一利ない愚挙だった。その尻拭いのために日本は複数の高官を世界各地に派遣し、弁明これ努めている。莫大な国費を費やして…。

自民党系の保守政権は、その度にそれまでの外交努力を一遍にフイにするような莫大な国益を損ないながら、過去に何度も同じ轍を踏んでいる。まるで、「うん、知

ってるよ、やれば叱られることは。でもどうしてもやってみたかったんだ」と言う強情な駄々っ子のように。

なぜこのようなことが繰り返されるのだろうか。どうも保守系歴代の首相は、心の中では日本の過去の歴史を正当化しているようだ。しかし考えてほしい。あのころの日本は、今の世界における北朝鮮、イランそしてアサド政権のように国際社会から見られていたのではないか。

安倍首相は「侵略」という言葉の定義は定まっていない（ということとは日本の歴史は「侵略」ではないのかもしれない）と公言した。また保守系の中には、「南京虐殺なんて本当にあったの？」という人もある。歴史の理非曲直は軽々には判じがたいが、首相からすれば、植民地時代のヨーロッパ諸国の所業に比べれば日本の行為など児戯に等しい。日本の行為はこれら欧米諸国の侵略から東洋の国々を守るために起こした「聖戦」だったのだから、という気持ちがあるのかもしれない。

首相は「不戦を誓った」と言うが、そんなことは誰も信じていない。国のために尽くした英霊に参拝するのは、「我が国の発展安全のためによく戦ってくださいました」と

頭を下げるためだ。しかし、靖国に祀られている御霊の多くは、日本の侵略政策に起因する戦争の犠牲者であり、その御霊の前で「貴方がたが戦った戦争は侵略戦争でありました。今後そのような戦争は致しません」と祈るのは、彼らの行為そのものの根拠を否定するもので、その尊い死を冒瀆するものだ。更に戦犯の問題もある。確かに「靖国神社は不戦を誓うところではない」だろう。

よく、「殴った方はそのことを忘れるが、殴られた方は忘れられない」という。首相は「みんなやつてることだよ。あれが殴ったつていうことになるの？」と開き直り、後者の方は「殴ったかもしれないが、そんなにひどいことまではしてないよ」と言い逃れしているとしか思えない。殴られた方が「その点（歴史の認識）をはっきりさせろ」と息巻くのは当然だろう。

これは自業自得で仕方がないことだ。日本は国際社会が糾弾する過去をすべて認めて、謝罪すればいいのだ。が、それが嫌なら、せめて首相の靖国参拝のような愚挙は避け、なるべく日本の好ましくない過去を暴き立てるようなことを慎む以外に手はないだろう。

小さなハチドリ

大 平 忠

一九九〇年バブルがはじけて、その後の失われた二十年の間に、私たちは何度つぶやいたことだろうか。「戦後、親の世代も私たちの世代も、真面目にみんな働いたのに、日本はなぜこんなになってしまったのだろう」と。この言葉には自分は悪くないのという気持ちも込められている。私もそうだった。考えてみると、日本中多くの分野で多くの人々が同じことを言ってきた。

小学校四年のときに習った国語の教科書にこんなことが書いてあったのを覚えている。

「砂浜を歩くとき、足元を見て歩くと曲がつてしまう。でも、遠くの目印を見て歩くと真つすぐ歩ける」

私たちは足元ばかり見て歩いてきたのかもしれない。戦後、親たちの世代の歩き始めは間違っていないかと思う。敗戦後、復興のため貧困からの脱出のため、必死になって働いた。そうして私たちを育ててくれた。その

後、私たちは成人してさらなる豊かさを求めて忙しく働いてきた。そして物の溢れる豊かな国を作りあげた。

ところが、充足感はまるでない。幸いは山のあなたになお遠くとは思えない。GDPはGNH(国民総幸福量)を叶えるものではないことに漸く気がついたのだった。歴史を振り返ると、政治体制の如何を問わず、ローマ帝国から始まって豊穡さが人々を堕落させてきた。豊穡の權益を守る意識がすべてに優先してくるからだろう。人々は自立の気概が薄れ、国に甘えてきた。国は人々を甘やかし、巨大な財政赤字の原因ともなった。

一九四五年九月、永野護が講演した記録『敗戦真相記』は、なぜ無謀な戦争をし敗戦に至ったかを、冷徹かつ風格ある論調で述べている。維新以後の教育は、人間の鍛錬を忘れて知識・技術の習得を唯一の目標とし、その人生観は立身出世主義に墮するに至ったと説く。大黒柱のない家は暴風で吹き倒される。今後は新しい人格教育によって大黒柱を育てようではないかと熱く語っている。

ところで、今に至る戦後の教育はどういう人間を育て上げたであろうか。戦前と同じく知識偏重、出世はとも

かくとしてある程度の立身と安寧しか考えない若者を作り出してきた。私自身、大黒柱になろうなどと考えたことがなかった。もし、私たちの世代から大黒柱がもつと育っていたら、日本は豊かさに加えて品格ある国になっていたに違いない。この原因は、永野護が説いた人間の鍛錬が不足していたからだと考えるしかない。親の世代は貧困から脱出するべく必死に働くことで私たちを育て上げた。私たちは豊かさの土台の上に、遠くを見つめず、豊かな現在にあぐらをかいてしまった。子どもたちにも早くから遠くを見つめる教育を施すべきだった。遠くを見つめる訓練とは人間を育てることである。自然を見つめ、世界と日本の歴史を見つめ、人類の将来・未来を見つめ、他人の気持ちを見つめて思いやりの心と行動の勇氣を持つことであろう。

司馬遼太郎が『二十一世紀に生きる君たちへ』という言葉を若者たちへ贈っている。要約すれば、
「自然を尊敬し、自分に厳しく相手にやさしく、そしてすなおでかしこい自己を訓練し、科学と技術にのみこまれずに正しく支配し、たのしい君たちになってほしい」。

勇氣あるたのしい若者たちからこそ、札幌農学校のクラーク博士の言う「少年よ、大志を抱け」の大志が湧き出してくる。アメリカ、オレゴン州ポートランドのグラント高校にバム・ブラウンという先生がいた。その先生の言葉が好きで、ときどき若者に伝えている。

「どうか、一人一人自分で、闘う戦場を選んで欲しい。人種間の問題、移民の問題、地球汚染化、資源枯渇化の問題、神の名において殺し合う狂気の問題、世界の底辺でもがく人々の貧困、これらに立ち向かって欲しい。これは、ノーベル賞を受賞したマタイ博士の例え話であるが、『小さなハチドリは森の火事を消そうと、一滴の水を必死になって運ぶ』。どうか、あなた方も自分のできるベストを尽くしてください」

私は今になって、自分が「闘う戦場」を選ばなかったことに心が疼く。みんなとはいわない、ある数の者たちが大志をもつて、迫りくる問題を予見して立ち向かっていたら、今の日本はこうではなかった。若者たちには、詫びる気持ちとともに、どうか「小さなハチドリ」になつてもらいたいと切に祈るばかりである。

「耐えがたきを耐え」のお言葉

稲宮 健一

先の戦争は、「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び」のお言葉で終わらすことができた。軍人が始めた戦争を、軍人自身の決断で終わらせなかった。我々の中に、大所高所からの大きな決断を渋る心情が潜んでいるのではないだろうか。

判官鼻肩という心情がある。瀬戸内で繰り広げられた平家追討の絵巻とその戦果は、平家物語に、歌舞伎に、多く語り継がれ、義経は一代の英雄に祭り上げられた。しかし、この戦いで平家の貴族政治を都から離れた鎌倉で武家政治に変革した頼朝の方が、はるかに大きな歴史的意義を後世に伝えた。ところが、巷間の人気は義経にある。情にはもろく、冷徹な判断はお嫌いなのか。

「この印籠が目に入らぬか」。助さん・格さんのこのせりふで、水戸黄門の前に悪代官が平伏す場面で溜飲が下がると言って、人気番組の一つだ。多くの人は、自分を

含めた庶民には手の届かない権威が「正義の味方」になって、一部の腹黒い役人に苦しめられる庶民を救い、悪を誅する場面にしびれる。しかし、黄門様はあくまでも雲の上の人で、自分たちが黄門様と一緒に悪に立ち向かうという話にはならない。

戦国もののテレビ番組には、武将の武勇伝や城攻め、お城やお家を守るため一所懸命に尽くす場面がしばしば現れる。お家を守るため死をもいとわず頑張る姿に多くの人は共感する。この場合、殿様が直面する危機は二の次で、武士の忠勤の活動にスポットが当たる。

昭和十九年六月末の沖繩戦で、米軍の物量作戦を軍部は目のあたりにしている。にも拘わらず、あの「お言葉」があるまで、軍部は本土決戦の準備をしていた。長野県松代に地下壕を掘り、国の中枢部をここに移動して、戦争を継続する積りであった。最後の一兵まで戦う意義は何なんだろう。それはちょうど、城攻めにあった側が主君への最後の忠誠を示すための自己犠牲に似ている。

戦国時代では一つの軍団が全滅しても、他の軍勢が次の世代を担い、民族の継続は保たれる。最後の一兵まで

戦う論理は内戦で通用するものの、国際社会では通用しない。

日本に生まれ育った我々の心には、「判官鼻眞」、「水戸黄門のせりふ」、「お城の死守」などで代表される心情が深層心理として奥に埋まっている。その上部に普段の心情が覆い、一番外側に理性が覆っている。深層心理は動物的な感覚に近い面があり、無意識のうちに我々の行動を支配する。平常時にあつては、何らかの刺激で意識下から浮上した深層心理は理性と戦い、穏当な判断を引き出す。しかし、集団に対してこれらの深層心理をくすぐる誘いを繰り返し、長期間かつ多方面から続けて煽ると、その誘いに沿った共通認識が集団のなかで形成されやすい。この意識は頼もしくもあり、恐ろしくもある。そしてその誘いは、今は見えてないが、行く先が危険なあるいは自滅の方向に向かっているときでも、これを止めることができない。煽る方は多数で、阻止する方は少数なので、多勢に無勢。阻止は容易ではない。

修羅場であっても、情緒に流されることなく、長期展

望に立つて生き長らえる道を理性で判断できる人材を持つことは集団の宝である。日露戦争では民衆の強い反対があつたものの、世界の趨勢を判断して、講和に漕ぎ着けた。明治維新の時代には欧米の諸国との軋轢をすり抜けた逸材がいた。しかるに太平洋戦争では、維新の遺産を引き継いだ軍人を含めて、優秀な官僚にはそれが出来なかつた。同様に、今回の原発の事故でも、安全神話を妄信し、津波の危険が指摘されていたのに、責任者の誰一人としてこの危険を自分の課題として受け止めなかつた。

「売り家と唐様で書く三代目」という川柳があるが、一世代三十年として、孫の代六十年経つと、先人の遺訓は思つたようには伝わらない。六十年経つと世の中が変わっているが、祖父の代に果敢に挑戦した精神は生きている。その精神を訊ね生かして行こう。

お江戸日本橋

富田 佳瑞

昨年七月に母親が傘寿を目前に他界し、十七年前に夫に先立たれてから気丈にも老婆の一人暮らしだった実家が空き家になった。しかし、我々子供は全員夫々の持家でそれなりの地域に密着した生活を営んで居て、実家相続のなり手が無い。借家にするにも借り手が見当たらないので、当面は電気・ガスなど最低のライフラインは維持しつつ空き家の儘にして置き、その管理は最寄りに住んで居る弟と妹の随時訪問に任せることになった。

筆者は下手の横好きで油絵などを齧っているのですが、専用のアトリエにしてみようかなどと贅沢なことを考えないわけでも無かったが、如何せん場所が茨城県日立市と遠隔であり、やるなら単身赴任でと女房殿から宣告され、それも一興かと思ったが、元々炊事洗濯など生活能力が皆無なので、子供達からは冗談もいい加減にしてと一笑に付されてしまった。やはり土地家屋は、親父には申し

訳ないが売却処分するより仕方がなさそうだが、それが簡単な話ではない。

この家は父親が五十年前に地元の山林を開拓した新興住宅地に退職金をはたいて建てたもので、「家を持つのは男子一生の仕事」であった時代に育った親父にしてみれば、正しく一世一代のプロジェクトであり、間違いなく財形の計算もあつたはずである。

この地方も当時は宅地不足で開発ブームが吹き荒れており、市内や周辺の山林が次々と宅地化した。妹と弟もそのような場所に家を持ったが、二人とも日常生活にマイカーが欠かせない太平洋を見下ろす高台、筆者の少年時代にはそれこそ「兎追いしかの山」だったところに住んで居る。

しかし世の中変わってしまった。地元経済の衰退と人口減少・少子高齢化で、市内には空き家・空地が累々としており、土地家屋、少なくとも家屋は今や子孫にとつてお荷物にさえなつてしまった。かつては大企業の社宅などで占められていた本来住み易い旧市街地も、社宅の撤去と、市民の生活様式の変化で、集合住宅（所謂マン

ション）への建て替えが多く、土地の絶対需要は激減しているらしい。こうして日立は荒れている。

かく云う筆者は横浜の金沢区に住んで居るが、元はと云えば鎌倉の後背地を切り開いた新興住宅地であり、私も自然破壊の共犯者である。四十年前に移った時は周囲が造成中で、格好のショート・アイアンの練習場であったが、瞬く間に家が建って全山住宅で埋まってしまった。それが、当地も今や空き家が目立つようになってきた。

住民の高齢化が進み、介護施設や都市部マンションへ移る家庭が増えてきたが、今まで住んで居た土地家屋の処分がままならない。元々山の斜面を切り拓いて造成したので坂が多くて住み難いことも売れない原因らしい。横浜といえども需給バランスが崩れてきたのだ。宅地造成と共に出来た公園や散歩道も、今迄は手入れが行き届いていたが、昨今は雑草が目立つようになってきた。小学校・中学校も統廃合を繰り返し、市も運営に苦慮しているようだ。かくして横浜も荒れる気配が出て来ている。

お江戸はどうなのだろうか。東京スカイツリーが完成してから、テレビに東京を俯瞰するシーンが多くなった。

その度に思うのは、富士山の遠景も東京の夜景も見事な眺めだが、かつては緑したたる美しい原野であつたらう関東平野を、完膚なきまでに鉄とコンクリートで埋め尽くしてしまった文明の凄まじさである。

六年後に二度目の東京オリンピックがやってくる。東京の都市化と自然破壊が更に進むのだろうか、その分後世に残す荒廃の規模が大きくなるだけとかならなければ良いのだが。国破れても山河はあつた。世界遺産に登録されて国連の監視下で自然や文化を継承するのではなく、国民の知恵と努力で「美しい日本」を護ってゆきたいものだ！　そうでしょう安倍総理！

オリンピックで日本のオモテナシを世界に誇示するのなら、せめて日本橋の上に掛かった首都高速路だけでも撤去してはどうだろうか。あれは醜く恥ずかしい。外国からお客様がみえる前に玄関先ぐらい掃き掃除して、オモテナシの基本は整えておきたい。そして後の世代も感じるであろう屈辱的な首都のシミを一つぐらいは整形しておきたい。

地球の怒り

鵜飼 直哉

今から一〇〇〇年後、地球に残っている人類の末裔が発行する「地球史三〇〇〇年」の中で、我々二〇世紀の後半を生きた人類は地球を破滅に導いた犯罪者として描かれてしまう。

「地球史三〇〇〇年」の言い分を纏めると、

「彼等の罪状は、地球が数億年の年月をかけて太陽エネルギーを蓄積した化石燃料を使い尽くした。それだけではない。燃料の燃焼時に発生する炭酸ガスが地球温暖化に拍車をかけ、地球上の各地で急激な気候変動と海水の面上昇とを引き起こした。

更に、化石燃料の不足を補うために彼等が発明した原子力エネルギーの副産物である放射性物資の最終処理手段が未解決のまま放置されている。

これらの現象はあらかじめ予測されていたにもかかわらず、発展途上国と先進諸国との認識の相違に阻まれ、

また、エゴ丸出しの姿勢を抑えるリーダーとなるべき人も国も存在しなかった」

地球上の人類がいつまで「人類」と言えるのか？ 疑問が残る。三〇世紀までの一〇〇〇年間だけでも幾つかのシナリオが考えられる。

シナリオ① 人類滅亡論

数十万年に一度の超巨大地震、隕石との衝突など人類には対応出来ない自然現象によって、人類最後の日を迎えてしまった。

シナリオ② 人類自滅論

核兵器や化学兵器の抑制に失敗してそれらの兵器が広く拡散しており、テロを目的とした過激集団に使われて、全面的核戦争になる確率は高まる一方である。

一〇〇〇年ではなく一〇〇年かもしれない。

シナリオ③ 地上の楽園復活論

全人類が総力を挙げてグローバルな新秩序の構築に成功する。もはや国境線は存在せず、地域が文化や言語など民族の伝統を守る。全世界共通の問題は、権限委譲された地域毎に行なう。

ここに至るまでには、部分的核戦争、開発途上地域の人口比率の急増、食料危機、気候変動のために起こる生活圏への大移動など、課題山積である。「経済の成長戦略シンドローム」を引きずっている先進国出身者の再教育も重要である。このシナリオには一〇〇〇年では時間不足であろうか？

シナリオ④ クローン支配論

クローン人間の研究は神の摂理の問題としての倫理上の聖域であったが、不幸にして某国の研究機関での極秘研究が表沙汰になってしまった。これがパンドラの箱となつて、列強のリーダー達は競つて自分のクローンを造り、自らは悠々自適の生活を楽しむ。実はこれがクローン達の思う壺で、クローン王国の成立によつて地球は彼等の支配下に置かれてしまう。

シナリオ⑤ ダスト支配論

二〇世紀後半にコンピュータは高性能化と小型化で飛躍的に進化した。その後もその勢いは止まらず、三〇世紀には人間を支配下に置くに至る。

高度に発達した頭脳を持ち、自己増殖によつて大量に

生まれるマイクロチップは、人間を内側から思いのままに動かすことに成功する。埃（ダスト）のように呼吸器系から体内に侵入したチップ数十万個が、人間をヒューマノイド化してしまうのだ。プロトタイプが軍事的に開発されて以来、人間社会にはダスト支配に対する警戒感がなかったわけではないが、気がついたときにはすでに人類の半数以上が犯されていた。彼等の相互通信のメカニズムを始め、詳しいことは一切不明である。情報管理権まで奪われた人類の完敗である。

今、地球は怒っている。地球誕生からの四十六億年の歴史を一日とすると、一〇〇〇年は僅か0・03秒、人間の平均寿命は0・002秒に過ぎない。

包容力に溢れた地球がひとたび怒ったら最後、手のだしようがない。二〇世紀後半を生きたひとりとして、今年七十六歳の私に出来ることといえば、多大な負の遺産を残すことには一言も触れずに、「あと三十年でよいからお静かに願います」と、ひたすら自分勝手に祈るだけである。

年金問題 総ざらい

鳥海 博

物価スライドが作動して、昨秋に続いて今年も年金の減額が行われる。一〇年以上も先送りされていた2.5%がこれで2%分片付く。残りの0.5%は来年の4月からである。この間の受給者の貰い過ぎは9.6兆円にも達していたから、景気の回復（デフレ状態からの脱却）が見えてきた昨今の情勢から見ても、やむを得ぬ政策であろう。ここ三〇年ほどの年金制度の歴史を振り返りながら、日本の公的年金制度の問題点を整理してみた。

① 一九八五年に大改正が行われた。長寿化と少子化が目に見え、今までの方式では制度の維持が困難になることに配慮して、国民全体をカバーする『基礎年金』の導入が図られ、二つの年金制度（厚生年金と公務員共済）はその上に乗るという二階建て制度になった。ところがこれが非常な改悪であった。一階部分と称される基礎年金に独自の財源が無いこと、両制度間にあった官民格差

はそのまま温存され、平均で見ても5万円ほど共済年金の方が多かった年金給付額も解消されなかったことなどが、大きな問題点である。（注…年金の一元化は二〇一五年一〇月から実施されることになった）。更に言えば、第3号被保険者と名付けられたサラリーマンの妻（専業主婦）は、年金保険料を払っていないのに年金を貰えることも実は問題である。またその名前は基礎年金であるが、決して生活の基礎にはならない金額である上に、後述のマクロスライドが適用になれば、その傾向は益々ひどくなり、要するに哲学の無い単なる均一年金に過ぎない。

② その後も色々な改正が行われたが、次の大きな改正は二〇〇四年であった。この時の政治標語は『二〇〇年安心プラン』である。ここでのポイントは、『マクロ経済スライド』と称する将来の給付額を相対的に減額する仕掛けの導入である。物価や賃金上昇すれば給付額を増やす賃金スライド（新規裁定年金額算出用）及び物価スライド（既裁定年金額調整用）をそのまま適用しないで、その率から0.9%減らす制度である。こうすることで給付額を抑制するので、所得代替率が次第に落ち、

当初設計上は59・2%であつた代替率が50%を切る事は目に見えている。(ただ、ある時期でこれを終わりにすることにはなつてゐる)。この所得代替率には、計算上の誤魔化しがある。分母には税引きの可処分所得を置き、分子には税引き前の年金給付額を置いて割り算をしてゐる。このように、分母を小さく分子を大きくすることで、所得代替率を大きくした。例の第3号被保険者分も分子に入れているから、この過大表示に輪を掛けてゐる。

③ 世代間格差は大きいままである。公的資料によれば、給付負担倍率(掛け金に対する年金受領額)は、一九三五年生まれの8・3倍に対し、今の若者世代は2・3倍に過ぎない。実はこの2・3倍にも誤魔化しがあつて、事業主負担分を考慮に入れば、実際には1・14倍と言ふべきところである。更に言うなら、これらは標準モデルと称する「専業主婦の配偶者あり」で計算されており、単身者で計算するとこの倍率はそれぞれ、1・37倍であり、0・48倍に過ぎない。後世代に負担がしわ寄せされてゐるといわれる所以である。政治算術にも困つたものである。

④ 年金積立金がドンドン小さくなつてゐる事実にも注目すべきである。ピーク時(二〇〇六年度末)に173兆円あつた残高が今や110兆円であるから、年平均で8兆円も少なくなつてゐる。残高は「逆算算的」に減少して行くから、これからの減り方は益々加速されるであらう。二〇年後或いは三〇年後には、年金制度が破綻するのではないかという若者の恐れも尤もである。

⑤ そもそも論で言えば、日本の年金制度の設計図の問題である。賦課年金制度で始まつた時の大前提が大きく變つた事が看過されてゐる。つまり、人口構造の想定外の大變化(長寿化と少子化)、金利水準の低下、低経済成長などを勘案すると、賦課方式を維持する事は最早困難であり、積立年金制度に切り替えなければならぬ。理屈はそうであるが、現実存在するものを放擲する訳には行かず、税金の投入が限りなく増大せざるを得ない状況である。ご存知のように、ここ数十年歳入不足を大量の国債で補つてゐるから、遅きに失した感はあるが、後世代の者の為に、我々は年金の一律カットを甘受すべきであらう。

我々が次世代に残す負の遺産

大泉 潤

アベノミクスの文字が巷に溢れ、救世主のようにもてはやされている。借金で資金を作り、これを原資に借金を返し、増大する社会保障費を賄い、公共投資によって地方の活性化を図ろうとする。また為替の介入で、輸出産業の軛を外すことなどを狙っている。単年度では、確かに効果が上がリ、交易条件の変化で、輸出産業は数量増の恩恵に浴している。また、選挙でも、恩恵を受ける小選挙区では、候補者は有利な戦いを約束される。これらはすべて次世代以降の犠牲を強いるものとなる。次にこれを分析する。

一、財政赤字 一千兆円超

会社が将来のために借金をするのが金融の始まりだ。例えば、家庭が持家のために将来の返済可能な範囲で金融機関から借り入れる、あるいは企業が生産設備増強のために、または商業者が仕入れのために資金を金融に頼

るのは経済だ。また国や自治体が治山治水などのための借り入れも基本だ。

今の日本国の財政は、選挙勝利のための支出増、人気のための減税と負担減の要素が大きい。今は、単年度では賄えない社会保障費を借金に頼っている。ついにその残高は、国民所得の一年分、税収の二十年分に達した。この額は、消費税2%分約十兆円では百年を費やしても返済できない。これこそ我々が次の世代に申し送る財政面での最大の負の遺産だ。

二、憲法、選挙制度

元凶は選挙制度にある。四分の一程度の得票で過半数を獲得する小選挙区制は、国民の民意を代表していない。多数決原理で物事が進んでゆく。また裁判所が何度も是正を判決しても、国会は無視を続けている。三権分立とは名ばかりであり、日本は発展途上と言わざるを得ない。選挙民は、国政選挙でも、地域や自己の利害に敏感だ。治山治水の公共工事や世代の福祉に利益誘導の候補者が有利に戦う。が、議員は選ばれると全く別の人種に変わる。衣食住に手厚い保護を受け、一段高い位置から人民

を見下ろす気分になる。そんな選挙のもとで、少数の得票で大勢力を保有した政党が国家の大方針を決定する制度は、大きな負の遺産だ。

三. 国際環境

もっとも親密な関係を構築すべき一衣帯水の中国や韓国と今や政治的に良くない関係に陥った。元々日本の歴史は殆どを両国に負っている。宗教、文学、美術などは伝来したもので、日本はそれを自然環境の中で取り入れ、精緻化した。日本各地に残る遺産は、渡来したものを大切に伝承したものだ。

経済的にも、欧米との貿易に比べ、両国との比率が高い。政治的・領土的緊張とは別に、民間・商業ベースの交流は深い。戦略的互恵関係などという笑顔の下の鎧の表現はふさわしくない。資源の少ない日本は貿易立国が生きる道だ。これまでは、人口や人件費格差でコモディティ製品の生産が中国やインドへ移り、日本の貿易収支は悪化した。しかし、中印の人件費比が経済発展とともに十倍から五倍程度に減少し、あと数年で二倍程度に縮小すると、日本への洪水的輸入は緩和する。問題は中国

内部の格差、汚職、暴力だ。これは自然浄化を待つしかない。お隣とは仲良くすべきだ。

四. 我々の時代は良かった

第二次大戦中、苦しい時代を経験した。食べ物が無かった。品性が衰えた、山奥の日当たりの悪い森の空き地を開墾し、猫の額の畑でやっと実ったかぼちゃを、明日は取り入れと思って喜び勇んで出かけたら、盗まれてなくなっていた。満員列車の恐ろしい経験もした。

しかし、戦争も終わり、平和の時代がやってきて、輝いた時代、明日への希望に満ちた登り坂を経験した。

石油化学の勃興期に入社した。もっとも新しい合成樹脂の市場開拓に挑戦した。日々新しい製品に挑戦して東奔西走し、週に四回東海道新幹線の最終便に乗るようなこともあった。一九七〇年代の初めに広く欧米を見聞し、新鮮な知見や得難い経験を積んだ。これらはすべて日本が進化発展する過程での経験だ。今はこのような登り坂の経験を積むチャンスは少ない。上りの苦しみと達成の喜びを伝えられないのが、誠に残念だ。

原発事故と赤字国債

都甲 昌利

① 原発事故

負の遺産とは、私達の子や孫あるいはその子孫に決して残しては欲しくないものだ。福島第一原発の事故が起きた時、政府は「放射線は今直ちに人体に重大な被害を与えるものではない」という主張を繰り返し述べた。

原子炉の燃料タンクがメルトダウンしても、東京電力と政府は「アンダー・コントロール」と国民を騙し続けた。しかし、海外のメディアは「事故処理については天災ではなく人災である」として、日本政府と東京電力に対して厳しい批判をしている。

震度7という未曾有の大地震による津波が原因で、想定外の事故だと責任を回避し、未だに回復の道筋は見えてこない。果たしてこの悲劇の原因は地震と津波なのだろうか。

そもそも日本は地震に大津波、台風に火山爆発と、地

球上の何処よりも危険な国なのだ。七世紀に起きた貞観地震以来、震度7クラス地震は数限りない。そんな危険極まりない国に、人間がコントロール不可能な原子力発電所をなぜ建設したのか。建設当時、原発は最も安全なクリーン・エネルギーと大宣伝をしたのは誰か。彼らは事故が起こると、「想定外」と言って責任を取ろうともしなかった。

一番の被害者は子供たちだ。野外では、運動も遊ぶこともできない。放射能によって汚染された土地は、「除染」によって果たして元通りに人が住める土地になるのだろうか。セシウムの半減期は三〇年、ストロンチウムは長く体内に残留して、骨髄を破壊し、排泄が困難だと言われている。一年や二年で償還される負債ではない。県外への避難者は四九〇〇〇名にも及ぶ。彼らはいつ帰れるのだろうか。

日本人は大変重い負の資産を抱えることになった。原発再稼働という声が聞こえる。日本人は更に大きな負の資産を増やしたいのだろうか。

大震災から三年。学者や技術者を集めて安全委員会を

設置して基準を厳しくするから、もう大丈夫と原発推進派は言う。今度、再び事故が起きたら、彼らは何と弁解するのだろうか。

② 赤字国債（国の借金）

一般の家庭でも、親が財産を残してくれば子供は喜ぶし、借金を残したら子供は嫌だと思うだろう。

日本は次世代に財産を残すどころか、財政赤字で毎年借金が増え続け、現在は一〇〇〇兆円にもなるといふ。赤ちゃんを含めた国民ひとりあたりの負担額は八三〇万円となる。

政府の役割は、納税者から預かった税金を国民の生命と財産を守るために支出するのが使命だ。国家予算にバランスが取れていれば問題ないが、支出が税収を上回るため国債を発行して、つまり借金をして、国の運営に当たっているのが実情だ。なぜそんなに借金が増えたのか。デフレ不況による税収の減少と、急速な少子高齢化に伴う社会保障費の増加が原因だ。ここで考えなければならぬのは、借金をすれば利子を払わねばならないことと、

返済をしなければならないことだ。利子を払うために、また国債を発行する。ますます借金が増えるわけだ。この莫大な借金を返済するのは誰か。次世代の若者である。我が世代の負の遺産としてはこの負担は大きい。

政府は消費税を上げて税収を増やし、高騰を続ける社会保障費に当てるといつているが、八%や一〇%で果たして可能なのか。利子の支払いに消えてしまうという識者もいる。

そもそも国債がむやみに発行できるのは、日本国という国家が存続するからだ。国の信用を得て可能なのだ。我国は減びないとタカをくくっている。破産はしないと。ギリシヤにはならないと。

政府は、国債の発行額は減少しているし、この分で行けば六〇年くらいで赤字は解消するだろうと甘い言葉を投げているが、日本が破産しない限り永遠に続くのではない。子供や孫やその子孫たちは、未来永劫借金を返済し続けねばならない。ツケを残したのは我々世代の責任でもあるが、次世代の若者には、賢明な国政の指導者を選んで日本を再生してもらいたい。

サロン21 活動報告

サロン21では、二〇一三年四月から二〇一四年三月までの一年間を通して、大テーマ「日本の目指すべき方向」について議論を重ねることにしました。毎月小テーマ（と言っても、それぞれが広い分野にまたがる大きな課題なのですが）を決め、各月の担当者から配信済みの資料に基づく簡潔なプレゼンテーションを行ってもらった後に、参加者による自由討論に入ることになりました。

プレゼンターからの的確な提議を得て、毎回二十名近くに及ぶ参加者の間で、さまざまな角度からの極めて活発な意見の交換がありました。テーマごとの結論を得るには至っておりませんが、本クラブの会員の多くが国の将来について日ごろから深い関心を寄せていることを如実に表す、熱のこもった討論ともなりました。

限定された時間内での討議で、テーマごとの結論を得るには至っておりませんが、当サロンで会員が真摯に議論している状況を、少しでも多くの人に知ってもらいたいとの思いから、二〇一三年十一月からは毎回の資料と

議事録を本クラブのホームページで公開しております。会員外の方も閲覧可能ですので、広くご案内いただければ幸いです。

毎回のテーマとプレゼンターは以下の通りです。

四月	「日本らしさへのこだわり」	森田 晃司
五月	「持続可能な社会を目指す」	池田 隆
六月	「グローバル大競争と企業の在り方」	山縣 正靖
七月	「食の自給」	大平 忠
九月	「少子高齢化・年金・保険・医療制度」	野瀬 隆平
十月	「教育の原点への回帰」	大月 和彦
十一月	「外交・防衛」	志村 良知
十二月	「憲法改正の是非」	上田 信隆
一月	「行政・公務員改革」	富岡喜久雄
二月	「マスコミ改革」	西川 武彦
三月	「纏め・反省会」	

（プロマネ 大平・森田）

特集・男と女



男と女―異性への目覚め―

岩崎 洋一郎

こんなすごい命題をよくぞ決めたものと感じ入った。でも、与えられた命題にチャレンジしたくなるのが、私の性癖と言うか、弱点と言うか、今回も当たって碎ける覚悟で筆を取ることにした。と言っても、一般論を説くほどの経験も見識も持ち合わせていないので、自分史みたいな一文にならざるを得ない。ご容赦を。

私には四歳歳上の姉がいたので、幼少のときから男と女では体の構造が違うことなどは知っていた。また遊び方や感じ方が異なることも。例えば、僕は外で戦争ごっこやカウボーイごっこなどに夢中になって走り回るのに対し、姉は着せ替え人形や、女友達とヒソヒソとクラスメートの噂話に夢中になるなど、全く異なっていた。また、姉は着るものに執着したり、お化粧に目を輝かしたりして、男である自分には理解できない分野があると痛感していた。通学していたニューヨーク市の学校にも、

住んでいた町にも、日本人は我が家だけであったので、父が出勤したあとの昼間の時間帯においては、私は一人前の男として我が家族（母と姉）を守ろうとする意識は強かった。母が運転していた自動車が追突された時に、責任転嫁しようとする相手の大の男に対し懸命に抗議したのは当時八歳の僕であった。事故を見ていた第三者が応援してくれて、当方有利に決着したことを誇らしげに後々まで覚えていた。

当時、クラスは共学だったが、女の子と言葉を交わすことも殆どなく過ごしていた。しかし、あるとき、後ろの席のベッティから言葉をかけられた。先生に私がひどく叱られたことに対し、慰めてくれたのだった。その声の優しさと音色は、何か心に響くものがあった。彼女は丸顔で、白人だから当然だがその皮膚は白かった。すごく白かった。その白い肌の中にピンクがほんのりと透けて美しく見えた。毎日見ていたはずの顔が、別物に変身しているようで、心の奥深いところにその残像が刻まれた。といっても、こちらからは何も言わず、そのままわかれた。数日後、たまたま下校時に一緒になった。校舎

からの出口は、男女に別れていたが、道で彼女と一緒に
なった。思い切って、「教科書を持ってあげるよ」と提
案したら、あっさりと承知してくれた。当時は男の子が
登下校時に女生徒の教科書を持ってあげることは、好意
を寄せていることを意味していた。これが女の子を「異
性」として認識した最初で、ほの温かい雰囲気に含まれ
た。当時、私は八歳で、米国流に言えばパピー・ラヴ（子
犬の恋）であつたと思う。

親の任期が終わり、九歳の春に日本に帰国したので、
それ以上の進展は無かつた。

それから七十年の歳月が流れた。その間、戦争があ
り、鬼畜米英人の彼女にコンタクト出来るはずもなかつ
た。最近インターネットが普及したので、ふと思いつい
て、普通つた小学校のホームページを開いた。驚いたこ
とに、私が所属した一九三五年入学のクラスの記念写真
が掲載されていた。寄稿したF女を覚えていた。連絡す
ると同級生のR女と今でも親交があるという。しかし、
ベッティの消息は知らない。そこで「ダメもと」でそ
の小学校の掲示板に、尋ね人としてベッティの姓名を登

録した。驚くべきことに、一週間後に本人から連絡が来
た。彼女の甥が偶然に私の尋ね人欄を見て、彼女に伝え
たのであつた。彼女からのメールの第一声「もちろん覚
えているわよ」で始まる文章を見て、ひとしお感激した
ものであつた。「戦争中は東京空襲もあつたから、貴方
の安否を心配したわ」と記されたメールを見て、何とも
言えない気持ちになつた。今や結婚して数人の孫もいる
七十九歳のおばあちゃ

んになつてゐる彼女。
思い切って、「昔、好
きだつたんだよ」と半
世紀以上もの昔の気持
ちを伝えたところ、「同
じ時代に生きてきてよ
かつたわね」という優
しい言葉が返つてき
た。やっぱり優しい人
だと、改めて惚れ直し
た次第である。



男と女の昭和史

平尾 富男

今からおよそ七十年前に、若者が「よくぞ男に生まれけり」と言つて勇ましく死を志願した。「お国の為」だったから、死して「軍神」として崇められさえた。

そして「耐え難きを耐えて」の玉音放送を国民が聞く日までに、四千五百人を超える特攻隊員があたり命を散らす。前途ある（筈だった）若き男たちだった。

体力が物を言う過去の戦争では、社会的に女性の活躍の場は極めて限られていたから、男性が表舞台に出たのは当然だろう。歴史は夜、否、男性が創った。

歴史上で男子顔負けの活躍をした女性は数多く存在したが、昭和初期の時代は一般的に未だ男性上位社会だった。戦時であれば成年男子が兵役に服している間、銃後の守りを担われてきたのは女性だ。戦争中ならずとも、男性は外に出て生活の糧を得ることが本分。女性は家計の遣り繰りをし、子育てをしながら家庭を守った。

一方で、いつの時代でも社会の再生産には女性の力が、生物学的にも不可欠なことは自明の理だ。子供を産むためには男性の存在が必要ではあるが、出産そのものは女性にしかできない仕事で、時には命懸けでさへある。

この女性特有の立場を利用して、古今東西いつの時代でも、弱い筈の女性は強い立場の男性をそれとなく、したたかに手玉に取ったことを忘れてはならない。

「男よ、女を侮るなかれ！」

戦後まもなくして『星の流れに』身を占っていた女性が、敗戦に打ちひしがれた男性を尻目に、日毎に逞しく存在感を増していく。時を同じくして男女平等思想が社会に浸透します。戦後強くなったのは女とストッキングと言われた。

男性はどうだったか。一九五三年に開始されたテレビ放送は、大相撲、プロレス、プロ野球のスポーツ中継が中心だから、画面で大活躍するのは男性ばかり。

一九五六年には兄・石原慎太郎の芥川賞受賞作『太陽の季節』で裕次郎が映画デビューした。

奇しくも同じ年に建設が着工され、六年に及ぶ工事期

間を経て完成した世紀の大プロジェクトが、黒部ダムだ。一九六八年には、石原裕次郎と三船敏郎主演による映画『黒部の太陽』も公開された。

男性的な日本の躍進が内外に認められただけではない。アジアで初めての東京五輪（一九六四年）では、日本の女子バレーボールチーム（東洋の魔女）が金メダルを獲得するなどの活躍もあり、日本人女性の社会進出も目覚ましくなる。女の時代が始まる予感を誰もがもった。

日本の高度経済成長期が終わった一九七二年には、アメリカ人女性シンガーのヘレン・レディがそのものずばり“I Am Woman”なる歌を唄って、女性上位時代が幕を開ける。歌のコーラスの最後の部分では、“I am strong, I am invincible, I am woman”と力強く繰り返し謳い揚げる。しかも、Womanは無冠詞なのだ。

アメリカに端を発した「女性の解放」を提唱するウイメンズ・リベレーション、いわゆるウーマン・リブが盛んになった時代だ。ブラジャーは女性を差別する象徴と見なされた。そのブラジャーを取り外して火中に投げ捨てるというパフォーマンスが新聞紙上を賑わす。日本で

は「ノーブラ運動」と呼ばれた。

この運動、言葉の響きだけで男性の胸を怪しく騒がせたが、下着業界はさぞかし大慌てだったに違いない。パンタロンが女性のファッションとして流行り始めるが、男性目線からは不人気で余り長くは続かなかった。

一九六七年に大流行したミニスカートには敵わない。男は女の太腿に魅せられ、その男の視線を女も楽しむ時代だ。

もともと、『あの鐘を鳴らすのはあなた』で、一九七二年日本レコード大賞最優秀歌唱賞を受賞した和田アキ子が、一七四センチの長身を活かして、パンタロンスーツを好んで着用していたことが思い出される。女性らしさは影を潜め、男性的な力強さが売りだった。

一九二六年十二月二十五日に幕を開けた激動の昭和は、一九八九年一月七日昭和天皇の崩御によって終わる。

それから四半世紀近くを経た平成の今、男と女を識別することは、生まれた時の生物学的な機能の違いだけで語れなくなっている。一見すると男だが実は女、或いはその逆のケースもあれば、モト男やモト女もいる。

「男と女」の境目が曖昧になる兆しは既に昭和にあった。

男と女の間にあるものは

富岡 喜久雄

歌の文句では、男と女の間には「暗くて深い川」や「越すに越されぬ溝」があると唄われている。それは何かと考えたことがあるが、身体的差異からくる思考法の差なのだろうと思っていた。かつて、ある作家は女性の思考を司るのは脳ではなく、他の器官だと言ったりした。勿論比喩であるが、それでも感情、論理を司る脳の神経回路に何らかの差はある筈だろうと思っていた。

だが、昨今は性同一性症・候群が普通の話題になり、テレビにもこの種のタレントが多く出演しているから、この差も薄れつつあるようだ。TVドラマでは女性のボスが人気だし、巷ではバスや大型ダンブ、タワークレインの運転まで女性がやるようになってきた。油圧機構と電磁制御技術の応用で、男女間の基本的差であった肉体的ハンデが意味を持たなくなってきたのである。

男女間の制度上の差も、労働基準法上の保護規定が撤

廃され、深夜労働、時間外労働規制もなくなった。

さらに女性の教育程度向上と意識の高まりで、「弱きもの汝の名は女なり」や「レディ・ファースト」は死語となり、「出産に夫が立ち会う」のは当たり前、職場帰りに一杯やるのも男女共通だ。従来男女間でそれなりに住み分けていた職業も、技術の進歩により男女の身体的差を機器の機能で越えられるから、身体差に拠る必然的住み分けでなく、個人的選好によるものになった。だから男性看護師、男性保育士も増えてきた。

国の産業構造が重厚長大から軽薄短小、ソフト化するのには必然で、それによって女性の職場が広がり、子生み、子育てに何らかの影響がでるのは仕方がない。

とは言うものの、若い男女の結婚年齢は上がり、独身男女が増加しつつあるのも現実で、それが人口減を生む。だから大変だと政府は少子化対策大臣まで作り、男女の早婚化と子育てを物心両面から支援しようとする。世間では育メンパパがもてはやされるし、雇用機会均等法はもとより、女性の政治家ポストや企業管理職任用目標数まで設けて、さらなる女性活用策が政策目標として掲げ

られた。しかしこれは政策の二律背反ではないかと思う。障碍者雇用枠のように義務化するのには、男女双方に無理を強いることになり、大仰に言えば哺乳類の雄と雌の関係を人為的にコントロールすることだから、自然界の均衡を破壊し、社会の安定を乱す因にならないだろうか。やはり自然の摂理を尊重すべきで、政策にすべきものではないと思う。

古事記によれば、イザナギは「わが身はなりなりて、成り余れる処あり」そしてイザナミは「わが身はなりなりて、成り合わざる処あり」と告げ、イザナミの「なり合わざるところ」をイザナギの成り余れるところをもつて刺し塞ぎて「国産み成さん」としたとある。

さらにイザナミが誘ったがゆえに国造りが不十分で、イザナギが主導権を持ってやり直したら完全な国ができたと語る。昨今は婚活でも女子がリードするらしいから、さて何が起るかと将来が不安だ。

一万年後には人類も両性類と化すかもしれないが、子産みと子育てにおける母性の役割は当分変わりそうもない。自然の赴くところに任せようじゃないか。

男女の役割の変化も生物の環境適応だと考えれば、それを止めたり、促進したりする必要はない。経済的豊かさの達成とともに起こる社会的変化だから揺り戻しは必ず来るのである。

案の定、ことほど左様に男女間の性差がなくなると、逆に女性側からこの風潮に反省の気分が出てきた。

「女をタガメに例え、男を食い尽くす」と断じ、この傾向に歯止めをかけようと男を叱咤し、女性に反省を促す女性学者からの著作が出てきた。さらに他の女性学者は男女の性別による役割分担を重視すべきとの主張を展開するようになった。筆者の知る若者の中には、日本女性とは「その氣に」なれないと言う者が多い。ここにも市場の競争原理が働きたしたとも言えようか。

ではどうするか。自然に任せよう。男女共学など強制せず、不要な延命治療を止め、尊厳死を認める。さすればやがて、「美しき日本」がまた戻ってこよう。

こんな御託は「レトロ老人のたわごと」だとの女性陣からの反論は、『日本婦道記』でも読み返しつつ、補聴器外して聞き流し、美しき歳野を夢見よう。

人生の勘所

小寺 裕子

父は退職をしてから自分と両親と兄弟に関する膨大な「家族史」を執筆した。祖父の勤務地などの綿密な調査を行い、親戚にも喜ばれる作品が完成した。

八歳で父親を亡くしたせいもあり、自分が神経質で人間音痴だと書き綴ってはいるものの、照れくさいのか、母とのいきさつについては触れていない。

母も亡くなった今、新しい事実もわかったので、ここに整理しておきたい。

旧制高校時代、父は友人の家で将来妻となる女性と出会う。母は友人の妹だった。仲間で母の家に出入りするうちに、親友のXも母に好意を抱くようになった。父とXは東大の理系に進んだ。終戦の四年前のことだ。

長兄の世話になっていた父は、大学入学を機に家から出るよう言われ、経済的自立を余儀なくされた。勉強の傍ら、あれこれとアルバイトに精を出す毎日だった。

しかも戦争は激化の一途をたどる。そんな状況では母と会っている余裕などないと思いきや、あの世代は遅しい。

徴兵検査に落ちた者と理系の学生が残っていた東大では、戦時中も月に二回はダンスパーティーが開かれていた。同世代が戦死するという状況だからこそ、命の儚さや残された時間を思い、恋をしたのだろう。切なく恋いこがれる感情には事欠かなかったに違いない。しかしこの時代、父と母の付き合いはグループでの付き合いにとどまっていたそうだ。

終戦になると食料事情は悪化し、父は夕食付きの家庭教師で食いつないだが、とうとう結核で入院。退院後も職はなく、やむなく大学院へ。父は内心焦っていただろう。早く一人前の職に就かなければ母に交際も申し込めない。

終戦から四年。就職した父に、親友のXが母の気持ち確かめてほしいと言ってきた。全ての面で自分より恵まれ、明るく自信家のXの依頼は奇異であった。Xも、元より父の母に対する気持ちに気付いてはいた。父が長

年交際を申し込めるような状況にないことも十分に解っていた。Xは恋敵とは正々堂々と勝負したいと心に決めて、父が同じ土俵に立つまで待っていたのだ。

母が選んだのは自信家のXではなく、気難しくて人間音痴の父だった。

父がXに、母の返事をどう伝えたのかは判らない。

山口県の工場に勤めていた父は、現地採用の女性社員Mを本社に転勤させた。こんな人事は前代未聞だった。

戦死した男性も多かったが、引揚者も多く、男性社員が不足していたわけではなかった。しかし父は能力主義を貫き、会社を説得し、Mを東京にやった。父の期待通りのMの仕事ぶりは本社でも評判となった。

そのMと親友のXは結婚した。自分の厳格な両親と同居してやっていけるのはMをおいて他にないと、Xは紹介した父に言ったそう。父とXの親交は続き、退職後は二人で囲碁するのが楽しみであった。

これでめでたし、となればよかったのだが、父と婚約した母を病魔が襲う。卵巣腫瘍で、母は子供が産めない体となってしまったのだ。

二人の絶望は想像に難くない。母は婚約解消を申し出たそう。父は婚約をした以上破棄することは良心が許せなかったし、やはり母の優しさが捨てがたかったのだろう。二人は結婚し、父の姉の家から私を養女にもらった。母がXでなく父を選んだ女の勘も凄かったと思う。もしXと婚約していたら、婚約を破棄されて一生独身だったかもしれない。

父は「なぜ母と結婚したのか」と姪に聞かれて、「僕がカラスは白いと言えば、家内も『そう、白ね』と言うからだ」と答えたそう。母のおおらかさが父には救いとなっただろう。

最後まで自分より父を大切にした母は、ずっと父に対する感謝の念と共に、不器用な父に愛おしさも感じていたのだろう。

暖かい家庭の味を知らずに育った気難しい父にとつて、母は自分を全面的に受け入れてくれる女神のような存在だったと思う。人間音痴の父なのに、人生で一番大事なものだけは誤らなかった。

「我が世代の負の遺産」と「男と女」

市川 忠夫

二〇一三年、年末の慌ただしい中で、今回の特集テーマについて考えた時は、独立したテーマが二つあるように見えた。しかし二〇一四年、新年になってゆつたりと、新聞、雑誌、テレビ、ラジオなどを見たり聞いたりしているうちに、二つのテーマは密接に関係している、と感じるようになった。どうしてだろうか？

まず「我が世代の負の遺産」だが、最大のものは「地球環境問題」だろう。新年に北米を襲った大寒波は、「本当に地球は温暖化しているのだろうか？」という疑問を投げかけたようだ。だが研究者は皆、地球温暖化の一環として異常気象が発生するので北米大寒波は想定内の出来事と言っている。地球温暖化のみならず、空気、水、土壌など、人々が生きていくために必須の基盤も、汚染によって危うくなっている。これらの負の遺産を築き上

げたのは、二十世紀後半の先進国、米欧日の人々である。これらの遺産は今やどうしようもない段階にきているが、世界各国のリーダーは未だ最優先でこれに取り組んでいない。極めて深刻な事態である。

次に「男と女」だが、これについて不思議に思うのは、「男と女の特性の違い」に関してしっかりと認識されていないことだ。米欧などの先進国や中韓印などの新興国の一部の人々は少し気付き始めたようだが、日本では、特に日本の男は、認識が遅れている。

子孫を残す機能や身体上の違いはよく理解されているが、頭や心の働き方の違いはあまりよく理解されていない。セックス上の違いは分っているが、ジェンダー上の違いはほとんど理解されていないと言える。

世論調査的なデータによると、女が男より優れている点として、「細やかな配慮」や「コミュニケーション能力」などがあるそう。しかし、七十年余の個人的観察からいうと、もっと本質的なところに二つの大きな違いがあ

るように感じる。

第一の違いは「時間の観じ方」だ。女の方が男より、はるかに長い時間を考えている。これは人類誕生以来の長い間の生活習慣に起因していると思う。女が子供を育てるために考えなければならないのは、かなり先を見通すことである。これに対し、男が食物を得るために見通さなければならない時間ははるかに短い。現代では、子育ての期間はより長くなり、食料を得るために働く職場での時間はより短くなっている。昔は十五歳頃までに自立した子供が、現代では二十数歳までかかる。一方職場では年一回の決算が半年さらに四半期と縮まり、今やデリーに損益を把握しなければならない。

第二の違いは「制約の感じ方」だ。女は自然の制約をまず念頭に置く。それに対して、男は人為の制約を念頭に置く。これも、最大関心事が、子供を育てることか、食料を得ることか、の違いに起因している。女は気候や環境に敏感であり、また食物については質に関心が高い。一方、男は法律やルールにうるさく、食物については量に関心が行ってしまう。

時間の観じ方や制約の感じ方は、何千年何万年の長い間に育まれたものだから、簡単には変えられない。実はこのことが地球環境問題と密接に関係しているのだ。

地球環境問題を解決するためには、長い時間に対する観点と自然の制約に対する感性が必須なのだ。これらの点では、女の方が男よりずっと優れている。

歴史を見ると、この何百年、どこの国でも男が主導してきている。日本では鎌倉時代以降に、男主導の社会に変わったという。しかし「これを変えないとダメだ」と思う人は多いだろう。米国では最近、人々がこのことに気付きだしている。米連邦準備理事会の議長やゼネラル・モーターズの最高経営責任者が女性になり、次期大統領候補も女性が有力とのことだ。一方日本では、都知事選には女性候補者が一人もいなかった。

今、日本では多くの人々が、一抹の不安を感じながらもアベノミクスに期待している。しかし、人々の長期繁栄を思うと、ウーマノミクスにもっと力を入れ、「女性総理大臣」を早期に実現することが大事である。

男が女に追いつく日

細谷 博

そろそろ陽が傾いて、そよ風が肌に冷たく感じられ始めた夕刻、駅に徒歩数分という謳い文句の新しいマンションの建設現場で、その日の作業が終わったらしく、資材リフト用タワーの踊り場で二人の作業員が後片付けをしていた。

そこへ通りかかった親子三人連れの四歳ぐらいの女の子が言った。「ねーっ、あのおじさんたち可哀想ね。みんなもう居なくなったのに、降りられないのね。」

なるほど、高いところに取り残されて寂しげにも見えなかった。すると二つぐらい年上に見える男の子が言った。「いいなあ！ あんなに高い所にどうやって登ったんだらう？」

ちよつと美人のお母さんが、すれ違ったこちらを見て恥ずかしげに笑いをこらえていたが、こちらはそれどころではない。永遠の課題を突き付けられて、歩みを止め

て考え込んでしまった。

「なるほど。男と女はこれ程幼い時から明確な特性の違いがあるのに、男女同権だとか就労の機会均等や子育ての平等を唱えるのは、自然の摂理に反している。行き着くところは男女共に不幸な世界かもしれない」という疑問が、煩い蠅のようにぶんぶん頭の中を飛び回り始めていたのである。

このごろ、「有史以来男性が女性より優位であるというのは本当だろうか」という疑問が頭を離れない。我々が経験している現代社会ではどうだろうか。只今テレビで中継している国会の衆院予算委では「国会議員の女性議員の割合で日本は一五八位」とのことだが、アメリカも韓国も一〇〇位あたり。女性比率の高いのは皮肉なことに中進国から発展途上国である。

すると、今度は各局のニュースで一斉に、「三十歳の日本の女性研究者がSTAP細胞開発」と報じていて、世界の学者が「革命的」と絶賛しており、早くも五、六年後のノーベル賞は確実だとの早まった観測まで出て来ている。これは何も突如として出現した現象ではない。

既に「リケジョ」なる言葉が生れるほど、理科系や技術系の女性が、これまでは男性専用の職場と考えられてきた分野に進出しており、「和製キュリー夫人」が陽の目を浴びるのは時間の問題と見られる、との下地が既に存在していた。

翻って、我が国の文学界最大のイベントである芥川賞と直木賞の今回の受章者は、直木賞のダブル受賞もあって、三人ともに女性であった。芥川賞は若い異色の才能を発掘するという選定の趣旨から、女性の受賞は半世紀も以前からあっても不思議はなかったが、百戦錬磨の達人から選ぶ直木賞で女性ばかり二人とは！ もはや日本は女性の国になったと、誰もが感じているに違いない。

我らがクラブも例外でなく、数年前から新入会員は女性が圧倒的に多くなり、エッセイ公募でもトップ入選者は女性が連続している。私の出身大学はカトリックミッション系で百年前の開学以来女性禁制であったが、五十五年前に禁を解いて女性に開放した時に、井上ひさしの『モッキンポット師の後始末』のモデルであったフランス人のリーチ教授が、「半世紀もすれば女子大学に

なる」と予言した。

しかし、この予言は見事に外れた。なんと僅か十五年で女性が男性を征服してしまったのだ。

音楽会でも旅行でも女性の姿が目立ち、特別養護老人ホームに至っては、介護する方もされる方も圧倒的な女性社会となっていて、男性は小さくなっている。

平成二十四年の平均余命を見ると、男性が七九・九四歳、女性が八六・四一歳で、相変わらず女性の方が六・四七歳多いが、実はこの差が年々短縮されており、このまま行くと二十二世紀早々には男性が追いつく可能性がある。

現在の先進国の多くが人口減少の問題を抱えているが、日本、韓国、次いで中国が深刻な事態となりそうだが、最近の調査でも、経済的に結婚に踏み切れないばかりか異性に対して興味が無いという青年男性の比率が高い。

人類の未来のために看過できない現象である。目の前の富を享受できない疎外感、負け犬意識に囚われている若者に、女性に対する目を開かせ、女性と肩を並べる日と呼び寄せるために、我々OBに何ができるか、じっくり飲みながら考えよう。

とかく浮世は色と酒（色亭三歩）

三 春

「女は女にキツイよなあ」と、酔眼の正夫。テレビド
ラマか職場のおつぱね様のことかと思つたら、そうでは
なかった。近所に住む子持ちの寡婦と深い仲になつたが、
それを女房に感づかれた。なぜ感づかれたかといえ、
門限の十時に（いい歳して情けない）間に合わないこと
が度々なのを怪しまれて、詰め寄られたのだとか。

女房は女に電話し、「子供や近所に言いふらす」と脅
して呼びつけた。散々に罵った拳句、二度と会わないと
いう誓約書を書かせ、血判まで押させたそう。

「まあ、脅しはちよつときついわね。でも、どうして
おかみさんは女の名前や電話番号を知つたの？」とい
う私の問いに、「ああ、俺が教えたんだよ。だつて嘘を
つくわけにいかないじゃないか」。

女を売るとはとんでもない「正直者」め！ 血判状は
キミにこそ必要。おかみさんも片手落ちだ。

さて、次なる金治は実業家。大きな仕事が決まって、
ベンツを買い換えたばかり。ケチを自認する金治が
「ちよつと相談があつてね」と誘つたのは、安さで有名
な居酒屋。懷からおもむろに割引券まで取り出した。

前々から好意をもつていたボインの人妻にアタックし
たいが、自分はこの歳だし容姿にも自信がない。百万円
ほどやったらなびくだろうか、同じ女としての意見を聞
かせて欲しい、という相談だ。金治は夫婦仲もよいのに、
それとこれとは別らしい。

「札束でほつぺをペチペチするような真似はむしろ嫌
われるわよ。逆にそれでなびくような女なら、やめたほ
うがほうがいいと思うな」
と忠告したにもかかわらず、数カ月後の今、金治はその
ボインとつきあっている。好かれていると勘違いするほ
どバカでもなく、金の切れ目が縁の切れ目でもかまわな
いそう。金にものを言わせるのはそちらの勝手だが、
そんなに金がだぶついているのなら、次回の人生相談は
せめて焼きガニかフグ刺し、いや、中国宮廷料理と引き
換えにしよう。

三つ目はちよつとイイ話。

東京のチベットといわれる西多摩郡檜原村の「蛇じやの湯温泉」は、東京で唯一の秘湯として、「日本秘湯を守る会」にも認定されている。兎造りの屋根は江戸時代末期の建物。山あいの素朴さと落ち着き、山菜づくしのやさしい味わい、眼前を流れる秋川溪谷のせせらぎ。

人影もまばらな広間で山菜と地酒を堪能して部屋に戻る。寝酒を酌み交わせばあとは布団にもぐるだけ。

ほの白く盛り上がった夜具が暗闇でもそもそ動いている。まだ眠ってはいないらしい。

「ねえ、まだあのマンションに優雅な一人住まい？」と声をかけると、一瞬の沈黙のあとに、

「実をいうと同居人ができてね」

「あら、郷里のお母さん呼び寄せたの？」

「エへへ、カ・レ・シ！ 八十歳だけどね」

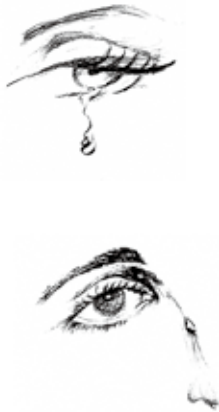
「えっ？ 貴女まだ五十代でしょ」

周囲は誰も知らずにいた。二十年前に離婚した恵子が、男やもめの元上司と付き合っていることを。彼らはそれぞれ別々に暮しながら密かに行き来していた。彼が救急

車で運ばれる騒ぎがあつて一人暮らしが心配になったので、退院を機に自分から同居を申し出た、といいかにも嬉しそうに照れくさげに話す恵子。

夫婦でさえなんとか振りほどこうとするこのご時世に、結婚相手でもなく責任も利害関係もない八十歳のカレシを本気で想って添い遂げようとしている。明かりの灯る部屋で自分の帰りを待つ人がいる、ささやかな喜びが彼女を満たしているようだ。

コミカルな不倫話もちよつとイイ話もどこか褪せていて、情熱とはちがう。物足りなさや不安の埋め合わせ、人並みの幸せや安定の代償に差し出した自由やときめきをなぞっているだけ……そんな物悲しさを感じてしまうのはなぜだろう。



Miharushka

宝塚歌劇一〇〇周年！

清水 勝

今年の課題テーマ『男と女』と聞いて、最初に浮かんだのが「歌舞伎」と「宝塚歌劇」でした。歌舞伎は「かぶき踊り」として生まれましたが、風紀を乱すとして禁じられたことから、男が演じるために今のような歌舞伎へと四百年を掛けて完成してきたものといえましょう。

一方、宝塚は一九一四年に「宝塚少女歌劇養成会」の第一回公演からスタートしています。それから一〇〇年！なぜ女性だけだったのか。阪急の創設者小林一三氏が宝塚温泉場の集客にと、当時評判の三越百貨店の「少年音楽隊」への対抗意識から少女に歌を歌わせるようにしたといえます。しかし世間では芸者や舞妓のようなものと揶揄されたことに小林一三氏が怒り、「宝塚歌劇は良家の子女に高等なる音楽教育を施した『生徒』によってなされるものである」として教育に力を注ぎました。今も、トップスターといえども「生徒」と呼ばれ、清く正し

く美しくをモットーにしているのです。

「宝塚音楽学校」(二年間)を卒業しないと宝塚歌劇には入団できないことから、定員四十名を目指しての入試は難関で、合格発表は毎年マスコミで大きく取り上げられています。今津線で通った学生時代にグレーの制服・制帽姿を観ると胸躍るものがあったのを思い出します。また「宝塚に落ちて当校に入学した」という女子学生もいましたし、「阪急に入社して、いつかは宝塚劇場勤務になる」と言っていた者もいました。そうそう、我が大学同窓会には「宝塚ファンの集い」というサークルもあります。

さて、ここからは質問形式で宝塚を語りましょう。

Q. 宝塚の組って何？

A. 花組、月組、雪組、星組、宙組(そらぐみ)の五組に専科(今は亡き春日野八千代さんが所属。現在はベテランの方十五名)があります。各組は八〇名程で、組長・副組長・組子で構成されています。

Q. みんなで一緒に公演しないの？

A. 各組がそれぞれ宝塚大劇場、東京宝塚劇場(この二劇場は宝塚歌劇専用です)をはじめ全国の公演をして

います。公演のない組は一ヶ月半かけてみっちり練習をする訳です。だからこそあれだけの様式美を生み出せるのです。なお、年に一度、各組のスターが勢ぞろいして行う祭典があります。タカラヅカ・スペシャルと言われており、チケットを手に入れるのは至難です。Q、宝塚の衣装について教えてください。

A、何といっても黒燕尾でしょう。男役の美学を象徴する衣装です。そしてフィナーレを飾る羽根です。トッブスターの羽根は全長2m、重さは10kg以上です。もちろん日本物では和服、洋物では通称「輪っかのドレス」といわれる輪のように広がるドレスがあります。

Q、どんな人たちが演出しているの？

A、お亡くなりになった白井鐵造や高木史朗が有名ですが、現在は宝塚入団の専任の演出家が二十三名、うち女性演出家が三名います。

Q、派手な化粧について教えてください。

A、男役の髪型はリーゼントです。化粧は宝塚独特のもので、生徒本人が施します。「化粧講習会」で上級生が伝授します。その後は自分の顔に似合うメイクを研

究していきます。女性ならではですね。

まだまだ質問は絶えることがないと思いますが、こちらで宝塚ファンに登場してもらいましょう。

今回は一〇〇周年ということで東京から二泊で宝塚大劇場に行った熱烈なファンがいます。なぜ二泊かというと公演を三回続けて観るためです。夢の世界の細かい違いを見つけるのが楽しみだそうです。その魅力は現実の男性にはないカッコイイ男役。黒燕尾で踊るショーは格別だと言います。三時間の夢の世界は現実を忘れさせてくれます。そして観劇後は「よし、また頑張ろう！」というパワーを貰っています。彼女の年間宝塚観劇回数は三十回程だそうです。これが宝塚ファンなのです。

最近はお様連れられて観劇する男性陣も増えていきます。一〇〇周年を機に、我々も夢の世界へ行きましょう。宝塚の良さは清く正しく美しく夢があることです。

宝塚出身の女優にスキャンダルが少ないのもわかりますね。新珠三千代さん、八千草薫さん、浜木綿子さん、加茂さくらさん。小林一三氏が目指した知的な美しさが今も正しく引き継がれているのです。行きましょう！

ペン・フォト句会

ペン・フォト句会は、当ペンクラブの独自の勉強会として定着し、ホームページの閲覧数も常時毎月一〇〇件を越え、昨年十一月に朝日新聞の全国版に紹介記事が掲載された際には一七〇件のヒット数を得た。

日本人なら誰でも作れる俳句と、視覚的にも楽しめる写真を合体させることによって新しいイメージが膨らみ、相互に補完し合いながら思いがけない世界を表現することができる。画像と句が一緒に提示されるフォト俳句は、他の文芸作品と違って瞬間的に作品を鑑賞できることも利点である。

そうした利点を生かして、本年の新年会のアトラクションでは、会員やゲストから募集したフォト俳句（句付け）の選考会が行われ、入賞者には万雷の拍手のなかで豪華賞品が手渡された。句付けに応募してくださった四〇名の方々のご協力と、新年会実行委員を快く務めてくださった方々のご苦勞、そして新年会出席者の皆さん

の応援に対して、この場を借りてお礼申し上げます。

以下に、二〇一三年のフォト句会の様子をまとめる。

新入会員の下山健夫さんと黒澤弘子さんが句会メンバーに加わった。入会当初は戸惑いもあったようだが、すぐにコツをつかみ、今や数々の秀作を発表している。

古参メンバーや中堅メンバーも、家庭の事情や創作スランプなどにもめげることなく、キラリと輝く作品を披露し続けている。

現在のメンバー数は十名と少なめだが、それだけに内容が濃く、写真や句の批評から始まって、歴史・経済・政治・旅行・芸能・カメラ技術・グルメ談議に発展するなど、メンバーの興味と話題は尽きることがない。

夏からは、勉強会のあとの打ち上げとして、世界のグルメレストラン巡りを始めた。美食と楽しいお喋りは次なる創作へのエネルギー源でもある。

（プロマネ 中村晃也）

自由テーマ



父と子

原田 信

高校二年の春、発行したての校友会誌の目次を開いて動転した。執筆者に父の名前があったからだ。親父はこの学校に特段の関係はない。「なぜ、どうして」と自問しつつ、しばし呆然とした。題は『息子の部屋』。間違はなく自分の部屋のことだ。しかも自分が知る以上に克明に正確に描写されていた。きつと編集長のY君の仕業に違いない。腹は立たなかったが、いきなり裸にされた感じがした。Y君も父も何も言わず、自分も聞かなかった。Y君とは東京都心に近い中学の同じクラスで、すぐ親しくなった。小柄な自分よりずっと大柄で体力もあり、成績も優秀で、はじめから畏友ともいうべき存在だった。帰り道が同じ方向であったから、いつも数人の仲間と途中の商店街で蕎麦屋に寄ったり、小倉アイスを買い食いしたりした。真つすぐ帰る奴のことは「ガリ勉だな」とこき下ろし、時にはお濠の土手の松の木に登って蜂の

巣にいたずらしたり、石垣を這い上がる競争などもした。二年になっても同じクラスで、自分は特に希望してY君たちに近い後ろの席に移った。周りの数人は特にいたずら好きで、昼近くなると授業中に弁当を食い始める。昨夜ラジオで聞いた落語もやりだす。試験ともなると、「テイクのスベルはどうだった」などとささやく。

確か暑くなり始めたころのある日、学校帰りに例の蕎麦屋ののれんをくぐろうとしたら、彼は突然「きょうは早く帰らない」と言い残して急いで去った。それは少年にしては何か深刻な面持ちで、突き放すようなそぶりでもあったから妙に記憶に残った。

同じ高校に進学した彼は、生徒会活動などでも指導力を発揮し人気を集めていた。彼は雑誌部、自分は新聞部でクラスも違い、付き合いは次第に減った。やがて受験勉強が忙しくなり、自分は父に我儘を言つて、夏休みは北海道の叔父の家で過ごしていた。ある晩、噴火湾沿いの浜辺に散歩に出ていたら、叔父が「親父から電報だぞ」と持つてきてくれた。「Y君山にて死す。帰京するか」

帰りを急ぐ青函連絡船の夜の甲板でも列車の中でも、

思うのは彼のことばかりだったが、それはどれも取りとめがなく、何一つとして形をなさなかった。

東京郊外の彼の家に駆けつけ、告別式には何とか間に合った。庭に流れてくる読経の声を聞きながらふと見上げると、青天に咲く百日紅の花の色が目にしみた。

家に帰ると父が「Y君のお父さんは陸軍報道部長だったな。新聞で何回か読んだ」と言った。そのころには「陸軍報道部長のO大佐」という名前は何となく知っていたが、「Y報道部長」というのは初耳だった。父はまた「大学時代に親友を山で失った」とも言った。

それから大学を卒業するまで、毎月の命日には彼の家に三十人ぐらいが集まった。Y君の母上や姉上の心づくしの持て成しを受けながら夜が更けるまで語り合った。

その後何年経ってからであろうか、地方勤務の記者から東京に転勤し、旧陸軍のBC級戦犯のことを調べる機会があった。それでY君の父親のことを知った。敗色濃くなってからインドネシア・スマトラに派遣され、メダン駐留の守備軍の参謀長を務めた。敗戦後オランダ軍から戦犯に問われ、メダンで刑死していた。一九四九年七

月八日、享年五十五歳であった。この記録を見つけた時、彼が中学時代のある日、帰り道の仲間と急に別れて去った、その時の記憶が腹に落ちて判った。そうだ、あれは七月のことだったのだ。

父親が刑死した時、彼は九歳だったはずだ。生まれて間もなく父親は外地勤務を繰り返しているから一緒に暮らした記憶はほとんどなかったに違いない。オランダの戦犯法廷は戦勝各国の中でも苛烈だったという。ここでは戦闘らしい戦闘もなかったはずだ。旧兵士の一人が「兵隊たちの責任を司令官と参謀長が引き受けてくださった」と語った記録も読んだ。だからと言って、その訴追について云々する資格も備えも今の自分にはない。その部隊がスマトラではじめに駐留したブキティンギは訪ねたことがあるが、メダンにはまだ行ったことがない。

ただ、Y君がなぜ自分の父に原稿を頼んだのか、しかも事前に何一つ断らず、その後も何も言わなかったのか、その気持ちは判ったような気がしている。『息子の部屋』というタイトルはY君が依頼したものではないだろう。だが、それを知る術はもうない。

六代目久右衛門

矢澤 正二

「矢澤久右衛門」は、私の祖父の名前である。私が生れて間もない頃にこの世を去り、その顔を知らない。

祖父は滋賀県甲賀郡水口町の出身で、所謂近江商人である。近江商人は大坂商人や伊勢商人と並ぶ三大商人である。「琵琶湖の鮎と近江商人は、他所へ行つて出世する」と言われるように、次男以下は他県へ奉公に出るのが習わしであった。

我が祖父も神戸の貿易商に奉公の後、静岡で代々漆器商を営む矢澤家に入り、認められて番頭を努めた。

矢澤家の長女と結婚し、婿となり六代目久右衛門を襲名した。ちなみに五代目も婿であり、昔の商家は婿が一般的であったようだ。贅沢三昧をしてボンボン育ちの総領息子より、たたき上げの番頭のほうが、商家の跡取りには好都合であったのだろう。

静岡漆器は江戸時代、浅間神社造営のために全国から

集められた漆工が、その後も気候温暖で住みやすい静岡に住み続け、その技法を伝えたという。

そこで久右衛門は六男四女計十人の子をもうけた。「産めよ増やせよ」の時代であったにせよ、多産であった。私の父はその四男であり、私はそのまた次男である。

そのころから矢澤家は、静岡市内の中心地、七間町（ひちけんちょう）にあり、「七間町の家」として今でも一族の心のよりどころとなっている。

久右衛門の実家のルーツを探すと、近江商人といえは、大陸からの渡来人説。そろばんにたけ、何事も計算で動く。次は関ヶ原の戦いで敗れた石田三成の家来にその名を見つけ出す。はたまた、滋賀県甲賀といえはやはり忍者のはしぐれか。先祖探しの夢は際限なく続く。

近江商人の経営哲学である「三方よし」とは、「売り手よし」「買い手よし」に加えて「世間よし」とし、社会貢献するのがよい商売である。久右衛門は、豪放かつ勤儉篤実で家業の拡大に努め、そして推されて静岡の商工会議所の会頭を務めたという。

時代は第二次世界大戦の末期、戦況は著しく悪化し、大陸ではソ連の動向が危惧されていた。無能な日本政府と軍部は、終戦の決断を先送りしていた。

その頃静岡では、特産品のお茶がソ連のシベリア地方に輸出されていた。そのお茶がソ連兵のビタミン源として用いられていると考えた。

そこで、我が商工会議所の会頭は、お茶のソ連への輸出を止めるべし、さすれば、ソ連兵はたちどころにビタミン不足に陥り、脚気、皮膚病がまん延し、戦意は喪失するであろうと。

一九四五年八月八日、ソ連は突然の対日宣戦布告により、理不尽にも日本の軍隊および罪なき居留民に雪崩を打って襲いかかったのである。その殺戮と略奪は、八月十五日の日本のポツダム宣言受託後も続き、九月四日にやっと終了した。その後のシベリアの強制収容所での苛酷な抑留生活は、「飢餓」「酷寒」「重労働」というシベリア三重苦として涙なくして語れない。

しかしながら、静岡からのお茶の禁輸のため、ソ連兵

の間にビタミン不足による脚気や皮膚病がまん延したとの記録は、残念ながら何処にも残っていない。

こうして、久右衛門は日本の敗戦の結末を待たずしてこの世を去った。

久右衛門のいた「七間町の家」から出た子供十人、孫三十八人、さらに曾孫、玄孫達は今、全国各地でそれぞれの生活をしている。



七間町の家

ママさんランナーの挑戦を見続けて

松谷 隆

ついにその時がきた。平成二十六年一月二十六日午後二時三十分である。大阪長居競技場で、ママさんランナー赤羽選手が三年ぶりに見る笑顔でテープを切った。二位になった彼女のラストランである。

昨年十一月、赤羽選手がこの大阪国際女子マラソンを引退レースとするとの発表があった。夫の周平コーチは、「彼女は一年以上前に大阪で引退と決めていた」と言う。引き金は前年に横浜で勝てなかったためと想像できる。

引退の理由として、①マラソンでオリンピックの表彰台を夢見て競技生活が続けられないこと②ここで切りをつけないと、さらさらと競技を続けることになってしまいうこと、を上げていた。

しかし二十六日のレース後、「やっと娘と一緒に朝ごはんを食べられる」との談話から、小学一年生になった一人娘優苗ちゃんのことを気にかけてきた母親の心情が読み取れる。

三年前、大阪での優勝と八月の世界陸上大邱大会での五位入賞で、ロンドン・オリンピックの代表の有力候補と見なされた。しかし、その後に木崎良子、尾崎好美、重友梨佐たちが好記録を出したため、代表確定を狙って二年前の名古屋ウィメンズマラソンに出場。だが、合宿中の右足首捻挫の影響で八位にとどまり、代表を逃した。

それでも、昨年の世界陸上モスクワ大会の代表入りを目指し、競技を続けた。が、一昨年十一月の横浜国際では、直前の駅伝で足首を痛め、また八位。さらに昨年四月のロンドンマラソンでは三位で表彰台上ったのに、二時間二十四分の派遣標準記録を破れず、さらに陸連の方針変更もあり、代表入りは実現しなかった。残念ではなく、無念だったに違いない。

彼女は女性ランナーとして従来考えられないことを数多く成し遂げてきた。

まずはママさんランナー第一号であること。八年前に愛娘を出産後わずか三ヶ月で復帰した。そしてその後、五千、一万^{ポンド}で自己新を出し、北京ではママさんランナー初のオリンピック代表にまでなった。

なお、現在は世界陸上三度出場のノリツの小崎まり子選手が第二号で続いており、今後の増加を期待したい。

さらに、一昔前には、女子マラソンの出場回数は年二回が限度とされていた。ところが赤羽選手は、二〇一一年には先の二レースに加え、四月のロンドンマラソンに招待選手として出場して六位に入賞している。

去年はもつとすごかった。四月のロンドンの後、七月にはオーストラリアのゴールドコーストマラソンで優勝。さらに八月には調整を兼ねて北海道マラソンに出場し、大差の二位になった。一週間後のフランス・リール国際ハーフで二位。その後、アメリカ・ボルダーでの合宿を

経て、自己新を狙ってシカゴマラソンに出場。だが、二十五キロ過ぎから遅れ、七位に終わった。

四月からみると、今回の大阪は五レース目である。それも半年の間に四レース＋ハーフ二レースだ。まさにスーパレディーだ。この活力源はどこにあるのだろうか。ゴールドコーストで一緒の公務員ランナー川内優輝も顔負けだろう。いずれにせよ、年間フルマラソンを五回も走る女子選手が今後出てくるとは到底思えない。

出産二日前のランニング映像を見て以来七年二ヵ月間、赤羽選手の活躍と挑戦を追って書き続け、本稿で十一編となった。仲間からは「お蔭で、マラソンや駅伝の放送を見聞きするようになった」と言われている。

周平コーチと有紀子選手に敬意と謝意を表するとともに、新分野での挑戦の成功を祈念するものである。

ボン・ボヤージ！

ストレンジ先生 生誕百六十年祭

高橋 孝藏

日本にスポーツを広めたストレンジ先生の誕生日は、丁度百六十年前の十月二十九日。彼の偉大な功績を考えれば、生誕百六十年祭を開き、感謝の念を伝えてあげるのが自然の成り行き。

しかし、これに気付いたのが二〇一三年六月、慌てて十月開催に向けて、準備することとなった。青山霊園のストレンジ先生の墓前で礼拝をあげ、近くの会場で懇親会を開く式典を企画した。

だが、牧師、聖歌隊、携帯オルガン、会場確保、飲食代など経費見積もりは数十万円にもなった。たじろがなかったといえは嘘になるが、走り始めたものをストップさせるわけにはいかなかった。一方、参加者勧誘に確かな手ごたえも感じ、不安感は軽減した。

そして、当日が来た。台風は通り過ぎたが、朝から雨

が降り始め、集まりが心配になってきた。

しかし、その危惧は全く当たらなかった。予想を上回る七十名強の参加者が墓所に集まった。河野洋平日本陸上競技連盟名誉会長、横川浩会長、大久保尚武日本スポーツ協会会長をはじめとして、スポーツ界の幹部、スポーツマン、スポーツ史の重鎮阿部生雄筑波大学名誉教授、そしてアメリカやフランスからも学者や研究者、末裔が参列した。

大勢の参加者を前に、雨の中で聞く牧師の祈りと聖歌には特別の風情さえあるように思えた。

仲間をはじめ、多くの方々のご協力を得て、式典は大成りに終わった。

墓所の整備は日本陸上競技連盟にお願ひし、以前より数段立派になった。新しく顕彰碑も建立され、その碑文を考えさせていただいた。

ベースボールマガジン社はプロのカメラマンを用意したが、腕達者な羽田壽夫氏（東大ポルト部OB・企業OBベンクラブ）にも写真を担当していただいた。

ところで、青山霊園は都内有数の桜の名所。桜の季節

に散策するのは乙なものと思うが。霊園内の外人墓地に立ち寄れば、日本の近代化の礎を築き上げたお雇い外国人を偲ぶことができる。フルベッキ(近代日本建設の父)、ブスケ(日本陸軍創立に貢献)、ワグネル(殖産興業の推進者)、キヨツソーネ(精密印刷の父)などのお墓が並ぶ。ストレンジ先生の墓にも訪れ、作者名は明記されていないが、小生が苦勞した碑文も見ていただき、辛口の批評をいただくことができればありがたいものである。



立教大学八木正言司祭
(撮影 = 羽田壽夫氏)



河野洋平日本陸上競技連盟名誉会長

(撮影 = 羽田壽夫氏)

志とサステナビリティ ― 年末年初の出来事から ―

橋本 政彦

正月から玄関を飾っていた南天、白や黄の菊、千両も大寒を過ぎてそろそろ寿命となりそうです。長いこと玄関を彩って有難いことでした。一月十日には成田山に恒例の初詣に行きました。寒いせいか参拝客は少なく、本堂ご本尊前の広間、護摩壇横の緋毛氈に座り、ご祈祷、お護摩を受けました。供えられていた献花は、松、白菊、千両、黄菊、葉牡丹。長持ちする美しい象徴、縁起物として飾られているのが分かります。松は常緑の栄木、菊は長寿の象徴で、菊の花ことばは白が真実と誠実、黄は高潔で、その願いが込められています。人々のこれらに託した願いが長命や長久であるのを表しています。

十二月、大学同窓で応援指導部にいた後輩から現役の定期演奏会のチケットを貰ったので、友人を誘って行きました。応援指導部、吹奏楽団、チアリーディング三部合同の定期演奏会を見たのは今回初めてです。日頃から

鍛えられ、統一された技の数々が次々に披露され、あつと言う間に時間が過ぎました。色鮮やかな吹奏楽団のユニフォームとマーチング、チアリーディング部の若い女性による潑刺たるアクション、どれもこれも熱演で、若さと熱意が観客に十二分に伝わって、会場は大いに盛り上がり、フィナーレを迎えました。「練習は不可能を可能にする」という持続性の大切さを実感させてくれました。参加者が日頃は忙しくて忘れていた思いや願いを呼び覚まして、爆発させたように見えました。心がリフレッシュされ、新年への新たなパワーを得たように感じ、来年もまた来たいと思いました。

年末には日本全国でベートーベンの「交響曲第九番」二短調「合唱付」が演奏され、新年を迎えるのが文化として定着しているようです。私の友人たちも合唱団に参加してこの第四楽章F・シラーの賛歌「歓喜に寄す」を独語で合唱しています。その一人によれば、合唱は時間になれば約七分間程度ですが、練習には三ヶ月かけているそうです。構成メンバーは約百四十人。合唱では、高音のパートを歌うのが多く、歌唱力が求められると、苦

労話を楽そうに聞かせてくれました。フィナーレでは、会場全体の非常な盛り上がりで勇気づけられると語っています。この第九の演奏は、日本では一九一八年八月、第一次大戦中に徳島県の坂東俘虜収容所に収容されていた独兵たちが行ったのが初演で、年末に定例化したのは戦後に入ってからのです。年末に「第九」の演奏会が行われるのは、日本人の生活や季節感にじっくりし、心がオフセットされ、人生を生きて行く力が湧いてくるからでしょう。合唱に参加する友人たちも、生まれ変わって新たな年を迎えられると感想を述べていました。この交響曲はベートーベンの音楽性の極致で、人類の獲得した価値「高潔な善意の行動、自由の尊厳」、そして「人類愛」を歌いあげていて、永遠に輝きを失わず人々を勇気づけています。これからも歌い継がれていくでしょう。ベートーベン は合唱を交響曲に加えるという試みを世界で初めて成功させました。この歌は平和の源泉の賛美だからこそ、人々の心に響き続けるのだと思います。しかし、現実の日本を取り巻くアジアの情勢は、複雑で厳しく、その理想からほど遠いようにも見えます。その実現

には長い目が必要です。各国のリーダーには、現実を大局的に捉え、人々の暮らしを良くするのが、政治の原点であることを見失わない強固な信念が試されています。それには忍耐力と知恵が求められます。理想を見失えば、大きなリスクに直面します。偏狭な見方を捨て去り、グローバルで長期の視点が肝要です。個人も同じです。限界を知り、環境と人類の視点で対策を講じる「持続可能性 (Sustainability)」の精神を思い出すことも大事です。論語の子路第十三の十二に「子曰く、如し王者有らば、必ず世にして後に仁ならん」とあります。この大意は、「もし天命を受けた王者が現れたならば、一世代(三十年)かければ必ず仁が国中にいきわたるだろう」とのことです。事の成就には長い年月がかかるので、倦まずにその願いに向けて一歩一歩と努力するよう論じています。

われわれは日々の些事に右往左往し、自分の願心、人生の指針たる目的、戦略を忘れがちで、それを思い出す工夫や仕掛けが要ります。年末年始は時期的には丁度良いタイミングです。そんな感慨を強く持った年末年初の出来ごとでした。

奥多摩吟行いろいろ

保坂 令華

十月八、九日の一泊吟行に、いそいそと旅の準備をする。皆さんにお菓子でもと思い、買い物に行った。いつもの帰り道の丘に芒が美しく光っている。「そうだ、仏前に供えましょう」と二本抜いて、三本目を抜く折に道路にひっくり返る！ 起き上がることが出来ぬ私を見て、同年輩の女性の方が飛んでくださった。右足膝、左手肘などから血が！「病院に行ったほうが」と言われたが、私の家はすぐ近いのでと、荷物や身体を支えていただきながら帰り着く。お礼を言い、名前をお聞きする。跛を引きながら、救急箱から消毒液や傷薬を出してつけ、痛み止めの薬があったのでこれも服薬。落着いたところで重子さんに電話。「明日の吟行、無理かも」と言うど驚かれ、「すぐ飛んで行くわ」という彼女に、夕方まで様子をみると伝える。とにかく冷やそうと、保冷剤を布に包み、傷の痛みを押えるべく横になる。四時半

に起きてゆっくり家の中を歩いてみる。膝の痛み以外は楽になった。捻挫や骨折は無いと思い、重子さんに電話。「家まで迎えに来て下さる」との優しさに胸が熱くなる。荷物をできる限り少なくし、タクシーで駅へ。重子さんに助けられ、知世先生の車に乗ってほっとする。先生の運転で一路青梅に。東京からの仲間たちと蕎麦屋で合流。

新蕎麦の昼餉旅路の始めとし

ケーブルで御嶽駅に。晃也さんが手配してくださった宿坊の迎車に私だけ乗る。宿坊の息子さんの運転で、細い山道を上がったり下ったり。途中の景色や古民家の説明を聞きながら宿坊「三楽荘」に着く。

雲流れ展げし空や風は秋
逐道を抜ければ御岳秋深む
秋海棠宿坊の庭溢れ居り

全員集合。一休みして、いよいよ御嶽神社へ出発！

神社に着くまでは急坂で、大変な思いでやっと神社に着く。私が思っていた以上の立派なお社に感動！　ここまで来られたことに心から感謝の参拝をする。

御嶽への細る坂道蔦紅葉

神域の苔むす大樹薄紅葉

落葉散る磴の險しや深呼吸

下りのほうが怖く、ゆっくり休みながら宿坊に辿りつく。句会は三時半より始まる。時間がなく俳句作りに必死！　句会では、怪我の功名か、ご褒美にトップの成績でお開きになる。

夕食六時より自家栽培の「山菜の膳」に舌鼓を打つ。

二次会は三楽私設美術館で。ここがまた、川合玉堂や吉川英治をはじめ陶芸家の北村西望など、ここに泊られた芸術家の数々の作品、古民具などがあり、びっくりする。翌朝、希望者五名が神殿の間でお祓いを受ける。お札と、各自に色紙を戴く。私には、「絶対大丈夫と心から思うと、それは自分の安心につながるから」と書かれて

いて、有難く戴く。

その後、玉堂美術館や沢の井酒造を見学し、来た時と同じに、東京組と横浜組に別れ、無事に吟行を終える。先生始め仲間に感謝、感謝です。



零戦パイロットの話

横内 則之

おなじみの話題作『永遠の0』を観た。小説には及ばないが、良くできている映画だった。

愛する妻子の為に何としても生きて帰ろうとしたが、結局最後には特攻を志願して戦死する「零戦」エースパイロットの話である。当世の安易な生き方しか知らない者には、大義の為に命懸けで戦った当時の若者のひたむきな姿に素直な感動を覚える。お国の為とは言いながら、本音では家族の事を案じつつ飛び立っていった者は数多かっただろう。戦争末期の日本軍の死傷者は敵の十倍以上だった。そうした中で最後の手段であった特攻は、約四五〇〇名の犠牲の下に、敵に二倍以上の損害を与え、絶大な戦果をあげた。特攻を捨て石とか無駄死という言葉の方は、英霊に対する冒瀆であると思う。

ただこの中で、生き残るために、主人公は小隊長の身でありながら敵との乱戦の中で、決まって戦域外へ逃避

を繰り返すのであるが、いかに小説とはいえそんなことが有り得るのかという疑問は残った。

この映画を観て、一昨年インタビュした本物の「零戦」エースパイロットの話を思い出した。長野在住のH氏は日中戦争から戦闘機乗りとして鳴らし、真珠湾、ミッドウエイ、ガダルカナルを零戦小隊長として戦って、映画の主人公とは多くの戦場で交差していたことになる。以下、氏のエピソードと私見の幾つかを紹介したい。

「南京の城門爆撃に参加し、陥落直後に市内に入った。市内は平穏であったが、揚子江畔では、便衣兵の処刑を目撃した。二―三台のトラックに乗せられて来たので、人数は百とか百五十人程度であった。一般人三十万ないし四十万人の虐殺というのは噂も聞いたことが無いし、考えられない」とのことだった。ただ、市民の大虐殺は虚構にしろ、山田支隊や市内掃討部隊による捕虜、便衣兵の大量処分の記録もあり、無抵抗の者を大量に殺したとなると、大虐殺と言われても仕方ない様に思う。

「真珠湾では、残念ながら母艦の上空警戒役だった。ミッドウエイでも、各母艦から三機の零戦直衛隊が上空

警戒に当たり、自分は『蒼龍』の小隊長として任に着いた。敵の第一、第二波の雷撃機五十機は、一機を残し全機撃墜したが、低空域にいたために上空は空っぽで、突如現れた急降下爆撃機には対応できず、空中ですれ違っただけとなった。振り返ったときには、『赤城』、『加賀』、『蒼龍』は既に炎上していた。後は『飛龍』に移り、戦闘を続けたが、『飛龍』も被弾して海上に不時着し、駆逐艦に救助された。『零戦』にはモールス信号機しかついておらず、現場は各小隊長任せであつたために、連携が悪かつた。もし、直衛隊に総指揮者がおれば、こうはならなかつただろう」とのことであつた。ミッドウェイ作戦は杜撰で、情報の漏洩や、暗号が解読されていたとの話であるが、これは敵空母をおびき出すために意図的にリークしていたのではないかと思う。また、よく「魔の五分間」と言われるが、対応する時間は充分にあつた。要は慢心により合理的な指揮運用とリスクマネジメントを怠つた結果である。南雲中将は航空戦に素人だったので、航空参謀の源田実中佐の責任は重い。

「ガダルカナル戦のとき、逃げる敵の『グラマンF4F』

の一機が反転して向かつてきたので、正面から撃ち合つて相撃ちになつた。墜落しながらもエンジンを切り、片翼をヤシの木に引つ掛けて衝撃を減じ、重傷を負つたが九死に一生を得た。この傷がもとで第一線を離れ、最後はロケット戦闘機『秋水』の指導教官として終戦を迎えた。この時の米機パイロットも奇跡的に助かつており、一九九一年にテキサス州で行われた『日米開戦五十周年記念式典』で奇しくも再会し、無事を喜び合つた。彼の機体は、二五〇発もの銃弾を浴びていたそうである。生死は紙一重である」と不思議な縁を語ってくれた。

「戦争を憎み、平和の尊さを語り継いできたが、慰霊のための靖国参拝は他からとやかく言われる筋合いはない。戦後の日本は大和民族の誇りをなくしてしまったのではないか。この日本は自分達が護るのだという『気概』と『誇り』を持つてもらいたい」と締めくくられた。これが旧軍兵士の偽らざる心境だろう。

飛行服に身を包んだ精悍な闘志あふれる若者がこの温和で上品な好々爺と同一人物とは、どうしても結びつかなかつた。時の流れとは思議なものである。

親子三代で築く文化

上原 利夫

書き物や写真がなければ、先祖や係累を遡るのは難しい。記憶で辿れるのは祖父母までがせいぜいである。子や孫に伝えておきたいことは書き物もよいが、子育ての過程で自然と覚えるように仕向けるとよい。核家族で夫婦共稼ぎの場合は、家族の習慣やルールを作ろう。

古典芸能の世界では、芸を演じる役者たちが親子三代かけて芸を残す。そこには家族よりも、子弟の関係が流れる。良い事例と言えないが、三代にわたる政治家もいる。戦後は大企業が栄え、中小企業が衰退したので、世襲とか家業を継ぐ子弟は稀である。

東日本震災の被災地の寺院を巡って見舞われた総本山知恩院の門跡の話によると、故郷にはお祭りと先祖のお墓がかならずある。つまり、お祭りやお墓は心のふるさとであり、文化遺産の中核なのである。

私は大阪市で生まれた。昭和二十年の戦災で焼けるま

で、親子三代が同じ家で住んだ。家業の創始者である祖父は私が生まれる前年に亡くなっていたが、婿養子の父が跡目相続をし、家業を大きくした。しかし、戦中戦後是不況だったので、三人の息子は跡を継がず、三代続かなかった。次男の私はサラリーマンになり、最初の家は大阪で建てたが、海外勤務の後に大阪の家を処分し、東京に家と墓を建てた。今から二十五年前だった。子供らは、それぞれに馴染んだ大阪や外国の景色を心に残し、東京の生活を楽しみ、新しいこの家から巣立った。

彼らも年齢を重ね、長女五十二歳、長男五十歳、次女四十五歳、三女三十六歳になっている。孫は六人、上は二十二歳、最年少は一歳で唯一人の男である。このあたりがわが一族の転機かもしれない。八十に手が届く私が親子三代の構想を練る。

昨年の秋、私はある現実を認識した。家内が脱水症状の治療のため入院したとき、わが一族内で連帯保証人になつてもらえる人は三女の夫だけだった。長女は未亡人になったばかり。長男と次女は外国に住んでいるので、

急場には間に合わない。

親の財産を相続する者が、親の入院治療費支払いの連帯保証人を免れるのはおかしい。私はこれから遺書を書くのだが、祖父母や父母の入院費用の支払について、相続権者には連帯保証債務を負わすべきだろう。先般、婚外子の相続権は嫡子と同じであると最高裁が判示したが、一族に幸をもたらす親と子の役割を考えると、これは参考となる。

墓の問題もある。墓は金銭問題のほかに一族の人間関係が絡む。私と家内が相談して建てた墓は、私と家内の血を引く者とその配偶者が入れるようにする理念に基づいている。世間の妻たちには自分やペットのみが入る墓を考えている人が増えているらしいが、そこには故郷の想いはない。私はこれを「親子三代の文化」という観点に基づいて解決したい。

医療、介護、育児は国を挙げての問題になっている。親子三代は、二代に比べ、関係者の大きな努力が必要になる。私は二代と三代の中間的な家で育ったから、祖父母の役割もある程度分かる。日本には文化と伝統を守る

古典芸能の世界がある。百年、二百年企業も、家訓に従い、伝統を継承する。しかし、新しい良さを生み出す努力を怠らない。親子三代に伝わる文化である。

文化の継承をもたらす最大のものは住む家に表れる。私が現在住んでいる家は、私の三番目の作品であり、自分の設計に納得している。二十五年経っても飽きがこない。わが一族の拠点にしたいと思う。

私の死後、家を安易に処分されては文化が残らない。たまたま機会があったので、家を法人名義にし、私は会社到家賃を払っている。三女一家と同居することも検討したが、三女の仕事に欠かせない保育園が家の近くになり。運よく、孫が通う保育園の近くにマンションが建つた。交通の便も悪くない。我が家から遠くないから、親子相互に安心で、一件落着した。

外形が整ったので、今後は築く文化の内容である。来し方を顧みると、日本経済と勤務先の業績に貢献した自負はあるが、子育てはいまいちであった。

それでは、一歳の孫が成人するまでを目標として、日本の文化に適合する一族にしたいものである。

私の八十五年

中川路 明

私は、このクラブの消えつつある老兵です。昨年、脚の故障で外出を制限されて、このホームに入居しました。ご無沙汰で申し訳ありません。

恩師の「自分の進みたい道に耐える体を鍛えよ」の言葉に、小学校以来三十年間をラグビーに熱中し、就職後は大和の回転砲塔を参考にボンチ絵構想を固め、初の国産密閉回転炉を無休五年で完成、物造り成功の虜になりました。素材供給専門の会社を、社会に役立つ物造りの会社に変身させることを訴え、新製品開発担当に。子会社「富士写真フイルム」との競合を避け、蒸着フイルムで電材入力装置タッチパネルを発意し、若者十二人とベンチャーを設立しました。世にない新船の枯れすすき船頭で苦渋しましたが、シリコンバレーや独・仏の同志を得て、超音波表面弾性波方式タッチパネル「インテリタッチ」を完成しました。更に、アップルのジョブズ氏の携

帯電卓電話の入力装置に取り組み、スマートフォンを十年で完成。遂に念願の世界一を達成し、皆と美酒を傾けたことが華の思い出です。

私の引退後に米国の博打経済が破綻し、経済変動で会社は解散しましたが、物造り同志はそれぞれ独自の商品で独立し、逞しく世界シェアを獲得しました。昨秋、久々に全員が集合して、思い出話に花が咲きました。

さて、話変わってホームでの生活をご紹介します。

退職後の私は、社会への恩返しと、社労士に転業しましたが、新しくテニスを始めてすぐに心筋梗塞が発見され、走ることを禁止されました。その後、横浜の名医の指導で多くの人と泳ぎ、プールサイドの監視人や太極拳指導者の助けを得て、病を克服しました。

自立可能高齢者向け住宅は、介護給食のほかに多様な趣味への対応を掲げており、高額でした。しかし最近、同宿の友人の死亡などにより、共有の趣味活動の維持が難しくなりがちなため、より安価なグループ活動を主とする介護住宅が急増しています。

私のホームでも、食事・介護・生活整備を介護マネージャーとヘルパーが分担しています。体操・娯楽・歌唱・書画・手工芸など、楽しいことの多い単身寮です。

私は、ラグビーの合言葉“All for one, one for all”（皆は一人のために、一人は皆のために）をモットーとする人間です。日本人にありがちな自己本位と協調性欠如は笑顔のグループ活動形成に掉をさします。また、高齢化による意欲減退も障壁となっています。

元気な笑顔と音楽療法に私は力をいれています。大声で笑うと元気が出ます。また、学生時代はラグビーの練習で音楽授業を欠席してばかりでしたが、年老いてからは音楽に憧れるようになりました。ホーム近くの音楽大学の卒業生から成る専門家集団に薦められて学内音楽会に通い、ピアノスト・久元祐子先生に知己を得ています。

最近ブームとなっている心の故郷をめぐる音楽療法に、痛い脚を引きずりながら出席します。メシヤを聞き、ハレルヤを歌い、神の啓示に多少なりとも触れることができます。音楽療法によって、認知症を患った絵画の名手が、昇天の前日に名画を描いたという症例には感嘆し

ました。

頸部脊椎症で首が痛みますが、毎日を楽しく生きる喜びを持ち続ける燭光を感じております。

末筆に、ホームから望む富士に沈む夕陽を詠んだ句を。

西の空 明日も元気でと 日は沈む



大ジンバブエの遺跡

阿部 典文

西欧先進国の人々にとって、十九世紀半ばまでは南部アフリカ大陸内陸は全く未知の世界であり、満足な地図すら描かれていなかった。

その大陸南部に走る二筋の大河、ザンベジ川（全長三千五百km）とリンポポ川のあいだに広がっている高原の一角の疎林のなかに、世界遺産にも登録されている「大ジンバブエ遺跡」が存在している。

ジンバブエとは現地語で「石の家」を意味し、三百近くに達する石積み建築物遺構が、二km四方に亘って広がっている。中でも目を見張るのは、長径百m・短径八十mの楕円形の「宮殿」址であり、壮大な外壁と内壁・円錐塔等で構成され、石の壁は高さが七m、底部の厚さは六mに達している。そして宮殿址の他に、住居・家畜小屋などが残された複合都市の遺跡となっている。

一八六八年にこの遺跡が発見された時、ヨーロッパの

学者は、このように立派な遺跡をアフリカ人が築いたとは考えられないとして、これこそあのイスラエルの王ソロモンが船隊を派遣して黄金をもち帰らせたという「オフィール」国ではないかと推定した。

また、別の学者は、古代エジプト十八王朝の女王ハプシェプストが船団を送って宝物をもたらしたという未知の国「プント」国にちがいないと考えた。

しかし、この「石の家の国」は、まぎれもない黒人王国の居城であり、神殿であり、都の跡であったことが判明。そして調査が進むうち、この都が十一世紀ごろから作られ始め、十三、四世紀に栄え、十五世紀ごろを境にして、別の王朝へと推移して行った歴史が明確となった。加えてこの遺跡を発掘・調査した学者が何より驚いたのは、そこから中国の陶磁器やその破片がおびただしく出土したことであった。しかも、その陶磁は宋時代に始まり、元・明の時代に作られたものであった。

いうまでもなく宋から明に至る時期は、中国の陶磁器が中近東からヨーロッパに大量に輸出され、王侯貴族や富裕層の富の象徴として収集された。因みにイスタン

ブル・トプカビ宮殿に収蔵されている一万二千点に及ぶ中国陶磁をはじめ、各地にコレクションが残されている。

この陶磁器を運搬したのが、所謂「海のシルクロード・陶磁の道」であった。東アフリカのインド洋岸にも幾つかの交易港があり、中国やアラビアからの様々な商品が陸揚げされていた。なかでも世界遺産に登録されているキルワ・キシワニ（タンザニア）は最も賑わっていた港の一つであった。そして中国の陶磁器は、海のシルクロードに面した幾つかの港から内陸アフリカへ運ばれたと考えられている。

こうした港は中国の絹や陶磁器貿易の拠点であり、インドやアラビアの交易船が盛んに出入りし、また象牙や金、黒人奴隷等が取引されていたことが知られている。

一九九八年、私は縁あって、鉱物資源に恵まれたこの「ジンバブエ共和国（英国の植民地時代のローデシア）」で、日本の国際協力事業団が協力した黒人経営者による金属や木材加工などの軽工業振興のための開発調査に参画する機会を得た。この調査には十ヶ月ほど従事し、国

内を隈なく巡ったが、その時に「大ジンバブエ遺跡」訪問の機会にも恵まれた。

人口百五十万人の首都「ハラレ」は、標高千メートルを越える高地に、白人移民が故郷を偲んで建設した都市であり、母国英国の町と見間違えるような整然とした佇まいを示していた。加えて乾季に紫色の花を咲かせる「タマリンド」の並木は、日本の桜並木に匹敵する景観であり、その美しく明るい街並みの中を、鮮やかな服装で闊歩する原地住民の人々を眼にし、目の前に展開している近代的な大都市と、色彩豊かなアフリカを実感した事を鮮やかに覚えていく。

このように豊かな自然や文化の過去の片鱗が、「大ジンバブエ」遺跡であった。しかし文字を持たなかった悲しさ。長い間遺跡は歴史の舞台から消え失せ、文明先進国から中南部アフリカが「緑の魔境・暗黒の大陸」と蔑視されていた。その言葉の裏には、先進国の驕りと傲慢さが潜められていたことを、広大な遺跡を眼前にして味わった。これは私にとって貴重な思い出となっている。

隠れ里の仏たち

浜田 道雄

伊豆は三方を海に囲まれた、海の幸豊かな国というイメージがよいが、木々の色濃い山深い国でもある。

半島の背をなす天城山系から流れでる狩野川や河津川は山々を削って、随所に深い谷を作った。そして、その谷の奥深くには、木々に囲まれた小さな窪地があちこちにあり、早くから人々が住みついて農業や林業を営んできた。だがそんな山里の多くは今日の幹線道路から外れていて、近代化の波に洗われることなく、昔ながらの静かな佇まいを保ち、訪れる人の心を和ませる。

河津町の南禅寺（「なぜんじ」と呼ぶ）も、そんな山里のひとつである。半島の東岸を走る国道一三六号線を河津町で別れ、今度は河津川を遡る。そして、伊豆急のガードをくぐった先を南に入り、車がやとすれ違えるほどの狭い道を道なりに一キロほど行つて山を一つ迂回すると、突然視界が開けて山間の小さな盆地に出る。南

禅寺の集落である。

南禅寺の薬師堂は、そこからさらに急な山道を十五分ほど登った、谷を見晴らす山の中腹にある。以前からこのお堂には、国の重要文化財を含む藤原時代や鎌倉時代初期のいい仏像が多くまつられていることを知っていた。だが、そこは住職がおらず、南禅寺の里人がみんなで守るお堂であり、仏たちであつたから、いつでも好きな時に訪ねて拝観することはできなかった。

ところが昨年春、この南禅寺地区の人々が仏像展示館を建て、仏像を公開していることを知ったので、早速訪ねて見た。ちょうど桜の咲く時期で、里も展示館に登る急な坂道の周りも満開の桜で飾られていて、山里は華やいでいた。展示館は意外にモダンなコンクリート作りの建物で、昔からの薬師堂と並んで立っている。文化庁の「重要文化財は耐火設備の備わった施設に保管する」という政策によって、国と県から補助金を受けて建設したのだとか。

展示館のメインは平安初期（九世紀）に遡る静岡県内最古といわれる薬師如来坐像で、上野の国立博物館に国

宝として展示されていたが、戦後の文化財保護法の改正で重要文化財となったのを機会に、里に引き取ったものだという。

薬師如来坐像は伏し目がちな丸いお顔をした、座高一メートル余の堂々としたお像で、その彫りの見事さから、近畿地方で製作されてこの地に運ばれたと考えられている。その他の仏たちもかなり傷んでいるが、その作りは素晴らしく、かつては繁栄した大寺がここにあったことを忍ばせる。

里の伝承によれば、その昔この地に那蘭陀寺（なーらんだじ）という七堂伽藍をもった大寺があったという。それが永享四年（一四三二年）の山津波にあって、堂塔は壊れ、仏像たちも土に埋れた。いま、展示館に収められている仏像たちは、その山津波のあとに里人が掘り出して今日まで守ってきたものである。

そうした伝承を踏まえて仏像たちを見ると、本尊の薬師如来坐像以外は、みなその身のどこかが傷んでいる。それは山津波のあと長く土になかに埋もれていたためだけでなく、この地にあって里人に守られてきた長い年

月による損傷もあろう。そこに、仏像たちが耐えてきた歴史をみることができる。

かつて、河津の地は今日の下田のような関西と関東とを結ぶ黒潮航路の中継地で、多くの商人や船主たちが行きかったと里人はいう。彼らはその旅路の安寧を祈って河津に寺を建て、都の仏師に仏像の制作をたのんだ。那蘭陀寺はそんな商人たちが建てた寺の一つだと、人々はいう。

その史実の如何は知らない。しかし、今日このようなすぐれた仏像群がこの山里に残っているからには、この地が京や大阪といった当時の文化先進地と何らかの繋がりをもっていたことを否定する訳にはいかないだろう。狭い谷の狭間に住む里人が、何百年という年月にわたって、ひとたびは山津波によって破壊された仏像たちを掘り起こし守ってきた、その情熱に私は打たれる。

私の他に誰もいない展示館で、いく世紀を経た仏像群に囲まれて、日本人が中世以来伝えてきた宗教への敬意とはなんであつたか、考えさせられたのである。

老人と研究支援

吉 嵩 清 己

私は八十九歳の後期高齢者である。収入は、年金にプラスしてアルファーのお金が入る。現役並所得があるともなされ、健康保険の病院窓口支払いは三割である。車椅子生活の私は、医療費が高いことに不満である。お金を払うことにけちけちしているが、毎年、百五十万円を岐阜大学・応用生物の先生方の研究費用に寄付している。大学内ではC19吉嵩清己研究支援寄付金と言っている。C19は農芸化学の第十九回卒業生（一九四四年）の意である。

寄付を始めたいきさつは、平成十九年発行の同窓会報に記載された農芸化学・生物化学講座・中村征夫教授の、「大学の変貌を見つめて三十六年」という退職挨拶文からきている。それによると、昭和五十八年の校費歳入に比べ、平成十九年度の配分額は5分の1以下に減少しているという。資源の乏しい我が国にとって、生き残る道

は科学技術の振興にあると考えている私には、研究費削減は自殺行為に見える。そこで、僅かなお金であっても研究支援をしたいと考え、平成十九年度から始めた。

最近、文部科学省の科学研究補助金は減少し、研究補助を受けられない先生もいると大学は言っている。先生方は研究を続けるために、他省庁や団体など、研究目的や成果に縛りの多い資金の獲得に走っている。C19寄付金は制約がなく、先生方からのびのびと使用できると感謝されている。

C19支援は、教授を含む全教員を対象とした「一般研究」と、准教授以下の若手教員を対象とした「奨励研究」とに分け、それぞれ研究テーマを募集し、その中の一件ずつを教授会が選定している。年間寄付金は、一般研究百万円、奨励研究五十万円である。研究成果は、特許、学会、学術誌に発表。先生方が世界の学会や学術誌に名をのせる機会が多くなれば、私の支援の目的は達成したことになる。

平成二十五年、第七回「一般研究」を受領した分子生命科学の上野義仁教授の研究は、日本発の新しい核酸

医薬の創出を目指している。風邪薬として有名なアスピリンは構造が小さく低分子医薬と呼ばれる。一方、遺伝子本体であるDNAはヌクレオチドと呼ばれるたんぱく質単位が三十億個もつながる大構造をしている。コピーのRNAも巨大分子で、これら高分子核酸を医薬として開発する研究が欧米日で競合している。治癒が困難なガンやウイルス感染なども、遺伝子構造が明らかであれば、核酸医薬は治療薬になると期待されている。

上野先生の東京に住むお父さんは八十歳。十五年前に脳梗塞で倒れ、杖をついてかろうじて歩ける状態であり、言葉は流暢に話せない。親子は会う機会は少ないが、例えば、先生が知識集約型産業である製薬の先端研究を進めていることについて喜んでくれ、激励してくれる。いつの時代も親は子のことを心配している。

もう一つの平成二十五年度「奨励研究」は、微生物工学の中村浩平准教授の微生物燃料電池がテーマである。古紙・稲わら・ゴルフ場の刈り芝の酵素糖化液を微生物によりバイオエタノールに転換、水分を除去することなく、微生物を用いてバイオエタノールを分解し、発電す

る工程である。

私は昨年春まで、健康保持のため二キロの歩行を日課としていたが、突然足がしびれて歩けなくなってきた。首の骨が神経を圧迫する頸椎症である。同時に血糖値も高くなり、整形外科に入院して首の手術を行った。高齢者の外科手術はダメージが大きく、全身の筋肉は衰退し、七キロも痩せてしまった。足先のしびれはまだ残り、介護保険の認定は要介護2である。車椅子生活なので入浴時は介護員の手助けを受けている。

妻は昨年、脳梗塞で入院し、今は療養中である。私らのように体に欠陥のある夫婦は、三度の食事を提供してくれる老人ホームに住んでいるおかげで生活が助けられている。

しかし老人ホームの生活は刺激が少ない。このような私らに、大学の先端技術に接触できる機会が与えられていることは幸せなことである。C19研究支援は今後も続けたい。必要な寄付金のお金は株取引で稼ぐ。もうかりまつか。まあまあですわ。

歌は世につれ

廣澤 重穂

平成二十五年八月二十二日早朝、藤圭子が死んだ。

西新宿の高層マンションからの飛び降り自殺だったという。自殺、それも飛び降り自殺とは、衝撃的な最期である。

べとつく汗を拭いながらその訃報を聞いた時、何かしら切ない気持ちでいっぱいになった。

彼女の『新宿の女』や『圭子の夢は夜ひらく』、『命あずけます』が流行ったのは一九六九年であり七〇年である。東大安田講堂の攻防戦が繰り広げられ、新宿西口地下広場にフォークゲリラが登場し、東映の任侠ヤクザ映画が絶頂期の頃である。日本のGNPが西側世界で第二位となり、アポロ11号が月面着陸した年でもあった。その頃の私は、まだ田舎の洩垂れ高校生であった。

「噂には聞いていたけど、やっぱりここは雰囲気が違う

いますね」

「ああ。この辺は昔、青線^〱だった所で、今はないがそのあたりに階段があつて、トントンと上つていけばチヨイの間があつたらしい」

薄汚いカウンターの後ろを指差しながら、先輩は得意気な顔で言った。一方の私は遠慮がちに、狭くて猥雑な店内を眺めていた。

初めて新宿ゴールデン街に来た時のことである。

暴力バーの如く法外なカネを請求されるとか、娼婦に声を掛けられるとか、厚化粧たつぷりのやり手ババアに取って食われるとか——何しろ胡散臭い所として知られていた。

その一方で、肩で上着を羽織った文人や、くわえタバコの演劇人がたむろする飲み屋街だともいう。

もちろん一人で来るほどの勇氣はない。得意気な顔で「ゴールデン街に行きつけの店がある。ちょっと付き合え」と言う先輩に連れられ、やって来た。

そんな先輩が大人びて見えた。

壊れかけの扉を開けると、薄暗い店内は煙草の煙で向

こうが見えない。ギシギシいう丸椅子はいまにも崩れそうだ。十席にも満たないカウンターは心なしかべとついている。

客はといえば、ギター片手に一人カラオケに興じる者、カウンターを枕に酔い潰れている者、哲学論や演劇論を理屈っぽく怒鳴り、はてはそのまま喧嘩する者――。

「赤信号みんなで渡れば怖くない？ 一人で渡る覚悟はあるのか、覚悟！」

「見る前に飛べ、飛ぶんだよ！」

「命、掛けてんだぞ、命！」

いまにも酒瓶が倒れ、グラスが飛び交いそうだ。どの会話にも、語尾に大きな感嘆符が付く。

終電車がなくなっても「祭り」は終わらなかった。

異質な価値観を求めてぶつかり合い、壊し合い、そして創造しようというエネルギーで満ちていたように思う。だがその一方で、どこかしらわざとらしい、芝居があった印象もぬぐえなかった。

若い時、そんな雰囲気は憧れた。

太宰治の「ブルジョアですみません」がアルコールの

量を増やす。

それまでちゃんと聞いたことのなかった藤圭子の歌をあらためて「知った」のは、そんな頃だった。

テレビの中だけの『圭子の夢は夜ひらく』や『新宿の女』がぐっと近くなり、酒で増幅される。

今から思えば、そんな芝居があった風景だからこそ、背伸びしていた時代だからこそ、逆に彼女の歌の凄み、諦めの覚悟、ドスのある声、真に迫った負のオーラが、人々の心を虜にしたのかもしれない。

とはいえ時代は、すでにユーミンの歌が流行り始める頃であった。

藤圭子のことを考えていたら、三歳年上の、ある先輩のことを思い出した。

十数年前、新宿で彼はビルから飛び降りた。五十歳になる前の、働き盛りであった。その彼も同じくゴールデン街にたむろした一人だった。

それにしても、本当に昭和は遠くなったものだ。合掌。

「誇り高くない」フランス人

古川 幸雄

学生時代とビジネスマン時代をあわせると四十五年間、フランス本国のみならず、その旧植民地に住むフランス人たちともつき合ってきた。その地に住み暮らした期間も足かけ九年間。それでもフランス人については知らないことが多く、時には新発見もある。

一般にフランスというと、その芸術文化、ファッション、観光地などがよく知られているので、大抵の人はフランス国やフランス人を理解したような気持ちになるのが普通であろう。ところが実はフランス人ほど、外国人に知れないばかりか、誤解されている国民も珍しい。私は知仏派を自認しているが、性格もあって決して親仏家ではない。しかし、あまりにも悪く思われているフランス人を見ると、思わず同情してその誤解を解いてやりたくなるのだ。

若い頃から先輩ビジネスマンや米国人によく言われ

た。「フランス人には気を付けよ。英語を話せるのに決して使おうとしない。フランス語に誇りを持ちすぎる」と。

今日この頃でも、フランスに観光旅行した人や、又聞きの話として、「フランス人は仏語を鼻にかけている。

英語がわかるのに決して話そうとしない」というような言葉をよく耳にする。以前私は、そのような言葉に疑問を感じながらも、「そうかも知れない」という程度にしか受け取っていなかった。ところがパリに住んでみて、それが大きな誤解であることが、すぐ分かったのである。

まず分かったことだが、パリの標準的なホテルやレストランの使用人で観光客に接する人たちのほとんどは、根っからのフランス人ではない。主として、スペインやポルトガル、旧植民地からの出稼ぎ人や、新しい帰化人である。彼らの中にはフランス語すら怪しい人もいるのだから、まして英語となるとからつきし弱い者が多い。日本人に対して英語を話さないのではなくて、「話せない」のである。

次に言えることは、標準的な教育を受けたフランス人は、われわれ日本人よりは遙かに上等な英語を話すこと

である。新しい大きなホテルでは、完全なクイーンズ・イングリッシュを話す従業員を揃えている。ところが、彼らと接する一般の日本人旅行者はどうだろうか。自己流発音の英語がなかなか向こうに通じない上に、相手のきれいな英語を理解できない、というケースが多々あるのだ。仕方なしに先方はフランス語を口に出して嘆くことになる。

そのことは一部のアメリカ人や米語に堪能な日本人にも言えることである。俗語まじりのアメリカ英語とイギリス英語では通じない場合があることに、お互い気づかないでいる。

日本のビジネスマンは一般に仏語より英語に馴れているので、大事なビジネスには英語を使うことが多い。その場合、相手になるのは教養あるフランス人であるから、自然に英語で話す。私は実際に、「英語がわかるのに仏語しか話さないフランス人」に出会ったことは一度もない。しかも、大抵は私よりも英語が上手だった。

フランス人をあまり知らない人が「フランス人は異常に誇り高く高慢である」と断定するのは、どこから来る

誤解だろうか。他から注入された先入観もあるが、多くはフランス人の特徴的なジェスチャー（ボディー・ランゲージ）から来るのだと私は思う。

日本人と最も異なるジェスチャーは、「肯定」「賛成」「承諾」を示すそれである。「否定」のときは、われわれと同じく首を横に振ることもあるが、「肯定」のときはうなずくのではなくて、「はい」とか「かしこまりました」と言いながら、反対に首を上げるというか、あごを前に突き出すようにするのだ。この習慣を知らないと、いかにも鼻で「ふん！」とあしらって、人を見下しているように受け取られてしまう。そうと知らない日本人はムツとするが、相手は、——好意を示しているのになぜ怒るのかさっぱり分らない——ということになるう。



約 束

浜 口 須 美 子

「三十年後にまたこのハワイに来ましょう。そして、この同じ場所で、同じポーズで写真を撮りましょう。」
二十四歳の夫と私は、ハワイの海に三十年後に再度来ることを約束した。

そして二〇〇九年。結婚三十年を迎えた。

ひとくちに三十年と言っても、夫婦の歴史は、簡単には語れないほど、何枚ものページの物語を作ってきた。授かった二人の子供達はすでに、あの時の私達の年齢を越え、それぞれに一人前の社会人として自分の足で歩き出している。

ハワイの海との再会の約束を果たすために、まるで映画のバックトゥーザフューチャーの車に乗った気持ちで、行き先は1979年。青い空、青い海のハワイに設定。行く前に、古いアルバムを取り出し、新婚旅行の写真をバッグに入れる。

三十年前と同じ場所で同じ構図で写真を撮るという目的のために、スーツケースには新婚旅行で着たムームーも入れた。

夫婦の歴史の生き証人の二人の子供達も会社の休みが取れて、私達は大阪から、息子は成田から直行便で出発。ホノルルで合流し、家族のハワイ旅行が実現した。

空港でタラップを上がる写真。なのに時代の変化で、空港ビルから飛行機に直接に乗り込める。最初から、三十年の時の流れを感じてしまう。

まずはワイキキの浜での水着で記念撮影なのだが、さすがに水着写真は息子と娘に代理モデルをお願いした。インターマーケットプレイス……こんなだったかしら？　ここかしら？

三十年ぶりに訪れたハワイを普通に楽しむのもいいが、目的を持って昔の写真を片手に持ちながら探しまわるのも、犯人探しのサスペンスドラマのデカ役のように盛り上がる。

食事はトップオブハワイで。
ホテルのオーブンカフェでは、ブルーハワイという

ネーミングのカクテルをストロー二本で飲む写真を撮影する。

課題は山積みである。

そして、部屋に入ってベランダでのツーショット。新婚旅行では三脚利用での撮影だったが、今回は子供達がこの他愛ない親の遊びに全面的に協力してくれて、息子が監督、娘がカメラマン。またもや昔の写真を片手に、同じ構図、同じポーズで撮影する。

「以前のムームーが、伸びる素材でよかったね」とか、「お父さん、お母さんの腰に手を回して」とか、「なんか母さんの腰のくびれ方が昔と違う」とか、監督やカメラマンの言葉に笑ってごまかしながら、結婚三十年で、二人の原点のハワイに今度は家族で訪れ、しかも子供達の指示でポーズをつけて記念写真を撮っている。なんて幸せなことだろう。

ハワイの海は三十年前の約束を果たしに来た私達をしつかり受けとめ、祝福してくれた。

ツーショット写真のついでに家族揃っての記念撮影をした。

この家族写真を持って、また同じ場所で同じポーズで撮影したいと思った。そのときにはまた、賑やかな家族が増え、三世代での記念撮影ができたらしいな。

私は心の中で再びハワイの海に約束した。
十年後にまた来ます。



スイスはなぜ重武装国家であるのか

志村 良知

アルザス駐在時代、スイスまでは家から一時間のドライブだったので、四季折々や、お客様があつた時など、頻繁に旅した。スイスに親しむにつれ、なぜ重武装国家であるのかという視点からも眺めるようになっていった。

スイスの国土は、北側は比較的平ら、中央と南側はアルプスの山岳地帯である。そこでの移動はアルプス山脈の要所にある峠の道路や鉄道やトンネルを越えていく。それらの峠とそこを越える為の交通手段は、スイスにとって重要な観光資源でもあり、交通路は周辺国に開放されていて国際的な交易に寄与している。

スイスには周辺国が戦争してまで獲りたい重要な資源や産業があるわけではない。スイスの唯一の軍事的価値は周辺国同士を結ぶ最短連絡路、平時と同様に、通り道としての価値である。

戦時の中立国には、交戦国に自国の領土や領空を利用

させない義務がある。全方向においてこの義務を果たそうとすると、大きな兵力が必要になる。忌避の抜け道がほとんどなく、非常に厳格に運用されている徴兵制Ⅱ国民皆兵制度は良く知られているが、ドイツ製のレオパルドⅡ戦車三九〇輜とアメリカ海軍現用の戦闘機F-18ホーネット三十三機を核に、国土面積や人口に比しての最新兵器装備率も世界屈指である。民兵には高性能自動小銃が常時個人配備されており、彼らがこれを肩に町を出歩く姿を私も見たことがある。国民には有事の際の心得を徹底的に教育しており、その内容には核攻撃への対応も含まれている。

スイスは元々尚武の国である。弓の名手ウィリアム・テルは十四世紀にハプスブルクと戦って国の礎を作った。十七世紀の初めに至るまで、ハプスブルク、サヴォイア、ブルゴーニュとの戦いに勝って、その版図を現在のスイスにまで拡大した。戦いによって国を築いたスイス人には「祖霊ましますこの山河、敵に踏ませてなるものか」という気概があるのだと思われる。

第一次大戦時、周囲全部が戦場となり、進撃路や補給路が欲しい交戦国に侵入される可能性があった。スイス連邦政府は全国民に一切の侵略軍に対して降伏禁止という政令を出し、一歩たりとも国土を踏ませない態勢をとって中立を守った。

ナチス・ドイツは第二次大戦前から大きな脅威であった。スイス防衛の戦略は、北部は焦土化して放棄し、中部から南部に下がって防衛拠点を構え、最大八十七万人を動員して戦うというものだった。焦土化放棄される対象は人口密集の北部農工業地帯の全部で、チューリヒ、バーゼルといった大都市も含まれた。

この壮絶な覚悟と、政治的軍事的には絶対中立を守るが経済は別、というしたたかなドクトリンで、スイスは第二次大戦をスイスなりに戦った。

中立維持のための直接戦闘も行なっていた。頻発する領空侵犯機は連合軍機、枢軸軍機に限らず対空火器と空軍機を動員して迎撃した。この防空戦闘は、五年間で撃墜二四〇機、損失二〇〇機に及んだ。

スイスが国境を接している国は、フランス、イタリア、

オーストリア、ドイツである。ソ連消滅までスイスはおそらくワルシャワ条約軍対NATO軍の戦争という版図を描いていた。そして核攻撃される事をも考慮して中立を守る体制をとっていた。

二十一世紀の今日、スイス周辺で戦争が起きたり、スイスが攻められたりする可能性があるのだろうか。スイスでもさすがにこうした議論は起きた。しかし昨年、スイス人は国民投票で徴兵制度の廃止を否決した。

翻って日本はどうか。琉球諸島を虎視眈々と狙っている国が、軍事費年率十パーセント増と急速に軍備増強している。琉球諸島には特に資源も産業もないが、彼の国の手に落ちれば、彼の国は東支那海を内海とし太平洋の西半分を制して、日本列島を扼すことが出来る。

日米軍事基地は撤去して平和の島々にすべき、という論議がある。スイス人に意見を訊きたいところである。

庶民の新教皇フランシスコ

松浦 俊博

昨年二月、ローマ教皇ベネディクト十六世が突然退位を表明した。職務を遂行する上での肉体と精神の力が衰えたという理由からであるが、その前のヨハネ・パウロ二世が二十五年以上も教皇職にあったことを考えると、ベネディクトの八年間はあまりに短く、この出来事は全世界を驚かせた。そして三月に行われたコンクラーベでアルゼンチン出身の枢機卿ホルヘ・マリオ・ベルゴリオが新教皇に選ばれた。

私は二つの点でこの新教皇誕生に驚いた。一つ目は前ローマ教皇が退位という形でやめたこと。二つ目はフランシスコという名前が、出身のイエズス会のザビエルに因んで命名したわけではないことである。

まず一つ目の点であるが、ローマ教皇は原則として終身制である。在任中に退位した例は今から六百年前のこととで、もしベネディクト十六世が退位していなければ誰

も考えないくらい昔のことであった。

十三世紀初めに最盛期を現出したローマ教皇は、その百年後の十四世紀初めにはフランス国王によってローマ近郊のアナーニに幽閉された。さらに同国王によって教皇庁が南フランスのアヴィニオンに移転させられた。いわゆる「教皇のバビロン捕囚」だ。この教皇権の衰退に追い打ちをかけたのが大シスマ（カトリック教会の大分裂）である。教皇庁がローマに戻った後にアヴィニオンにも別の教皇が立ち、さらに混乱収拾の会議でまた別の教皇が立ち、同時に三人の教皇が存在した。この状態を終わらせるために神聖ローマ皇帝が提唱してコンスタンツ公会議が開催されたのが、今から六百年前である。この会議では結局二人の教皇が廃位して一人が退位、そして新教皇を選出して大シスマは無事に収拾された。

しかし、六百年前の事件は異常な状態の中で起きた教皇退位である。近年メディアで伝えられるカトリックの腐敗やスキヤンダルは、かつての異常な状態に匹敵するくらい大きな出来事だったのだろうか。

二つ目の驚きは、新教皇フランシスコは彼の出身のイ

エズス会出身のザビエルに因んで名付けたわけではなく、アッシジのフランチェスコに因んで命名したことである。教皇はコンクラーベで自分が新教皇に選ばれると、親友の枢機卿から「貧しい人々のことを忘れないでください」と言われ、アッシジのフランチェスコのことが頭に浮かんだとメディアに語っている。

アッシジのフランチェスコは教皇権最盛期の十三世紀初めの人で、清貧と平和を説いたことで有名であり、豪華な衣装の教皇とは対照的に、ぼろをまとった聖職者である。布教に身を捧げた変人で、何とか異端扱いされずにすんだ彼は、教皇インノケンティウス三世に謁見している。イスラームとの戦争に派遣された十字軍を終わらせるためにエジプトに行ったことでも有名である。

一方、フランシスコザビエルは、イグナティウスロヨラと共にイエズス会を創設した十六世紀前半の人である。新教皇フランシスコは自分が影響をうけた人物として、アッシジのフランチェスコと共にこのロヨラをあげている。ロヨラも布教に身を捧げた人である。新教皇にとって、ザビエルより影響の大きい人たちということ

になる。

私はいく数年、新年をローマで迎えている。古代ローマ帝国の栄華に思いを馳せながら、世界のカトリックの中心ヴァチカンにも足を運んでいる。一月一日の十時からサンピエトロ大聖堂でミサが執り行われる。その様子は聖堂前の広場の大きなスクリーンに映し出され、集まった観衆はその画面を見て一緒にミサを受ける。その後、十二時に教皇は宮殿の窓に姿を現し、観衆に向かって新年の挨拶をするが、世界二十数億人のキリスト教徒トップのスピーチを生で聞けるのは、信者でなくてもわくわくする。教皇の姿が見えると観衆は途端にどよめく。教皇がフランシスコに代わってから、ヴァチカンが行う行事に集まる観衆は三倍になったそうだ。前教皇のスピーチと違うのだろうか、観衆はどんな反応を示すのだろうか、など期待と興味を持って聞いた。すべてイタリア語で、内容はよくわからなかったが、「パーチエ」という言葉が何度も繰り返された。パーチエとは平和のことである。世界平和を願うメッセージなのだろう。これこそ政治を離れた宗教ができることだと妙に納得した。

沖繩について考える

田原 敬

最近、沖繩について知りたいと思うようになった。日本の本州よりも南に位置するこの島は、いにしえよりユーラシア大陸との関係はどうであったのか。

太平洋戦争中、沖繩は「本土防衛」の島とされ、米軍艦艇の砲撃と猛烈な空爆に曝されて首里城は廃墟と化し、夥しい命が奪われた。王国時代の建造物、古文書、絵画、工芸品などが戦禍に消え、星条旗が翻った。

大正十年頃、東京美術学校を卒業し、沖繩に美術教師として赴任して、沖繩の文化、自然、民族などに惹かれるようになった鎌倉芳太郎という人物がいた。

鎌倉は沖繩のあらゆることに興味を持ち蒐集した。染めに使う型紙も自身で創作し、驚異的な集中力を発揮して多くの作品を残している。また、かつての琉球王国の遺産である首里城が大正末期に取り壊されることになったとき、香川県生まれの鎌倉芳太郎はその阻止に立ち上

がった。

結局、首里城は保存することが決定され、「国宝」に指定された。昭和の初期には大々的に修理され、城は蘇った。

鎌倉芳太郎ほど琉球を観察し記録した人物はないと言われる。彼は沖繩本島各地、八重山、奄美の島々を隈なく歩き、芸術、文化、歴史、民族、宗教、言語など幅広く研究している。古文書の多くを緻密に筆写して残し、約十六年間にわたって膨大な資料を残した。

この青年教師は当初「情緒を味わう旅行者」の気分で歩き回り、本土とはあまりに違う沖繩の風景に新鮮な驚きを感じて、景色に映える王国時代の建物などをひとり熱心に見て歩いたそうだ。

私は二〇〇四年の五月に家族とともに三泊四日の沖繩ツアーに参加した。大変印象に残る旅であった。

首里は水の都でもあり、石灰層に降った雨が粘土層に溜まり、湧水となって溢れ出てくる。この水が利用され、泡盛醸造工場が軒を連ねていたそうだ。

明治十二年、明治政府の『沖繩処分』で琉球王国は崩

壊した。首里には王家、上層士族、下層士族がおり、また久米、那覇、泊などにも士族がいたが、これらも消滅した。

大正十年五月に市制が施行され、首里市と那覇市が誕生。この年の那覇の人口は約六万三千、県の人口は約五十九万人である。

明の時代（一三六八～一六四四）、中国に渡った琉球人は使節・留学生を含め延べ十万人、東南アジア交易に従った人は三万二千人と推定されている。だが、一五一一年にポルトガルにマラッカを征服されて、琉球は東南アジア交易のルートを失い、一五七〇年にアユタヤに船を派遣したのが最後となった。

十八年前の晩秋、私は歴史の会の仲間十六名で、中国の廈門、福州、永定、梅県、広州など、福建省の客家の土楼巡りの旅をした。福州へ行くと、大きな琉球人の墓地があった。「昔は琉球の人たちが沢山住んでいたが、今は少ないようだ。時期になると墓参に来る」とガイドが説明してくれた。

一六〇九年、薩摩の島津氏は三千の兵と鉄砲・火薬で

琉球を侵攻。王国が整備した道路が侵攻ルートになった。

首里城は包囲され、三日後に尚寧王は降伏。城は攻略されて財物は略奪され、王は日本へ連行された。私はこれまで、沖縄の歩んできたこうした歴史を知らずにいた。

鎌倉芳太郎の残した資料を基に二〇一三年七月に発刊された与那原恵著の『首里城への坂道』を読み、大いに勉強になった。また、『鎌倉芳太郎型絵染作品集』（講談社刊）の中で岡田譲氏は次のように述べている。

「鎌倉が琉球芸術の虜となったのは、美校卒業後に沖縄高女に奉職したときである。二年後に母校の助手となつてから、伊東忠太博士の指導を得て、敬明会の補助のもとに首里の尚家所蔵品をはじめとする琉球芸術、特に染色と本格的に取り組み、旧首里王府所属の紺屋を捜し出し、型紙・染め手本を蒐めるとともに写真を徹底的に撮り、紺屋の宗家沢^{たくし}祇家において紅型の型置きから色差しの法まで実地に会得する」

装飾化した模様には沖縄の明るい自然が結集されている。

スマートフォンの進化と未来

杉浦 右藏

昨年十一月「スマートフォンの時代」という題で会員スピーチした。難しくて良く判らなかつた方、少し判つた方、総じて全体を話そうと無理をしたのが失敗で、もっとテーマを絞れば良かったと反省している。

難しい歴史の話は論外として、一般の人向けに手の平サイズとして世に現れたケータイは、一九九五年頃からである。固定電話に対して移動できる端末機だから移動体と言う呼び方をした。2G（第二世代）の末期二〇〇〇年に、日本では固定電話機の数と同じに達し、総数が逆転した。3Gに発展、通話よりも画像・音楽などのデータ送受の方が多くなり、使う目的が電話機概念を飛び越えてしまった。二〇〇七年にアップルがiPhone名でタッチ型のケータイ機を発売して、様相が一変してきた。アップル以外はGoogleを中心として連合を作り、Android名で対抗した。その後ケータイの世

界はG3・5世代からG3・9世代へと急速に進化した。近々にはG4世代に移行する。ネットワークが小川から川となり、大河に進んでいる。ケータイも機能満載の様相を呈し、パソコン・画像・音楽・カメラ・決済カード・地図・位置・ゲームなどの機能に多彩なアプリを加えてインターネット接続を利用し、「何でも有り」の状態になってきた。別な用途として、企業などのビジネス用に使えるように性能もアップできる。機種にもよるが、重装備方向化する反面、価格を引き下げたため限定性能特化の安価機種も出始めている。機能が複雑高度化すると、悪さをする輩も多数現れ、セキュリティ対策も急務となった。

技術面の革新的向上も実現されて、変調・アンテナ・回路・部品・実装・新素材・軽量・小型化などの技術が競合融合して急激に進歩している。

アップルはご承知のようにコンピュータ会社であり、またソフトの会社でもある。一九九五年にマイクロソフト社がパーソナルコンピュータ Windows95 を発売するまで、アップルのMacの方が圧倒的に使い勝手が良かつ

た。しかし、Win95が世に出て、アップルは優秀なソフトを世に出し続けながらも、Windowsにやられっぱなしであった。雌伏一〇年にして、アップルは通信機器をコンピュータ化するiPhoneで勝負に出たのである。

マイクロソフトの一機種一台一ソフトという販売戦略で、ベンチャー企業だったビル・ゲイツ社長は世界一の金持ちになった。私は一九九五年にはフィリピンにいて、使いにくいWindows3.1に手を焼いていた。Windows95の発売を見て、ノーベル賞級だと当時は喝采したが、儲け主義の縮付けに今は幻滅を感じる。

世界のケータイ通信機器が平等に迅速低廉に「つながる」ように提供されるのが通信の理想である。しかし現実には、通信設備業者側の設備負担とケータイ端末機能満載により、お金が掛かる仕組みになっている。厳密に定義をすれば、LTE(Long Term Evolution)というG4の時代は次のステップだ。G3・9はG4の機能に近いから宣伝用語としてG4(第四世代)と呼んでも良いと、ITU(国際電気通信連合)が了解したに過ぎない。G4仕様については大筋で世界が合意していても、通信業者

側の負担が大きすぎ、実現はちょっと先だ。

十年ひと昔と言われるが、通信の時代も歴史的にその流れで動いているように感じる。ケータイの製造主役は、第一世代のモトローラ、第二世代のノキア、第三・五世代以降のサムソンなどに代表されるが、そのサムソンに陰りが見えて来た。数年後にはアツと驚く次世代メーカーの製品が出てくるという強い予感がある。

近未来の用語として、ウェアラブル、IoT、3Dプリンター等が流行ってきた。ウェアラブルコンピュータ(wearable computer)とは、身につけて持ち歩くことが出来るコンピュータだ。IoT(Internet of Things)は、デバイスによって人々が様々なモノを感じし、制御できるようになる技術。3Dプリンターは、プリンターに間違いないが3D製造装置とも呼ぶべき素晴らしい人類の成果である。これ等の組み合わせにより、今までの常識からかけ離れた恐ろしい世界が出現するような気がする。また、『2052―今後40年のグローバル予測』(ヨルゲン・ランダース著、野中香方子訳)を読むと、人類滅亡は速まったのかも知れないとさえ思えてくる。

信州の菅江真澄

大月 和彦

江戸後期の旅行家・菅江真澄（一七五四～一八二九）は、天明三年（一七八三）二月に故郷三河を出て以来、信濃、越後、出羽、津軽、南部、仙台、蝦夷などを遊歴し、多くの絵図入りの旅日記を残して、秋田県角館で没した。

放浪の旅は信州から始まった。同年三月、天竜川に沿って北上、飯田、伊那、諏訪、桔梗ヶ原を経て、五月に中山道の宿場洗馬（塩尻市）に着く。和歌を通じて交遊のあった曹洞宗長興寺の住職洞月上人を訪ね、再会を喜びあった。長興寺は学問寺として栄えた古刹。山を背景にした池泉様式の庭園は、市の名勝になっている。

真澄は長興寺近くにある代官の居館跡に建てられた茅葺の釜井庵に起居し、土地の若者に和歌や古典を教える傍ら、各地を訪ね歩いた。釜井庵は最近修復され、歴史の里資料館になっている。

真澄は、洗馬の医家・熊谷家の可児永通とも親しく、生活面でも多くの援助を受けていた。昭和初年に同家から真澄自筆自装の写本（信濃の部）四冊が発見された。洗馬滞在の一年余に洞月上人や可児などの友人と信州各地の寺社や名所を巡り歩き、習俗や行事など暮らしの様子を日記や写生帖に書き残している。

同年七月、歴史に残る浅間山の大噴火を目撃する。爆音、噴煙、地揺れ、家の倒壊、人々の避難の様子などを記録している。

八月には、あこがれていた伝説と月の名所、姨捨山に遊び、月見の情景を描写している。

「山は千曲川の岸を麓にして聳え、険しく高い岩がある。東に有明の峰、冠着山……。歌に詠まれた更級川は細く流れて、八幡の村に落ちていく……」

各地からやって来た俳諧師たちは、日が傾く頃、田んぼの中の道を姨捨山に向かって登り始める。

芭蕉が「おもかげや姨ひとりなく月の友」と詠んだ長

樂寺前に墓塵を敷いて弁当を開き、月に背を向けて酌み交わしている。やがて向かいの山に月が顔を出し、あたりは昼間のように明るく照らし出される。千曲川の流れが白銀を流したようで、美しさはたえようがないほどだった。昔、姥が捨てられたのはこんな美しい山だったのか、と思いを廻らせる。

また、田毎の月とは、いつの頃だれが言い始めたのか。四十八町の田は山の中腹に段をなしているものの、名月の秋は、実った稲穂が田の水面をふさいでいるから、月が映ることなどはあり得ない、と論じている。

天明四年正月に諏訪下社の春宮へ行く。松明が焚かれ、大勢の人が集まる社殿前で、大釜に筒粥を炊いて作物の豊凶を占う行事を見た。秋宮にも参拝し、諏訪湖の水が一メートル余も盛り上がる御神渡りを観た。

七月、筑摩の湯（松本市浅間温泉）で一日湯あみをした。大勢の病人が集まる中に、一人の法師がいた。真澄の叔父の兄弟子、円通寺の国仙和尚だった。その夜、和尚を訪ねて話を聞く。国仙和尚は、信濃、越後、武蔵を

転々とした後、備前玉島円通寺第十世となった高僧。

越後出雲崎の名主の家を出奔した良寛も、国仙和尚の下で十年間修行している。真澄と同時代で同年輩だった良寛は、丁度この時期に母の法事で出雲崎に帰ったという記録があり、国仙和尚と一緒に筑摩の湯に来ていた可能性もある。真澄と良寛という脱俗生活を送った当時の自由人二人が、浅間温泉で顔を合わせていたと想像するのは楽しい。八月、真澄は北国街道を越後に向かった。

昭和五年、真澄を高く評価していた柳田国男は、真澄ゆかりの長興寺で、『真澄遊覧記信濃の部』刊行記念会として三日間、「民間伝承論大意」を講義した。

民話や方言の採集などで柳田に協力した信州の教師たちのほか、折口信夫など中央の学者も参加し、民俗学にとって記念すべき講演だったといわれている。

洗馬山のかまへの庵のあめの日の

むかし話と我もなりなむ

長興寺に建つ柳田の歌碑である。

卒業五十周年記念長崎旅行

羽田 壽夫

小生は昭和三十八年東京大学工学部機械工学科の卒業で、今年は卒業五十周年に当たる。

大学四年の夏、当時一学年六十人だった学生が二班に分かれてそれぞれの担当教授に率いられ、関東地区から信州・東海・近畿・中国・九州と周り、最後に長崎の当時の三菱造船長崎造船所に至るといふ工場見学の旅があった。この旅路の終りであった長崎を、その後様々な会社に進んだメンバー九名が、卒業後五十年たった昨秋十一月二十五日より二十八日にかけての三日間、再訪したものである。

世界遺産候補・軍艦島クルーズ

今回の旅の第一のハイライトは軍艦島クルーズであった。軍艦島とは、長崎県長崎市（旧高島町）にある端島が、三菱造船長崎造船所で当時建造中だった日本海軍の戦艦「土佐」に似ているためこう呼ばれるようになった。

軍艦島はかつて海底炭鉱によって栄え、東京以上の人口密度を有していたが、閉山とともに島民が島を離れ、現在は無人島である。平成二十一年一月には軍艦島は「九州・山口の近代化産業遺産群」の一部として、世界遺産暫定リストにも記載されることとなった。

木造や鉄骨造で建設された建物は、風雨のほか防水技術の問題や無人化によって維持管理がなされなくなったことなどから急速に劣化しており、完全に崩壊したものも多い。潮害対策として建物外部に鉄製の部品が用いられることはほとんどなかったものの、鉄筋コンクリート造の場合も、その技術が未熟な時期のものも多く、配筋計画の問題のほか、建材の入手難から海砂を混ぜていたことも劣化が進んでいる原因の一つであるとされている。過酷な台風被害の影響もあり、現状の軍艦島の破壊状況は著しく、たとえ世界遺産に選定されたとしても、どう運営して行くかは簡単な問題ではないという印象を受けた。甚だしい破壊状況に加えて、軍艦島クルーズガイドの「家族持ちでない若者はすぐけつを割って逃げ出してしまった」という話には、当時の労働環境の過酷さ

に改めて感銘を受けた。

雲仙普賢岳平成噴火

旅の第二のハイライトのその一は、雲仙普賢岳平成噴火による火砕流被害（平成二年十一月の開始より平成七年の噴火終息宣言まで）を疑似体験することの出来るドームである。島原でおきた火山災害の脅威と災害の様子を伝えるために作られた全国初の火山体験学習施設で、災害を疑似体験できる「平成大噴火シアター」や、噴火に関する記録映像を検索・閲覧できるビデオライブラリーなど、普賢岳噴火の歴史をたどることができた。

ハイライトその二は、普賢岳噴火の土石流により被災した家屋を、大型テント内に三棟、屋外に八棟の合計十一棟を当時の状況のまま保存（一棟は移築）してある、道の駅「みずなし本陣」近接の土石流被災家屋保存公園である。この公園では土石流災害で被害に遭った家屋を後世に伝えるため保存・公開している。周辺は約二・八～三mほどの土砂物で埋没したが、土砂物の流れてくるスピードが緩やかだったため家屋は倒壊せず、土砂物に埋もれた。中には屋根瓦のみ地上に残されたものもあり、

スピードが緩やかであったにもかかわらず、すさまじい爪痕を残した土石流の恐ろしさにはまさに息を飲むものがあつた。

小生は、雲仙普賢岳平成噴火による火砕流被害が生じた平成二年十一月には三菱重工神戸造船所火力部に管理職として単身赴任中であり、雲仙普賢岳平成噴火の話は聞いていたものの詳細は承知していなかったため、人間の力など自然の怒りの前には実に小さなものだと痛感させられることとなった。

長崎の料亭、スナックでの会食、二次会

長崎造船所は、小生が担当していた製品の主管事業所であつたため、今回の長崎旅行の会食会場となつた長崎の料亭「花月」や「二見」二次会会場のスナックにても、重要なお客様を案内して訪れていた日々が思い起こされた。企業OBペンクラブの諸賢に引けを取らない企業戦士であつたと自負している小生にとっては思い出多い懐かしの古戦場でもあり、今回の長崎旅行は謂わばセンチメンタルジャーニーでもあつた。

四川大地震地帯

中村 晃也

昨年の夏、中国九寨溝、黃龍の觀光ツアーの途上、四川省の北川、汶川、映秀と数年前の大地震で壊滅した町を通過した。これらの町は揚子江の支流で海拔千五百メートルを流れる岷江（みんこう）の流域にある。

ここはヒマラヤ山脈の南端にあたり、この川の山脈側は頑健な岩山だが、その反対側は破砕帯が連なり大地震が頻発する。二〇〇八年の大地震では川沿いの百箇所以上の発電所が損傷を受け、八万人以上の死者が出た。

山崩れが百メートルおきに発生して道路は寸断され、発生した土石流が川を堰き止めた。被災直後、映秀の近くの村人が徒歩で丸一日かけて最寄りの街にたどり着き、事態の報告と救援を求めて帰村したが、帰ってみると彼の村は丸ごと堰止湖の底に沈んでいたという。

道路崩壊時に居合わせた観光客は、川に沿って点在しているホテルに分宿したが、どこも満員で一週間後は食

料もなくなり、売店のカップラーメンが奪い合いの対象になった。飲料水もトイレットペーパーも払底して悲惨な観光旅行になったという。

五年経った今でも山の中腹の道は崩れっぱなしで、ワイヤーが切れたままの吊り橋、橋桁だけ残った橋が散見された。

ところが共産党政権の復興にかける努力は凄まじかった。旧道の道路はそのままにして新しい道路を建設し、壊滅した町並みを瞬く間に回復させた。山奥の街がキンキラキンの出来たばかりの街に生まれ変わり、懐古趣味の旅行者にとっては、古い昔の町並みは想像すらできなかった。町の真ん中には一際立派な建物があり、中国旗が閃く。「偉大的共産党万歳」の垂れ幕のある党の事務所だ。ただ、メイン道路の六十三号線は今でも補修のため一方通行の規制が多く、午前は上りだけ、午後は下りだけの箇所があり、我々も半日ホテルで待機せざるを得なかった。

この地方は漢民族（チャン族）とチベット族の居住区が重なっている区域で、共産党政府はチベット族に特別

に氣を遣っている。というのは、かつて毛澤東が延安に長征した際、その径路を知った蒋介石は妨害の目的で成都南の峨眉山麓の報国寺に司令部を置いた。このため共產軍は成都盆地の平地を通れず、やむなく九寨溝付近の山道を通って延安にたどり着いた。出発時二万人いた共產軍兵士は五千人に減っていた。その際、チベット族から多大の支援を受けたという。

爾來、中国共産党はこの地域のチベット族に恩義を感じて厚遇しているというが、チベットの本拠ラサにおける迫害振りはどう解釈すればいいのだろうか？

当地の復興振りに比べて日本の福島復興度は惨めな位である。民主主義国家と一党独裁国家の違いがここに出ているのかもしれない。

家の倒壊二十一万戸、学校の倒壊は四川省だけで約七千棟、生徒二万人が犠牲になった。チベット族の生徒が大部分で、多くは未確認のまま土葬に付された。

当地では、死後土に埋められるのは下人や犯罪者などで、地震の犠牲者、特に子供達が一括して土葬されたことにチベット族の人は悲しさと憤りを感じている。

チベット族では、今でも風葬（鳥葬）である。禿鷹は天の使いであり、死者の魂は天に運ばれると考えられている。食べ残した骨は砕いて裸麦と混ぜて最後まで禿鷹に食わせる。貴族の場合は、骨は泥と混ぜて仏の形にしてから山に安置する。一方、死者を川に流す水葬も行われ、魚は水菩薩として崇められる。

インドの神話に、マナガという、身体は魚に似て、顔は鰐や象に似ている想像上の水棲の聖獣がいるが、それが自然崇拜のチベット信仰と結びつき、これから水菩薩という概念が生まれたらしい。余談だが、チベット族は一生に三回しか入浴しない。生まれた時、結婚の時、そして死んだ時で、川も神聖な場所のひとつである。

この概念を空海が日本に持ち帰り、比叡山の無動寺谷の明王堂にある龍の口を持った摩喝魚（マカツギョ）がその象徴になったといわれている。後年これが形を変えて寺社の屋根瓦にある鴟尾や名古屋城の鯢鉾に結びつくというから、旅先での話は聞いてみるものだ。

私は共産党政権下の中国という国は大嫌いだが、中国の歴史とか料理は大好きである。

季節があり、時がある

新井 良侑

昨年年明け早々、その数ヶ月前から首の左下に出来たしこりがだんだん目立つようになり、家人にも気づかれたので、近くの診療所に行った。医者は大きな膨らみを触診し、「甲状腺腫瘍だね。すいぶん大きいなあ」と言いながら、近郊にある総合病院の耳鼻科で診察を受けるようにと紹介状を書いてくれた。

さっそく翌週の水曜日、一月十六日朝一番に総合病院へ行った。血液検査、レントゲン検査が終わり、主治医の診察を受けた。「これは大きいな！ いつから?」「前から首の周りに小さなしこりができたり消えたりしていましたが、三ヶ月ほど前からだんだんと大きくなりました。消えるかと思っていたのですが、こんなに大きくなつてしまいました」「そう。甲状腺腫瘍だね。これほど大きいと切除が必要だね。全身麻酔で三時間、入院一週間。もちろん、検査して悪性であれば、もつとかかるけどね。

来週、エコー検査と細胞検査しましょう」と、緊張の内にも診察はたんとと終わった。診療所での見立てと同じであった。

一月末に、CT診断まで必要な検査がすべて終わり、「甲状腺左葉腫瘍、悪性度は五段階の三」と診断された。病名がはつきりしたところで、「肺は問題がありませんか?」と、これまで一番気懸かりだったことを聞いてみた。すかさず、「大丈夫だよ」と言われたのには驚いた。

腫瘍の大きさを確認するという名目で、CT検査をしたのであるが、実は肺への転移の有無を調べるためでもあったようだ。肺に問題がないことが分かって心がうきうきし、甲状腺腫瘍だけなら良かったという気持ちになった。

「他の病院に行っても同じだと思う。手術をしますか?」という主治医の言葉に、「生活に支障がないので、このままで」と言いかけると、「それは駄目だよ！ これ以上大きくなったら食道や気管を圧迫するから、そのときには手術ができなくなるよ」と断言された。「そうですか。手術は避けられないんですね。では、お願いし

ます」

「手術は全身麻酔で三時間ほど。入院は金曜日で、翌週の月曜日に手術、土曜日の退院。手術中に腫瘍の細胞検査をして、もし癌細胞が見つければ、再発リスクを減らすために右葉も切除する」「ちよつと待つてください。右葉は正常なんですか」「正常だけでも、転移の可能性が高いので、再発リスクを減らすために切除した方がいいな」「再発リスクを下げるためだけなら、もう年ですのでリスクを負います。両方とも切除するとホルモン補充の薬を飲み続けることになるので、悪い左葉の切除だけにしていただけないでしょうか」と。「まだまだ若いじゃないですか」「もうすぐ古希ですから」「両方とも切除するのが最新の処置なんだがなあ。相談するから少し外で待つてくれ」と言われて診察室を出た。

三十分ほどして呼ばれ、診察室に入った。「ご本人の強い希望なので、相談した結果、左葉だけを切除することになりました。その代わり、検診をしっかりやりますよ」「はい、勝手を言つてすみません。右葉は切除しなくていいんですね」と念を押し、「よろしく願います」と

頭を下げた。「まあ、甲状腺癌は性質がよくて転移の危険性も少ないから。それに片方だけの方が手術のリスクもぐつと減るからね」と、最善の選択をしたような主治医の言葉に少々面食らった。

腫瘍の切除は、手術が一時間ほど延びて退院が一日遅れただけで、ほぼ予定通りに終わった。ありがたいことに退院後は薬を服用することもなく、入院前とほぼ同じ日常生活に戻れた。

手術前のインフォームド・コンセントで、手術中や手術後に起こりうる危険性を事細かに説明され、「そんなに危険ならやめてください」と言いたくなるほどであったが、幸いなことに現代医療の恩恵で気がついたらすべてが終わっていた。

術後の四時間は絶対安静であったが、いろいろな聖書の言葉が思い浮かんだ。なかでも「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。神のなさることは皆その時にかなって美しい」（伝道の書三章一節、十一節）が心に響き、平安のうちに過ごせた。

三陸を旅して

猪股 重子

「こんな遠くまで良くおいでなんした。ありがとがんと」帰りのバスの中で途中から隣に座ったおばあさんとの会話。「どこからおいでなすった」と聞かれ、「横浜から」と答えたらお礼を言われてしまった。心に残る一言でした。

夫の初任地、私にとっては第二の故郷盛岡市。結婚・育児と、十五年共に過ごした教員住宅の気のあつた仲間が集まり、お互いの近況を確かめ合う持ち回りの会です。交代で幹事を受け持ち、数十年続いている旅です。

今回は、子育てで遊んだ三陸の海辺がああ3・11の地震と津波でどう変わってしまったのか？ 知りたいと言う私の希望を入れて、浄土ヶ浜と決まりました。

ところがNHKのあの朝ドラ『あまちゃん』ブームと猛暑。落ち着いてからと延ばして十月に出かけました。

いろいろな復興イベントも九月で終わり、紅葉にも早

く、どこも空いていました。

集合の盛岡駅では懐かしい友の出迎えを受け、ホテルのバスに乗り一泊目の盛岡鶯宿温泉へ。宿の人の話では例年になく鹿や猪がホテルの傍まで出てきてウロウロと覗いているとか。やはり山にもまだ異変があるとのことです。

翌日は盛岡からバスで三時間余。宮古に着き、寂しうになった駅前を歩きました。昔のような活気はなく、「ここまで津波が来たんだよ」と印の線を説明してくれる店の人も心なしか元気がないようでした。迎えるバスで着いた浄土ヶ浜のホテルは高台にあり無事でした。

あまちゃん人気で多数の有名人が泊まったとか、写真がロビーのあちらこちらに貼って有ります。

過ぎし日の想い出や苦労話、最近の折り紙、健康の話など話は尽きず、美しい星空の露天風呂に身を沈め、楽しい一夜を過ごしました。

四十年時空の戻り銀河濃し

翌日の遊覧船は早朝と午後の一回とか、やむなく早起きして浜に行きました。歩道橋はきれいな木道になって

いましたが、海岸線は随分小さくなり、砂浜も消えていて、あちらこちらで工事の機械が動いています。

復興の崖に浜菊きらめけり

船着き場は昔のままでしたが、船上は餌を求めて海猫がすさまじい勢いで迫ってきます。ちよつと油断をしていると指までつつかれる始末。でも美しい奇岩と打ちつける白波、突堤に並んでいるかもめは昔と同じでした。

突堤の海猫ごめの 一列波高し

美しい湾を一廻りしてまだ時間もたつぷりあるので、夏には大人気のサップ舟に乗り、青の洞窟へ行こうと話が決まりました。

吉永小百合さんがJRの「大人の休日」のコマーシャルで乗った舟だよとの盛んな誘いに、イメージは大幅違うが気分だけでも甘い誘いに乗りました。

それが恐怖の世界の入り口。赤いライフジャケットにヘルメットと勇ましい身支度、海老煎の袋二つを貰い、乗り込みました。

出発するやいなや何処から湧いたかと思うほどの海猫がついてきます。美しい岩肌や浜菊の鑑賞どころではあ

りません。友達が煎餅を撒いたらますます大変。頭に乘るは（重かった）、膝には乗るはで、もうヒッチコックの『鳥』の世界です。間近で見ると七十センチはあろうかという大きさに度肝を抜かれ、あまりの恐さに隠し持っていた煎餅を投げて追い払い、自然に生きるものの力強さに驚きました。

駅に戻るタクシーの中から見る光景はやはり荒れ果て、大きな交差点の辺りは手つかずの荒れ地。以前あった立派な防波堤がかえって逃げ遅れの人命被害につながった、と運転手さんの説明。やはり百聞は一見にしかず。荒れ地にポツンと立っている売り地の札には胸が熱くなりました。

復興の地に売り地札藪枯し

所どころに建っている小さな仮設の住宅は、間もなく来る北国の寒さに耐えられるのかと心が痛みました。

再会を誓い、美しい夕焼けに送られて、楽しかった思い出の地を後にしました。

北上の橋にかかれる秋夕焼け

ステテコ世代のぼやき

松浦 武弘

企業OBペンクラブの例会に八年振りに出席したが、旧友がめっきり減り、半数以上が私には初めての方々であった。平成七年に五六歳で入会したときの運営委員のほとんどの方々が他界され、新メンバーが増えて、昨年末に選任された運営委員の諸氏は一段と若返っていた。

私は昭和三九年に伊藤忠商事(株)に入社したが、その年は東海道新幹線が開業し、東京オリンピックが開催された記念すべき年であった。官僚と銀行マンだけは嫌という(確固たる理由はなく)ことで、京大を選んだ経緯があり、就職先にも、自由な若い会社を求めた。二浪して大学に入った私であったが、若さこそが「バイタリティーの源」であると確信していた。

従って、課長職をとる年齢が四十五歳の物産や商事を避けて、三十八歳と大幅に若い伊藤忠を選択した。

私は新制高等学校の十期生(昭和三三年卒業組)で、数学の履修科目が解析一・解析二・幾何の最後だった。経験的に、この数学の履修科目の変更が考え方や常識の一大変換点となったと確信している。

男性の下着の着用も「ステテコ・猿股」から「ブリーフ・トランクス」へと変化したのが、前述の変換点と軌を一にしており、この「ステテコ・猿股」の世代が、いわゆる猛烈社員世代の尻尾である。後に、この変化を数で決定的にしたのが団塊の世代であると考えに至るが、団塊の世代以降の男性で「ステテコ・猿股」の下着を着用している者は皆無と考えている。

昭和四四年にパキスタン・イスラム共和国のカラチに赴任し、二回目はコンゴ共和国(当時はザイル)のキンシャサに昭和五七年に赴き、最後は香港で、駐在地は何れも気候的には暑い地域であった。

前述の駐在地での社宅では、出張員達もスポンを脱いでくつろぐとき、団塊の世代以降の若者達は全て「ブリーフ・トランクス」組であった。

国民学校一年生で終戦を迎えた我々「ステテコ・猿股」世代は、貧しい時代を生き抜いた欠食児童であった。

大学入試以上の倍率の京大宇治寮に入寮したが、当時は未だ米穀通帳を持参したほど物資不足だった。当時の京大は全国の国立大学の中でエンゲル係数の一番高い大学だった。昭和三五年でも、四条大宮通りの繁華街を牛車が肥桶を乗せて引つ張るなど、まだまだ貧しさを残していた。

二回生で吉田寮に移ってからの三年間は、経済的に良くなり、「もう戦後ではない」と言われた。

その後、日本国民が総中産階級と言われるようになってから、豊かになると「何でもあり」の世の中になると私は言い続けてきたが、貧しい時代には想像も出来なかったことがまかり通る時代になった。貧しい時代の考え方や常識が嫌われ否定されて、「何でもあり」の現象が起ってきている。

大学の入学式に父兄達が同伴する奇妙な現象が常態化

して久しいが、我々の入学試験・入学式には一人の父兄の姿も無かった。理由もなく人を殺す……、ストーカーの挙げ句の果てに殺人に及ぶ……、振り込め詐欺の急増……、幼児虐待……等々。

義務と責任を忘れ、要求ばかりする乞食根性を持つ国民の増加は、生活保護者やフリーターの増加となる。

児童、生徒、大学生までが全て幼稚化し、本を読まなくなり、従って考えることが出来ない若者集団が激増してきている。二十年前までは、海外のアメリカンスクールでは、数学や理科などは日本人子女がトップであったが、最近はいンドに追い越されている。

君子、重からざれば則ち威あらず。

学べば則ち固ならず。

『論語』（第一章「学而第二」の第八）

原中観音の使者

西田昭良

元旦の朝早々に、筋向いのじゅうべえどんという農家のご隠居が訪れた。

じゅうべえどんはこの村の区長を務める有力者。しかも私が仮寓しているこの家を世話してくれた恩人でもある。その珍客を疎かにはできない。

「どうしたんですか、その傷は」

ご隠居の顔には、額から鼻頭を通り、上唇まで抜けている数本のカスリ傷があった。

「いやな、いま募めえりのけえりによ、つんのめって、そばの植え込みに頭から突っ込んだでよ」

「気をつけないきゃ駄目じゃないですか」

「んだ、んだ」

ご隠居は子供のように、はにかみながら笑った。

風のない穏やかな元旦。鎮守様初詣での帰りに友人の細君が、あんたは一人暮らしだから、と持たせてくれた

お節料理が役に立った。

心配の種が一つ頭をかすめた。果してご隠居は家族に断つてここに来ているのか。それを質すと、

「あーに、いつものことだから、でえしょうぶだで」と平然としている。じゅうべえどんの嫁さんは、うちのじいちゃん、最近徘徊癖が強くなつて、とよくこぼすが、今はご隠居を信ずるしかない。

「そんでよ、しばらく観音さんにご無沙汰してて、罰が当たったんじゃないかねかって気がついたでな。ほらあそこの田んぼの真ん中にお堂が建ってんべえ」

と指をさす。何枚も敷きつめた田んぼのほぼ中央に、見るからに高齢な観音堂が孤独に座っている。

「あそこによ、霊驗あらたかな観音さんがまつつてあるでよ。だけど、あの辺は昔はただの原っぱだった」ウチワのようにゴワゴワな掌で口を拭いた。

「昔やな、田んぼを耕すのによ、牛や馬を使ったべ。」

百姓がよ、原っぱを通ると、牛や馬がよくコケてよ、足を折つたり大怪我をしたもんだ。百姓たち困った。牛や馬は、手前んとこの子供より大事だべ」

「ご隠居は遠い昔に眼差しを馳せながら続けた。

「そんな時によ、庄屋が夢の中で、裏山の観音さんを原っぱに移せ、っていうお釈迦さんからのお告げを受けてな、みんなで観音さんをお堂ごと今んとこに移しただ。そしたらな、おめえ、不思議なことによ、牛も馬も急にコケなくなつてな。俺たち喜んだで。安心してその道を通れるようになっただ」

「ご隠居はあたかもつい最近の出来事であつたかのようによ、目を細めながら語つた。

「そんだけじゃねえ。その道を通る牛や馬がな、よく孕むようになってな。いい子種ができて、百姓たちや大喜びだで。んで、人間様もそれにあやかんべえと、若けえもんや嫁つこたちが昔やよくおめえりしてたもんだ」

「ご隠居の舌は少しもつれてきたが、更に続けた。

「今じゃ村人が少なくなつてよ、若けえもんなんか、みんな東京さ行つちまつて、おめえりするもんなんか誰もいやしねえ」

「淋しくなつたもんですね」

「んだ、んだ。ま、そんなあんべえで、あの観音さんに、

おらもしばらくご無沙汰しててよ。だから正月早々コケて、このさまだ」

「ご隠居はまた少年のように恥ずかしげに笑つた。

「だけんど、いま観音さんに、よくおめえりしてきたから、今年やもうでえじようぶだで。おめえさんもそろそろ歳のようなだから、道でコケねえように、観音さんにおめえりしてきたほうがいいがな」

「こう言いながら、ご隠居はゆつくりと腰を上げた。

「お宅までお送りしましょう」

「あーに、目と鼻の先だ。でえじようぶだで」

「ご隠居は言うが早い、トコトコと歩き出した。

「純朴で、全く飾り気のないご隠居。戦前から戦後にかけて、貧しい時代を生きてきた農民の、逞しくはあるが、どこか物侘しい背中が、そこにあった。

「ご隠居の姿がじゅうべえどんの門に消えるのを確かめると、私の足はいつの間にか、反対方向の原中観音へと向かつていた。

小さな手が小さな歴史を作った

木村 敏美

以前NHKで「その時歴史は動いた」という番組があったが、歴史上の人物や事件でなくても、人の一生には各々歴史的な出来事が誰にでもあると思う。私の中にある、忘れ難く何とも微笑ましい出来事を紹介したい。

それは私が小学校一年生から二年生に進級する時のことで、今から六十年以上も前の出来事である。

私がつっていた小学校は大変な山奥にあり、全校生徒百三十名程度で、終戦の年生まれ私のクラスは十七名、一クラスである。一年生の時の担任の先生は女性で、とても優しく若く美しく、淡いピンクの口紅が色白の肌をより引き立たせ、山奥で戦後の貧しい生活の中で育っていた私達は、その姿を見るだけでも嬉しかった。

課外授業等なかった時代だが、ある春の晴れた日に、先生は突然算数の授業だと言って皆をれんげ畑に連れて

行かれた。れんげの花で数の勉強を教えられる予定の样だったが、皆勉強の事などすっかり忘れて花束や首飾りを作り、先生を囲んで駆け回った。ピンクの絨毯の様にびっしり咲いたれんげの花、済みきった青空、暖かい春の陽ざし。カラー写真等なかったけれど、皆の記憶の中に美しく鮮明に残っている。予想もしなかった楽しい一日は生涯忘れられない日となり、いつも同窓会での話題はれんげ畑で始まりれんげ畑で終わる。ただし、後で先生は校長先生から大目玉をくらい、畑の持ち主からは、れんげは肥料だから大切にする様注意を受けられたそうだ。

また、入学後どうしても学校に馴染めない女の子がいて、五年生の姉の手を一時も離さない。無理に離そうとすると泣き叫ぶ。結局、暫くその子の隣で姉も一年生の授業を受けていた。小さな一年生の隣に大きな姉が並んで座っている姿は、今思い出しても微笑ましい。

こうした事もあり、わがクラス全員が熱烈な先生の大ファンだった。しかし、二年生に進級する少し前に、担

任が男の先生に替わることがわかり、クラスは蜂の巣を突いた様な騒ぎとなった。だが皆、どうしていいかわからない。せめてもう一年担任して欲しいと切実に願いがら、ついに新しい男の先生を迎える日が来た。

小さな歴史が動いたのは、正にその時である。

先生が教室の入口の戸を開けて入ろうとされるその時、クラス全員が一齐に入口に集まり、小さな手で戸が開かない様にしたのだ！ 誰が誘った訳でもなく、どんな事があっても先生を教室に入れてはいけないと、気がついたら皆で必死に戸口を押さえていた。十七名の小さな手の思いは完全に一つになり、戸は開くことはなかった。ガラス越しに男の先生の驚き困惑しきった様な顔が見えた。

どれ位の時間がたったのだろうか、暫くして先生は引き返された。この無鉄砲な幼い子供たちの行動は、良し悪しは別として、ほんとに一途で心は一つになっていた。この一途な気持ちが伝わったのか、二年生も元の女の先生に受け持ってもらった事になった。昭和二十八年の春、

小さな村の小さな子供達が作った小さな歴史である。

「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川」の歌の通り、山や川は今も少しも変わっていない。しかし、その剣持小学校は平成九年に廃校となり、同窓会が行われていた講堂も平成二十五年には取り壊される事が決まった。村人も随分少なくなり、過疎となっている。唯、この地から出られた歴史小説家安部龍太郎氏が直木賞を受賞された事もあり、この地の歴史的な事実が色々明らかになってきた。

この地は南北朝時代の後醍醐天皇の孫の良成親王を最後まで守った武将達の居た地で、六百数十年間変わらずその子孫が残っているのは全国的にも珍しいとの事である。廃校になった小学校のすぐ側に、良成親王を守った側近中の側近、橋本右京貞原という武将の墓が今も村人により大切に守られている。

わずか十七名の子供達が動かした小さな歴史を、この武将は微笑みながら応援してくれたのかかもしれない。

指定席

池田 隆

つい先ほどの事はすぐに忘れてしまいましたが、幼い頃の記憶は今でも鮮明に蘇ります。大正五年の春先のこと、この屋敷の若いご主人さまが長女誕生の記念にと、柿の若木である私を広い前庭の正面に植えられました。

そのとき私が最初に見ました周囲の光景はとても印象深く、今でも脳裏に焼き付いております。濃紺の空を背にした白銀の山並み、葉を落とし柔らかな日差しを受ける雑木林、杏の花で一面を淡紅色に装う山里などなど。

その山里を見下ろす小高い斜面にお屋敷はございます。厚みが三尺を越す茅葺き屋根を太い柱と梁が支え、つやつやと磨かれた濡縁が縁取っております。

それより九十五年、私は背と手足を少しづつ伸ばし続け、今では三十尺をこす老大木ですが、この庭の定位置から一步も離れることなく静かに周りの出来事を見てまいりました。

私が初めていくつかの赤い実をつけたとき、お嬢さまはたいへん喜ばれ、幼い手でクレヨンをつかみ、画用紙に私の実をていねいに写生されました。

そのお嬢さまも二十歳になられると、綿帽子と白い打掛をまとい、大きく広げた私の手の下を通り、振り返り振り返り東京の方へとお嫁に行かれました。

今のご当主は私を植えて下さったご主人さまの三代目に当ります。この方が結婚なさる時に母屋の脇に新しい洋風の新居を建てられ、そのまま其処で生活をなさっておられます。母屋の広い土間やいくつも連なる座敷が現代の忙しい方々には不向きなのでございましょう。

今では母屋のご当主は飼ひ猫のトラちゃんでございます。夜と食事のときは新居の方へ戻りますが、昼間はいつもこの濡縁を指定席としております。冬は日溜りで暖かく、夏は風通しの良い場所でございます。きっと板木の肌触りも良いのでございましょう、いつもその上で心地よさそうに太平楽な格好で寝ています。

話は変わりますが、すでに九十五歳になられたお嬢さま、いやお祖母さまとお呼びすべきでしょうか、その孫

娘にあたる画家の方がときどき訪ねて来られては、あたかもお祖母さまに接するように私を労わって下さいます。今ではそれが私の唯一の楽しみとなっております。

先日もスケッチブックを抱えて私のそばへ来られ、二人で無言の語らいをしておりました。その時もトラちゃんとは自分の指定席でわれ関せずいつものように寝ていましたが、近くの熊笹で鳥の動く物音がすると急に頭を上げ、耳とひげを鋭く伸ばし、音のした方をきつと凝視しました。その一瞬の動きには驚きましたが、流石でございます、孫娘さまはその瞬間のトラちゃんの表情、とくに目の様子を見事に描いておられました。

私のような植物は生きている限りつねに自分の指定席が定まっています。その点での不安は一切ございません。人間さまを含め、動物の方々はお気の毒でございます。濡縁のトラちゃんのように、良い場所や地位を占めれば占めるほど、其処を追われるのではないかと言う潜在意識が強くなるのでございましょうね。

私などは日当たりが良く見晴らしも最高な場所を九十五年前に頂戴し、そのまま毎年春には淡緑の若葉姿

を、秋には真っ赤な実をつけた立姿を皆さまに眺めていただき、また烏も含め大勢の方々に私の作った実を賞味していただいております。

ただ一昨日でしたか、ご当主が庭に立たれ、母屋を見上げながら「茅を葺いてくれる職人も居なくなつた。この家も取り壊さなければならぬかなあ」と呟いておられました。トラちゃんの不安もまったく的外れではないのかも知れません。いや、その時は広く整地するために、私もいっしょに切り倒されてしまう事でしよう。

そう言えばこれも昔の事です、「植物といえども生あるもの全てに指定席などはない」と、立ち寄られた高野聖の方が濡縁でご主人さまと話しておられました。まだ若木であつた私には諸行無常の話などピンとは来ませんでした、ここまで生き長え、周りの移り変わりも見てまいりますと、実感としてよく分る気がいたします。たとえ明日に切り倒されようとも、今は恐くもありません。それも一つの定めかと思ひます。十分に生を楽しませていただきました。その時には万物に深く感謝いたして、従容としてこの世を去りたいと存じます。

おシス先生

濱田 優ゆたか

昭和三十年代前半、大学に入って二、三年の間、私は先生の家に入り浸った。

先生は中学の英語教師で、女生徒たちがシスターボーイを縮めて「おシス」と付けたあだ名がびつたりの、細身で色白の文学青年だった。独身の独り暮らしをしていて、男兄弟のいない私には師というより兄分に思われた。

家庭に白黒テレビなど家電が普及しはじめた頃だが、先生の家にはその類のものはなく、殺風景な部屋に自慢のハイファイセットがまるで祭壇のように鎮座していた。先生はモーツァルトの室内楽が好きで、私にもよく聴かせてくれた。だが、当時の私の好みはポップスやジャズ。静かなクラシックの室内楽は苦手だった。演奏の最中に臉が重くなつては必死に目を開けたことを思い出す。

話は前後するが、私が先生の家に出入りしたのは、ハイファイ装置が目当てではない。家庭教師のアルバイト

先を紹介してもらったためであった。中学にはクラス担任もいたけれど堅苦しく、おシス先生の方が頼み易い。

最初の生徒は、中二の女生徒三人組だった。その頃はまだ庶民が家庭教師を付けることは一般的ではなく、グループにしたのは先生が親の負担を考えてことだろう。だがそれは、家庭教師が初体験の私にとつてもありがたい配慮だった。妹のいない私には、難しい年頃の女生徒への接し方が分らず、個人レッスンでは気詰まりだ。

彼女たちには悪いが、このグループレッスンは私にとつて練習台。先生はその様子を見守っていたようだ。このレッスンを無事に終えると、すぐ先生は次の生徒を紹介してくれた。

今度は先生の秘蔵っ子のA子を半年余りの指導で都立の名門高校に合格させよ、という難しいミッションだ。彼女は頭がいいけれど気分屋で好きな教科しか勉強しない、という。

「そんな難しい役目は務まりません」と断つても、「君の思いどおりにやればいい」といい、いつになく強引だ。結局、一ヶ月間テスト的にやってみることになった。

彼女は現職の保守系代議士の娘と後から聞いて、ますます気が重くなったけれど、テスト期間だけはやろうと自分を納得させて、週二回、夕方五時から一時間半ほど教えることにした。食事付きでさすがに月謝は悪くない。

A子はお嬢様タイプでも庶民的な娘でもなく、そんな枠組みを超えた自然児で、あっけらかんとしている。見掛けは年相応なのに、低いだみ声で喋る会話を聞くと、大人か子供か分からなくなる不思議な娘だった。

最初はA子を観察して「傾向と対策」を考えようと思ったけれど、そんなことは全て放棄し、無手勝流でやることにした。先生に相談しても、「彼女は僕の理解を越えて振り回されている」と打ち明けるのだから仕方ない。

上手く説明できないところや自分の理解があやふやなところは率直に伝えて、次回まで時間をもらう。不得手な英語の発音などは先に回答を見せて一緒に憶えた。

結果的にはこのやり方がA子には適して、効を奏した。一ヶ月のテスト期間はあっという間に過ぎ、その後も彼女の「不思議ちゃん」振りは変わらなかったけれど、A子を教えるのに困ったりした覚えはない。最後まで家庭

教師を務め、彼女を志望校に入学させることができた。

先生がその結果を喜んでくれたのはいうまでもない。銀座の三笠会館でフレンチをご馳走してくれた。

私の株は騰がり、続いて先生の教え子だった女子高生を紹介してくれた。ただ、先生に評価されたのは、教師としての実力ではなく、難しい女生徒の扱い方のようなのだ。

こんなに先生とは濃い関係だったのに、大学の専門課程に進み、就職して工場勤務で東京を離れると、自然と疎遠になってしまった。

年を経て中学卒業五十周年の同期会を計画したとき、担任から先生の連絡先を聴いて電話をした。先生はお元気そうで、今は悠々自適の生活と語られる。同期会での再会を楽しみにしていたところ、その寸前に体調を崩されてお目に掛かれなかった。そして二年後、喪中はがきが奥様から届いた。

先生に不義理をしたままで心残りだ。ただ、怠慢の言い訳ではないが、先生の老境を知らない私の心の中には、音楽を愛し文学に夢を託した永遠の青年「おシス先生」の姿が、今も鮮やかなまま生き続けている。

古都山尽くし

新田 由紀子

京都の街をぐるりと山が囲んでいる。低く連なる山々は駅前タワーやビルの屋上から眺めれば、手の届く近さだ。千二百年の営みを刻んできた町がどんなに時代の新しい衣装をまとっても、山の姿は変わらない。

古都の観光といえば、社寺拝観と庭めぐり、街歩きに京料理だが、目を転じて山歩きはどうだろう。市や鉄道各社、山岳連盟などが整備している「京都一周トレイル」というハイキングコースがある。五つのルートに分かれたガイドマップで、ポイント番号を現地の道標と突き合わせながら歩くしくみだ。写真や等高線が入って高低差もよくわかる。このマップを活用して山を歩いてみた。

頂に登るためだけではない山道は、昔の人々の足跡を色濃く残している。巡礼や行商人が越える、落人が逃れる、戦国武士が駆ける、回峰行者が走る、炭焼きが通う、花嫁行列が進む、参詣人が行き交う。さびれた名所・旧

跡、埋もれた故事来歴。辿り歩く山道は格別の趣だ。

五山送り火で知られる如意ヶ岳の支峰大文字山（四六五m）へは、銀閣寺裏の幅広い山道を登る。三分ほどで大文字焼き火床。盆地の底を覗きこむような見晴らしが広がる。哲学の道、黒谷、吉田山、下賀茂神社糺の森。ひとすじになって下る鴨川。嵐山から松尾の低い山並も望める。火床からひと登りで大文字山頂へ。緑濃い山科の家並を見下ろしながら、南禅寺裏手へ下る。朽ちはてた祠、ひっそり鎮まる社、いわくありげな辻。時代劇の旅人にでもなった気分だ。東山ルートはさらに蹴上のインクラインを経て、粟田口から円山公園の裏山へ登り、東山から稲荷山へと森の中を続く。

皇都の北東（鬼門）を鎮護する比叡山に登る。中腹の延暦寺までは滋賀坂本からケーブルカーで一足飛び。杉林の斜面を一時間程歩くと双耳峰の一つ大比叡（八四八m）だ。もう一つの耳、四明岳（八三八m）は観光施設の中にあつて入れない。眺めれば左に琵琶湖、右に京都市街、後ろには比良の山並み、絶景かな。遊歩道は京都側からのケーブルやロープウェイの駅を過ぎると山道と

なつて、大原や八瀬、修学院へ下っている。「雲母（きらら）坂」は、山上の寺と京の町を結ぶ最短ルートだ。

修行の僧が足繁く通ったか、焼き打ちの戦国兵が駆けあがったか、坂道は踏まれに踏まれて深くえぐれ、歩きにくい。大比叡から修学院の音羽川まで約二時間半を下る。

比叡山から西へ一直線、頂上にお椀を伏せたような山がある。保津川と清滝川を山裾に巡らせた愛宕山（九二四m）だ。火伏せの霊験あらたかな愛宕（阿多古）神社を山頂に祀っている。都の西北、嵐山嵯峨からトンネルを抜けて清滝川を渡ると、二の鳥居から表参道が始まる。薄暗い杉山を約二時間、標高差八百メートルをひたすら登る。茶屋跡や「ハナ売り場」跡、かわらけ投げの谷など、物見遊山の参詣客で賑わった時代がそこかしこに。戦前まではケーブルカーも通っていたというから驚く。黒門（八四〇m）をくぐると石灯籠や寄進札が立ち並ぶ境内だ。風雪にさらされ神さびた社殿で『火廻要慎』のお札をもらい、本格的な山道を月輪寺経由で空也滝へ下山する。

市街地図を広げると、碁盤の目の中に三つの小山が目につく。吉田山（二二二m）、船岡山（一一二m）、双ヶ岡

（二一九m）だ。商店街や住宅街のすぐ裏でこんもりと緑を抱えている。吉田山と船岡山が市民の憩いの場となっているのに比べて、双ヶ岡は様子が違う。頭上を覆う樹林の中に心細い踏み跡があるばかりだ。三つの丘が南北に並び、北の一ノ丘は御室仁和寺を正面に望む。桓武遷都以前の古代豪族を何代も葬ってきた埋葬の地とか。ひとけがない葉擦れの森の中にはカラスの黒い影がよぎる。背筋がゾクツときて、早々に藪をかきわけて降りた。

市街の南西大山崎に淀川を挟んで天王山（二七〇m）と男山（二四三m）が、門柱のように向かい合う。宇治川、木津川、桂川はその手前で合流して淀川となる。門の間を通るのは川だけではない。東海道新幹線、在来本線、阪急線、京阪線が寄り集まって、都の裏鬼門をすり抜ける。石清水八幡宮は男山山頂に鎮座して一一五〇年、今は足元までせまる市街とせわしく行き交う車両を見下ろす。参道の途中に神社の由来となった石清水が湧き出している。『年寄るまで石清水を拝まざりければ』てくてく出かけた仁和寺の老法師は、山上の神社には行きつかずとも、清水を掬ってのどを潤したことだろう。

春の奈良

水原 亜矢子

四十年前のことだが、私は俳句に行きづまりを感じていた。叔父の水原秋桜子は、私の持つていく俳句ノートを丁寧に見て添削してくれた。とても嬉しくはあったが、自分の力不足や不甲斐なさをいやというほど感じる日々でもあった。

自分の周りの自然描写といっても、井の頭公園の鴨だの鯉だの……、彼らは彼らで美しく可愛いのだが、俳句となって表現されると月並みになってしまうのだ。やはり私の美に対するリスペクトが足りないのか、それとも理解力が足りないのか……鬱々とする毎日であった。

それを見かねたのか、叔父は「奈良へ行ってみると良い。あそこには美の原点があるからね。私は和辻さんの『古寺巡礼』に憧れて、奈良を歩き回っては俳句を詠んだものだよ。これを持っていきなさい」と、和辻哲郎の『古寺巡礼』と自らの句集をくれた。

句集には東大寺、法華寺、聖林寺と、たくさんのお寺と仏像が詠まれ、句の中でその歴史と美が燦然と光り輝いていたのだった。私はその圧倒される文学に驚き、さっそく奈良へ俳句を詠みに出かけた。

奈良の桜井のはずれの小高い丘にある聖林寺。その十一面観音菩薩を、秋桜子は

木の実ふり鶯鳴き天平観音

と詠んでいる。また、法華寺の十一面観音菩薩を

拝みしをまぼろしかとも秋の暮

と詠み、三月堂の日光菩薩を

日光佛春あけほの香を炊けり

と、その美しさをあまねく句に詠みきっている。当時の私はただただその句に圧倒されっぱなしであった。

奈良は美の宝庫である。寺や仏像だけでなく、ちょっとした横道にさえ趣がある。そして菩薩がいっぱい……。四十年経った今、私が詠んだ句は

百体の菩薩の吐息奈良の春

やはり、叔父の域までたどり着くのは容易ではない。

好きなもの

内藤 真理子

好きなもの 冬の早朝の空気
起きぬけに着がえを済ませ 窓を全て開け放ち布団を上
げる

部屋中の濃厚な空気が外に流れ かわりに寒冷の研ぎ澄
まされた空気が部屋に満ちる
一瞬にして氷のように冷えた畳は素足を突き刺し 皮膚
を緊張させ、精神を清明にする

新聞をとりに北側の勝手口から一歩外に出ると無色透明
無臭の冷気が押し寄せ私にまとわる
生まれ出たばかりの空気を全身で感じ深く吸い込むと私
は浄化された気になる
そして一日の始まりを実感する



日本人にとっての色彩私見

下山 健夫

私は長い間、古い優れた仏像、美術品、建築物は無彩色で暗いものが当たり前だとのイメージをもっていた。

よく奈良を訪れ、特に東大寺戒壇院の四天王像を必ず他の参観者がいない朝一番に入り、一体一体ゆっくり拝観することになっている。この塑像も元の彩色は殆ど剥落して白い地肌で、奈良にある他の仏像も当初の表面の色がおちて素材の色の物が多く、建物も当初の彩色が無くなり、古い木肌が大半で墨絵の様である。そのため日光の東照宮の煌びやか色の建物は中々なじめなかった。

近年、薬師寺の復興伽藍や平城京の復元で、華やかだった情景が再現され、青丹よしを少しずつ思い描くことが出来るようになり、私の中で考えが変わってきた。

昨年末に高校の恩師から久しぶりに源氏物語の話を伺った時、この絵巻も色が剥落して細部が判らず、国宝

の指定は、ただ古いだけが理由ではとの意見も友人達にはあった。嘗ての仏像展でも、仏像の国宝と重文の間にはフォルムの洗練に明らかに優劣差があるように思えた。残念ながら日本の顔料は天然由来のものが多く、色の剥落や変褪色がつきもので、細密な表現も時を経て判らなくなるケースが多い。

西欧のフレスコ画や油絵のように、修復作業で表面を拭いて当初の色を見ることが出来るのとは状況が異なる。この点を日本の修復作業に携わる方に尋ねたことがあり、日本の修復目標は暗黙の了解で現状を保持することが原則で色彩を戻さないことを知った。源氏物語絵巻も復元画は作られており、並列展示では復元画が本当に鮮やかで綺麗だという印象を受けたのを思い出す。

近年は所謂CG技法で比較的簡単に当初の色を知る機会が多くなってきたが、今後は色彩をまだ多く残している江戸時代のものも積極的に参拝し、非常に華やかな当初（多分）の状況を自分の頭の中で再構築するという、古社寺巡りの楽しみ方が一つ増えると思っている。

創作短編



あげまん

馬場 真寿美

母に連れられて墓参りに行ったときのことだ。おぼろげな記憶の中で、白いスキの穂が風に揺れていたことだけが思い出される。

その寺の住職は八卦見ができ、それがまた実に良く当たるといふ評判だった。その日何を思ったのか、墓参りを済ませると、母は私の手を引いて住職のもとを訪れた。母の袖の陰から顔を覗かせる私と目が合うと、住職は、驚きの表情を浮かべながらこう告げたそうである。

「この人は、並外れた強い運勢をお持ちのようです。将来、この人を取り巻く周辺には必ず富と栄光がついて回るでしょう」と。

——私は本当に運が強い。

これまでの人生を振り返ってみて、杉村孝子をつくづくそう思う。東京で毎年催される高校の同窓会には、今

年もまた顔を出すつもりである。同窓会に出席する人は、自分のこれまでの人生に、ある程度満足している人間だという。そういった意味では、孝子も間違いなくその一人だと言えた。高校時代の孝子を知っている人間で、誰が今の孝子を想像することができただろう。

幼い頃の孝子は、小さな平屋造りの家作に親子六人で住んでいて、クラスの中でもひと際貧しい暮らしぶりだった。器量も悪く、貧弱な丸みのない身体にエラの張った四角い顔が乗っているといった具合である。どちらかと言えば可愛らしい顔立ちをしている姉や妹と何かと比べられて、辛い幼少期を送った。そんな孝子に嫁の貰い手があるか、両親は本気で心配していたようである。

孝子が、兄の友人で小学校の教師をしていた杉村圭吾に望まれて結婚したのは二十三歳のときである。夫である杉村は、背も低く風采の上がらない男ではあったけれども、ともかく売れ残らなかつただけでも、孝子は秘かに感謝した。

教師である夫の運んでくる給料は決して多くはなかつたが、孝子は不満を持つこともなく懸命に働いた。やが

て二人の男の子に恵まれると、孝子は家事をこなす傍らで、夫の教え子を集めて塾を始めることを思いついた。

当時は今のように塾だの予備校などがなかった時代である。この試みは大いに当たって、放っておいても生徒は集まり、杉村夫妻のもとには面白いようにお金が集まり込むようになった。夫の圭吾は教師をやめて、杉村学院という塾を立ち上げると、稼いだ金で横浜の山の手に大きな屋敷を構えた。二人の息子たちもまずまずの大学に進学させることができたし、このまま順調に進めば卒業後は一流と言われる企業に入社することも可能だろう。人生、順風満帆である。

ただ、そんな中で、孝子にとって唯一気がかりなことがあった。次男の康介である。いたって破天荒で、母親の孝子ですら、彼が何を考えているのかさっぱり掴めない。やっと入った大学でも何をするでもなく、毎日ふらふらと暮らしている。しかもある日、まだ学生の分際で、結婚したいと言い出した。孝子としてみれば、就職した晩には二人の息子たちに然るべき家柄の娘を嫁に迎えないと計画していた。なのに、康介が連れてきた幸恵とい

う娘は、どこの馬の骨かと思われる田舎娘である。頭に血が昇ったが、康介は反対するなら家を出て行くと言って譲らない。せめて大学を卒業するまで待つよう説得するのがせいぜいである。全く親の心子知らずとはこのことだと、孝子は深いため息をついた。ひと足先に卒業して就職した長男の京介は、素直に親の勧める娘と所帯を持っていく。卒業する頃には、康介だってきつとあの娘と別れているだろう、孝子は秘かにそう祈っていた。

しかし、康介は大学在学中にIT企業を仲間と立ち上げると、三億からの年商を叩き出すようになり、卒業した後は約束通り幸恵とさっさと結婚してしまった。今や長男の京介とは比べものにならないくらい羽振りの良さである。テレビに顔を出すこともある。母親である孝子は、やっぱり私は運が強いと内心鼻が高かった。

しかしである。そうなるに孝子には康介の嫁が何の取り柄もない幸恵であることが癪に触って仕方がなくなってきた。苦勞して育ててきた息子なのに、そこにぴよんと玉の輿に乗って幸せそうなのが面白くない。杉村家の嫁として大いに不満が残る。孝子は姑根性ながら、何

かにつけて幸恵を目の敵にするようになった。康介の耳にも、機会を窺っては幸恵の欠点をあげつらい、吹き込むようにする。そうなると、恋愛時代とは違い、しかも時代の寵児ともて囃されてすっかり天狗になっていた康介は、次第に母親の言葉に耳を傾けるようになり、自分は早まってつまらない女を妻にしたものだ、と思うようになっていった。母親の力というものは恐ろしいものである。康介夫婦は瞬く間に不仲となって、あっさり離婚することになった。

（やれやれ、今度こそ康介にふさわしい嫁を探さなくては……）孝子はまたもや自分の運の強さを再確認していた。

ある朝、孝子は独りテレビの前に座って怪しい朝食を取っていた。画面からは、終わったばかりの都知事選の実況がにぎやかに伝えられている。

あれから二十年、バブルが弾け、少子化が始まると、塾産業は厳しい局面にさらされた。たまたま時勢に乗っただけで何の自衛策も取っていなかった杉村学院は、た

ちまち倒産へと追い込まれ、孝子の夫、圭吾は、そんな失意の中で帰らぬ人となっていた。後に残り残された孝子は、山の手の家も手放して、今は一人でアパート住まいをしている。長男夫婦はめったに顔も見せない。良家の娘とは冷たいものだと思いい知った。次男の康介の事業も、続いてITバブルが弾けると、たちまち危機に陥り、辛うじて倒産は免れたものの、もはや以前の勢いはない。私の一生は何だったんだろうとぼんやり考えていた孝子は、ふと目をやったブラウン管の中に見慣れた顔を見つけて釘づけとなった。

——この声、この顔には見覚えがある！

画面を食い入るように眺めると、それは以前の康介の嫁、幸恵に間違いない。フラッシュが盛んにたかれる中、見違えるように立派になった幸恵が、満面の笑みで挨拶をしていた。

「主人が都知事に当選できましたのも、一重に皆さまのご支援のお蔭だと、心から感謝しております。これからも全力で夫を支えていく所存でございますので、どうぞよろしくお願い致します」

男と女の人間模様・アメリカ物語

福本 多佳子

カリフォルニアの広大な緑地に点在するアパート群。そこに住む春子と秋子が見た隣人達の人間模様と文化比較。

『A棟二〇一号室』 同じ会社に通める男女が双方とも離

婚しないまま同棲中。別居中の女性の夫も同じ会社で働いている。そうしたある日、彼女が妊娠。近く出産だが離婚手続きはしていない。隣人の日本女性春子が、

「あの人たち、離婚せずに子供を産んだらどういうことになるわけ？ 日本だったら旦那の子供という形になってしまうのかしら……」

とつぶやくと、横にいたアメリカ人の夫が呆れ顔で、「何を馬鹿なこと言っているんだ。病院で出産時に子供の父親の名前は？と訊かれたら、同棲相手の名前を言うだけのことじゃないか」

戸籍が無いということは、そういうものか……ふーん。

『B棟三五一号室』 タンゲルウッドからさほど遠くない

小さな町の教会で秋子のボーイフレンドの娘の結婚式（新婦は初婚、新郎は三度目）と、それに続く披露宴が新郎の母親所有の広大な別荘で執り行なわれた。イギリス生まれの新婦の母親と現夫、妹、それに家族の友人達の一群がイギリスから飛んで来た。全米各地からも新郎の両親、それに祖父母たちまでもが、それぞれの再婚相手を伴い集合した。

「あなた方はどちらの関係？」とある女性が聞く。

「彼は新婦の父親、私は彼のガールフレンド。貴女は？」

「私は新郎の弟の前のワイフよ。彼は私を結婚パートナーとしては除外出来たけど、ファミリーの集まりからは除外できなかったの」と朗らかに笑った。

でも秋子にとって一番やれやれと思った会話は……

新婦の父親（秋子の彼氏）が別れた奥さん（花嫁の母）の現在のご主人に向かって放った質問である。

「僕が君のワイフと結婚していた頃には、君は一体誰と結婚していたんだっけ？」

「あの頃の僕のワイフはキャシーだよ」

「あー、そうか。思い出した。君はキャシーと一緒にだった。ブロンドで背の高い……」

横で聞いていたら（何という会話だ）って誰しも思いますよね？

新郎の父親は楽器演奏に優れた詩人で、ガールフレンドと出席していた。ところが、同棲相手と出席していた新婦の異母姉と話が盛り上がり、彼女に「二人でどこかへ行こう。僕はガールフレンドを置いていく。君はボーイフレンドを置いていけ」と迫っていた。

そうそう、日本では「正式な家族行事にパートナーが出席するのは、籍をいれてからよ」と母に言われていた。

『C棟二〇七号室』 最近、広いバルコニー付きの三ベッドルーム・アパートメントで催されるホームパーティーに春子が頻繁に招待されるようになった。なぜなら昨年、家主の女性が再婚して、新パートナーを得たからである。彼女は三回目の結婚で、孫も二人いる。

式の前には「結婚式はあの教会でしょ。沢山の白いバラで飾って、ドレスはレースで、指輪はあの宝飾店で特

別にデザインしてもらって——」と、夢見心地だった。

（再婚だから……とか、年齢が……だから）なんて発想はあり得ない。新しい門出はあくまでも美しく、ロマンチックに決めた式だった。

これって素敵な事ですよね？

結婚後は、ご主人の二十代の息子達、それに韓国からの養子二人と一緒にのお兄さん夫婦がいつも参加している和気あいあいとしたパーティーとなっている。

感謝祭の食事に招待されると、隣の席に妖艶な中年女性が——。春子夫婦が会話を始めてみると、昨年ご主人が離婚したばかりの前妻だった。

「彼に誰がいるなんて、全く気がつかなかった……」

それを気にした彼が、前妻に年金の殆どが渡るように手配した途端、彼女は高校のクラス会で再会した男性と電撃結婚。寛大さを見せた夫婦も今は怒っている。

『D棟三三五号室』 ここに住む離婚女性が「娘が二人目を産もうかと考えていて、どの程度手伝ってもらえるかと訊かれているの」と言った。お嬢さんが未婚で子供を

産んだことを知っていた秋子は「二人目を産むと考えている……」ということは、ボーイフレンドと結婚する気になったわけ？」と尋ねた。

「娘にボーイフレンドはいないわ。彼女には北欧から精子を手配してくれる良い代理店がついているのよ」

余りにもあっけらかんと話す彼女にカルチャーショックを感じた秋子は、（日本だったらこういう事って他人に言わないよね）と思ったのです。

この町には高収入のキャリアレディーが多く、高齢出産が多いため、外から見ただけではわからない専門のクリニックが多いようだ。二年後、彼女の娘は二人の子供を連れて、仕事仲間の男性と結婚。華やかな結婚写真には、着飾ったブロンド・青い目の子供達と、笑顔あふれるインド人技術者と新婦の姿。妊娠年齢を考えると、先に子供をとという選択は正解ではある。

『E棟三〇二号室』 駐在員として長くアメリカに暮らし、引退後にこのアパートの一番大きな部屋を購入した日本人夫婦が越してきた。彼らの子供達二人はアメリカ

生まれ。夫人はやさしい大和撫子。旦那の姉も同居中。彼女たちは昔と変わっていない。でも、アメリカの状況を柔軟に受けとめている。娘や息子も再婚で、娘の前の結婚の子供、現旦那との子供、それに旦那の前の結婚の子供達がそろって週末にやって来る。息子にしても同様である。週末は常に八名ほどの孫達の食事作りで大忙し。「分け隔てするわけにはいかないうから大変」とやさしい笑顔。——郷に入っては郷に従え——

『F棟二一五号室』 このアパートの日本人妻が中年のハンサムアメリカ男性と浮気中。斜め前のD棟の部屋に住む秋子は時折、その女性が彼の部屋にいるのを見てしまう。そんなある日、日本人妻が妊娠した。

秋子は「大丈夫なのかしら。彼女、平気な顔をしているけど——旦那の子供だという確証があるのかしら？」

「アメリカのインテリ男性って、パイプカットしている人が多いから、きっと彼もそうなんじゃない？」と春子。

「え、そうなの。それだ！ 彼女が平然としているのは」

——あるアパートの住人たちの生態観察でした——

「反」沢直樹の倍返し

大西 宏

●干されそう

コンサルタントのAが、あるメーカー系商社の営業部長を勤めるBから相談を受けた。その内容は次のようなものであった。

「自分の会社には、入れ替わり立ち替わり、社長が親会社から出向でやってくるのです。そのたびに当社の経営方針はガラッと変わります。このこと自体は、我慢できないわけではありません。

でも、今度のC社長は、親会社の方針とは思えない、売り上げの荒稼ぎをしようとするのです。つまり、正規の販売ルートでない現金問屋やブローカー相手に、大量に安売りするというような商品の横流しを社員に押しつけます」

「それに、少しでも違う意見を言うのと干されてしまいそうなのです。公私混同と思わせるようなこともありま

す」

「正論と思うことを言う私の立場が危うくなり、これまで会社のために尽くしてきた人生はなんだったのか……とガックリ落ち込んでいます。

いっそ、『半沢直樹』のように、花々しく倍返しをしてやろうか、などと思うこともある今日この頃です」

●ムダな抵抗はよせ

相当思いつめているらしく、話しながら目に涙があられ出てきたBに対してAはまず、「悔しいのはわかる。しかしムダな抵抗はしないほうがよい」と告げ、次のように話した。

「なるほど、不条理な話だね。でもね、もともと世の中は不条理なことに満ちていると考えなければならぬ。理屈が通らないのはそのことだけではないはずだ。

半沢に人気が出たのは、一般のビジネスマンがやりたくてもできないことをやってのけて、彼らの溜飲を下げたからだ。あれはキケンな美学だ。

でもね、正しい方が負けてはいけない。そのためには、

少し長い勝負をかけようや」

Bはふっと息をついて少し肩の力を抜いたようだった。

「正しいと思う意見は言うべきだよ。でも穏やかにね。

魂を売り渡してはいけない。しかし、社長がいったん決めたことには、人一倍忠実に従ってがんばるべきだ。組織の最終責任はトップにあるのだからね。

もちろん、問題にもよる。法令違反やセクハラなどはそうはいかないが。そうすることによって社長の心を虜にできるかもしれない」

Bは不意をつかれたようだった。

「君は、感情的になつて社長の全てを悪く見ているのではないかな。事実彼はかなりの悪漢のようだが、まさか『売り上げを落とせ』とは言っていないはずだ。毛嫌いせずに、彼が言うことのなかで何かいい方向を見つけてやつて、それに向かつての努力をしようじゃないか。

それ以外の面では、社長を反面教師にしよう。

それで成果が上がらなかつたら、社長が解任される。成果が上がれば栄転して去っていく。その時、本社に彼のことをせいぜいよく言つてあげれば効果的だ。『金と

天下は回りもの』なんだよ」

この辺りからBの表情がやや明るくなった。

●解任されず

「それにね、君の上司は社長だけど、そのまた上司がいるし、周りが君を見ている。ほくの長年の経験からだが、『知る人ぞ知る』ということを感じたほうがよい」

時々やつてきたBから聞いたその後の経緯は次の通りである。

Bはその後、Cに対する反発は止めて、拡張や仕入れなどについて積極的にCに意見を提案するようになった。最終的に社長が決定したことにはだれよりも献身的かつ創造的な働きをし、取引先のクレームも社長に代わって矢面に立った。

Cは一時自分の思いどおりに動かないBを解任しようと思つたようだが、Bのこのような実力と忠誠を目の当たりにして思いとどまつた。そして「横流し」については、「もう止めましょうよ」というBの意見が徐々にとりいれられて、やがてゼロとなった。

●まさかの後任社長

最初に相談を受けてから二年ほどたち、Bが報告にやってきた。

Cが親会社にめでたく復帰することになり、後任には、初めての生え抜きの社長としてBが指名されたというのだ。それも「悪漢社長」の推薦を親会社が即受け入れたためらしい。

B「あのときあのまま反抗していたら、今の僕はありません」

A「社長は貴重な反面教師になったのでは？」

B「いえいえ、今となればそのまま学ぶこともありました」

A「ほう、君もずいぶん成長したものだ。いや、成長したのは社長のほうかな？」

そんな会話が交わされて、Bは引き締まった表情で帰っていった。

●隠れ教育

それから半月ほどして、Aは親会社が主宰する一群の

OBを招いたパーティに出席した。

その場の接待側に、Bの会社の元社長で今は親会社の中枢に戻ったC部長がいた。

「Cか、お前、本社へ帰れてよかったな。だが、俺のところにはいたときに叱った横流しや部下いじめは、まさかもうやってないだろうな？」

「はい、あのときは本当にご迷惑をおかけしました。でも、あれ以来心を入れ替えました」

私は、鋭い視線で彼を刺しながら尋ねた。

「後任にだれをもってきたんだ？」

「初めてプロパーの営業部長を抜擢しました」

「ほお、昔の君なら考えられないことだ。前のままなら『半沢直樹』に寝首を掻かれていたかもしれんぞ」

「はい、あの頃の先輩のご指導のおかげです」

「いや、営業部長が「反」沢直樹だからよかったんだ。お前、よい方の倍返しされたのではないか？」

Cはその意味は即分かったが、プロセスを推測するに至ったのは夜寝床のなか。その時私に対して抱いた恨みに近い感情が感謝に変わったのは翌朝だったようだ。

悠遊の記



近況報告

中村 爽

年を重ねてくると万事億劫になり、家に引きこもりがちになる例が多いと聞きます。自身を省きても、徐々によってくる感性の衰えは否定出来ず、「悟りの境地に入った」などと周囲に強がってみても、所詮は心身の老化で怠け癖がついてくるようです。それでも、いつも騒がしい世間を覗き見ると、物の一つも言いたくなる事も多くなかなか「悠々」の時を見つけれない気持ちになります。それはともかくとして、以下に近況の一端を述べてみます。

毎年秋に高校の同期会が開かれます。戦争直後の旧制中学から新制高校まで一貫した六年間の仲間の集まりで、結束が固い会です。卒業後六十二年目の今回は、「傘寿の会」の趣となりました。卒業時六組で約三〇〇名だった同期生のうち、物故者は八〇名弱、所在が明らかな人数約一五〇名に対して、出席者は四十数名でした。

原子力専門の学者になった級友から原発についての講義を聞き、得るところ大。卒業後初めての出席者もいて、少年時代の面影を探り出すのが良い刺激になりました。終わりに、二度目の東京オリンピックを見に行こうと合意して散会。心地良い時をすごしました。

さて、その他の行動ですが、以前から実行している歩くことを今年も続けるべく、近隣の散歩に加え、先日は二宮の吾妻山に登り、満開の菜の花を鑑賞。続いて数日後、江の島に渡り、頂上の展望台までエスカレーターを避けて徒歩であごを出しながら石段を登り、チューリップ花壇を楽しみました。まだある程度の歩きができる感じなので、今後もわが町の「歩こう会」が実施するウォーキングにも参加していくつもりです。

なお、投句で参加させて貰っている「ペン川柳」も、よろよろながら、許されれば続けたいと思っています。

沈黙する携帯電話

金京 法一

現代の生活パターンの中で、携帯電話ほど便利で、ほとんどの人の生活に浸透している機器は少ないであろう。私も使っている。ただ通話のみでメールはほとんどやらない。ゲームやネット検索などやったこともない。もともと携帯電話を始めたのは家内との連絡のため、私が街に出かけているとき、買い物の際頼があったり、いつ帰宅するかとの問い合わせなどであった。ただ私は耳がちよっと悪いのか、街の喧噪のなかでは着信音が聴きとれず、家内によく文句を言われた。

家内の死で、私の携帯電話はお役御免になった感がある。三か月近くになるが、その間誰からも掛けてこない。もともと夫婦の間の連絡用であり、他人に私の番号をほとんど教えていないので、掛けてこないのは当然であろう。携帯電話は沈黙している。

それでも私はいつも携帯電話を持ち歩いている。家の中でもいつも身近に置いている。一つには携帯電話に組み込まれている万歩計に興味があるからである。私にとっては唯一の運動の記録である。夜寝る時には枕元に携帯電話を置いている。何かあった時に、隣家に住む娘に連絡するためである。ただ、万が一着信音が鳴り響き、ボタンを押すと家内の声で「ああ、わたし」と言われたらどうしようと、期待とも恐怖とも云えぬ複雑な思いに取りつかれることもある。沈黙する携帯電話は時には不気味な存在である。と同時にそれは過ぎ去った家内との時間をも封印するもののようなのである。



「悠遊百歳の会」を発足しませんか

はやし たかし

会員は、おおらかに百歳をめざし、花を愛で、動植物との共生を願ひ、酒・タバコは控え目に、健康に励み、静かに安らかに生き抜く。会員資格要求は全く無く、国籍も問わない。

それでも、会としては、世界連邦から世界平和を希求し、人類はひとつを基本理念とする。

具体的には、尖閣諸島などは、両国同条件のもとにこの地の領有権を放棄し、国連統治としてから、世界連邦への第一歩としていく……等々（ちよつと甘いかな?）。ともかく、これだけの頭脳集団がその全能力を出し合つて世界平和を理想としてゆつくりと動き出せば、人類は救われるのではないかと考えます。

「悠遊友の会」とせずに、「悠遊百歳の会」としたのは、老後は広々ゆつたりとしたものであつて欲しいとの願いからです。

入会のご挨拶としてはかなり異例のものになりましたが、これだけの頭脳集団がこのままではモッタイナイと考え、敢えて妙な提案となりました。

先輩諸兄にご検討いただければ、誠にもつて幸甚の極みです。



ペン俳句のこの一年

佳句鑑賞

西川 知世

私がペン俳句を引き受けて以来プロマネを務めてくださった中村雅道さんに代わって、安藤晃二さんがマネージャーを引き受けてくださり、無事一年を過ごすことができたのは頼もしいことであった。雅道さんの今までの労に感謝している。二〇一三年は六月に黒澤弘子さん、十一月に首藤しずをさんと、新しく二名の仲間を得た。ますます活発な句会が繰り広げられていることは、会の進行を預かっている者として、大きな喜びである。

十月八日から一泊で、中村晃也さんの幹事で御嶽山の一泊吟行を敢行し、信仰の山としての御嶽山を満喫した。日常から離れた貴重な経験であったし、ゆつくりと句座を囲んで贅沢な時間を過ごした。私は初学のころ、小林恭二の『俳句という遊び―句会の空間―』という本を読んで、将来こんなふうに俳句を楽しみたいと願っていたが、ペン俳句でその願いがかなっているような気がして嬉しい。

この一年のペン俳句の成果をまとめさせていただく。

新蕎麦や溪流へ窓開け放ち

溪音の近し水引草の緋に

水澄むや御師の廊下の磨かれて

秋草の風の遊べる御師の山

狛犬の双眸秋の雲を追ふ

登拝の記念碑あまた秋の晴



教室に空席一つ田植どき

喧噪の馬券の街や百日紅

御嶽なる山門に着き薄紅葉

秋麗や檜の巨木山掴み

雪吊の縄舞ひ上がる松の空

安藤 晃二

晃二さんの句は絵画的。虚子によれば俳句は叙景詩。晃二さんはその王道を歩もうとされている。「雪吊の」の句、雪吊作業の庭師を詠っているが、縄が庭師の手から放り投げられた瞬間をとらえた。下五の「松の空」は省略が効いて、縄の高さまでもが表現できていて、秀逸。

初暦まづ朱で囲む通院日

さざ波の連れくる光水草生ふ

国境を越え広々と麦青む

退院の一步踏み出す青嵐

冬ざるる復興の地の売地札

猪股 重子

重子さんは熱心に俳句を作る。その姿勢にいつも感心する。体調を気遣いながらの作句活動であるが、逆に私達が元気をいただいている。「初暦」の句は、大方の方が頷かれる句であろう。初暦は新年の願いをこめて掛けるカレンダー。そこに今年の平安を祈る気持ちがある。

もの全て輝く花菜日和かな

ひとつぶにひとつ種とぶさくらんぼ

丹頂の首立ててゐる北の空

いち早く山に冬来る登り窯

電報に切れ字がなくて開戦日

上田 信隆

信隆さんは、句会で季語に挑戦中である。ときどきの勇み足はご愛嬌。ここに並んだように秀句が多い。「電報に」は下五と上句の間に意外性がある。十二月八日開戦日の不安感とか緊張感とかを、電報に切れ字がないという小さな発見によって表現しようとし、成功している。

我が庵は晴耕雨読長閑なり

大泉 子泉

失せ物の現れ出でる夏夕べ

雲低く回り道して寒施行

薄氷を割りて水飲む猫二匹

庭師来てみるみる冬の空開く

最近転居をされて、句の材料にもたびたびなった。「わが庵は」もその一句。新しい生活が気に入っている様子を表現。「庭師来て」では、一転、写生句に挑む。庭師の作業によつて冬の空が開くという視点がよいし、「みるみる」の措辞で庭師のてきぱきとした所作も表現できた。

棟上げの幣よりぬつと夏の月

黒澤 弘子

縞チエック水玉模様母の夏

風は秋かすかにフォーレのレクイエム

神在の憶良の一首子等のうた

裏庭の一鉢に立ち冬薔薇

新しい句友を得てペン俳句に華がさいた。弘子さんの句柄は若々しく多岐にわたる。「縞チエック」の句は、思ひ出のお母様の様子を詠ったものであろうか。視覚的であり大胆で素敵だ。母の夏と下五で言い切ったところに、母への追慕が表出する。宮崎駿の世界のよう。

海苔の香は妻の国ぶり雑煮椀

志村 良知

振袖の若き息雪蹴立て行く

行く人の肩の無防備春の雨

ステテコで存分水撒く楽しけり

蒼天に小ぶりの柚子の鈴なりに

良知さんは俳句の中に自分の視点を表現することについて心をついていっている。掲出の五句も言い過ぎずにうまく表現している。「行く人の」は、その人の肩に無防備を見ることが、作者の独自の視点である。春の雨なら無防備もいたしかたない。人間肯定は芭蕉以来俳句の神髄。

中秋の青き魚棲む川のいろ

首藤 しずを

秋の日のあかあかと燃え葉鶏頭

十月の海見たくなり一日旅

盛り場の風に当たたらむ年の暮

街角の喧噪に酔ひ十二月

ペン俳句に参加されて日は経っていないが、すっかり馴染んで句会を楽しく支えてくださり、刺激をいただいている。「中秋の」の句は幻想的で美しい。青き魚は何であらうかと詮索することはこの句には必要ない。この句が詠う色彩と透明感を満喫することで十分である。

寒鯉のあぶくに水の伸び縮み

中村 晃也

春の汐掴んでみたき渦ひとつ

田の闇を震わす祭り太鼓かな

はまなすの丘の夕日や靴に砂

雲迅しすすきはらまたすすきはら

俳句雑誌に投稿して腕を磨いておられる。「田の闇を」の句は、『俳句』で伊藤伊那男氏に採られた句。「寒鯉の」

の句は面白い視点で寒鯉を観察している。重たい寒の水が伸び縮みしているという表現が巧みである。しかも原因は寒鯉が立てるあぶくだと作者は感じている。

年重ねいよよ母似の初鏡

保坂 令華

褪せし絵馬新しき絵馬春一番

仲秋や霧笛が洗ふ異人墓地

ふつりと忘れたきこと髪洗ふ

小春日やひとり厨に菜をきざみ

重子さんと仲よく句会に参加されているのは微笑ましい。いつも楽しそうである。「褪せし絵馬」の句は下五の季語の春一番によって、句の中にかたかたと風に吹かれる絵馬の音を発する。乾いた関東平野の空気が句の中にあり、絵馬の上に重なる絵馬の量も出ている。

踏み出せば空の揺らぎの二月かな
遠回りしては春光背に遊ぶ
薄ら日に墓標の多き春の島
一軒家独りに広し金魚飼ふ
金魚飼ふ水柔らかき明り窓

水原 亜矢子

お忙しい中、ペン俳句に参加していただいているが、今年には二回駆けつけてくださった。その中から五句を抽出させていただいた。しなやかな句の調べが亜矢子俳句の特徴であろう。

何もせむことの贅沢春の風

玉山 和夫

なんとしても生きねばならぬ酷暑かな
朝採りの柿一枝のみやげかな
朽ちかける記憶のなかに一葉忘
どの子にも希望の星あり聖夜かな

玉山さんの句を拝見するようになって何年経つだろう。ますます泰然自若、大人の句風である。一句目、季語の働きが充分に効いて、その贅沢をことさら心地よいものになっている。二句目も同様。暑に対する覚悟は年を経るとともに厳しさをますます、負けぬ気力も充分である。



二〇一三年「ペン川柳」勉強会の成果

川柳勉強会 世話人 平尾富男

月に一回の勉強会も、昨年十二月で第百十五回を迎えた長期の伝統を誇る分科会です。「ペン川柳」は、創設時の新橋の割烹『森田』に引き続いて、銀座の薩摩料理の飲食店『黒薩摩』をお借りして勉強会を開催してきました。昨年七月からは稲田屋新宿西口店に場所を移して楽しく勉強しています。

一昨年の後半から加わった二人のレギュラー・メンバーの他、昨年にはクラブに新しく加わった会員が一人、優秀ペン川柳子として活躍されるようになりました。

以下は、常任メンバー十二名が二〇一三年に詠んだ句から自薦の優秀（一）三句、あるいは世話人の選句です。メンバーの過去の人生が色濃く表出された作品が多く詠まれていて興味深いですね。（作者・作品は順不同）

酔 雅

- ① いつかまた未練残して竿おさめ
（未練）
② 忍び会い実ってからは忍び耐え
（忍ぶ）
③ まつりごとナビが狂って右ばかり
（狂う）

不 言

- ① 残り火に想い出偲ぶ共白髪
（火）
② 無い袖を振ったばかりに銭地獄
（振る）
③ 天の声妻の声ともよく似たり
（天）

酔 深

- ① 嫉妬され惚れた証とほくそ笑む
（嫉妬）
② 謝った夫の一言火に油
（火）
③ 塩振って自分史の嘘隠し味
（振る）

井 波

- ① お互いに貢いだつもり老夫婦
（貢ぐ）
② 霞が関一字忍ばせ文学賞
（忍ぶ）
③ 鈴乃屋の畏む心なき中と韓
（鈴）

零門

- ① 席立つもグラスの底にまだ未練 (未練)
 ② 源内も消えるウナギに手を合わせ (消える)
 ③ 家荒らす孫台風は待ち遠し (荒らす)

西貢

- ① 捨て切れぬ未練づくしのごみの山 (未練)
 ② ゴミ捨て場荒らすカラスが君臨し (荒らす)
 ③ よみがえる「ちぎれるほどに振った旗」 (振る)

損得

- ① 老兵は消えゆくどころか大暴れ (消える)
 ② 振り振られこれがおいらの人生さ (振る)
 ③ 天地人それから下はないものか (天)

安兵衛

- ① 世のことは嫉妬で解くとよく判る (嫉妬)
 ② あの時が別れになるとつゆ知らず (別れ)
 ③ この年もツキの女神にみな振られ (振る)

だし

- ① 歌一首運命^{さだめ}を分かち「忍ぶ恋」 (忍ぶ)
 ② 兄貴まで『狂った果実』を演じてる (狂う)
 ③ 鈴の音で地震と分かる安普請 (鈴)

晃二

- ① 大役を振られルビコン渡るカモ (振る)
 ② 別れとも知らず幼子花手向け (別れ)
 ③ 狂う古い松の恋路を阻む子ら (狂う)

火酒

- ① お忍びはケチの財布をこじ開ける (忍ぶ)
 ② 色欲が消えりや突つ張る欲の皮 (消える)
 ③ 天かすを蕎麦屋が落籍^{ひか}して揚玉^{じようたま} (上玉)に (天)

鬼瓦

- ① 戯言に嫉妬が絡む四疊半 (嫉妬)
 ② 天に唾風の次第で事もなし (天)
 ③ 揉め事は女房に振って亭主風 (振る)

「800字文学館賞」

昨年に続き、第五回の「800字文学館賞」の作品を募集したところ、百六十四編の作品が寄せられ、審査の結果、次の通り最優秀賞一編と優秀賞二編、および佳作三編が選ばれた。

最優秀賞 「ウズベキスタンとの新たな絆」

野口 観道

優秀賞 「日常の茶事」

八木 信男

優秀賞 「古書を求めて」

鈴木 聡

佳作 「馴染みの客」

田賀 せいし

佳作 「自転車」

氣質 たまみ

佳作 「ハンカチ」

篠崎 正喜

紙面の関係ですべての作品を紹介できないが、最優秀賞の野口さんの作品を掲載する。野口さんは一月二十三日のクラブの新年会に、滋賀県から参加された。

(プロマネ 志村、内藤、野瀬)

ウズベキスタンとの新たな絆

野口 観道

ウズベキスタンとアフガニスタンとの国境の市、テルメズ郊外のカラ・テパ仏教遺跡での即興演奏の音色が、「絆」と「平和」を祈りつつ国境を流れるアムダリヤ川を越えていく。

ウズベキスタンとの「国交20周年音楽のシルクロードツアー」の一行は、タシケント、ブハラでの大学や音楽家との交流と演奏会を終え、バスに5時間余り揺られブハラからサマルカンドに到着した。サマルカンドは、『青の都』、『東方の真珠』などの異名を持つ、シルクロードの十字路に位置するイスラムの色彩の濃い古都である。

世界遺産のレギスタン広場での合同演奏会の開催という悲願に、多大な努力と労苦を結集された関係者の夢が実現した当日の演奏会が甦ってくる。

ウルグベク・メドレセの建物に足を踏み入れると、多くの聴衆で会場は熱気が漂っていた。開会行事を終え、待ちに待った演奏会が始まった。ざわめきを鎮めるような尺八の重厚な音色が建物に反響する。切れ味鋭いバチさばきで、津軽三味線の乾いた糸から奏でる音が胸を打つ。琵琶の物悲しくも切ない弾き語りからは、祇園精舎の鐘の音が聞こえる。

タイムスリップした邦楽の世界に横笛とネパールのバンスリの音が共鳴し合う。ネパールの打楽器、タブラを巧みに操る指さばきに魅せられる。ブハラの民族音楽と民族舞踊をしながら舞う女性との共演は、シルクロードの情景を彷彿とさせる。ブハラの演奏家と日本の演奏家とのセッションでクライマックスに達すると、聴衆からの手拍子が大きなうねりとなり演奏家と一体となった。

陽が沈み、ライトアップされたワインカラーが広場を包み込んだ一瞬、尺八奏者が東日本大震災の復興を願い作曲した「絆」の曲が合同で演奏されたその時、上空に一斉に飛び立ち周回した鳥たちが、歓喜のさえずりをひときわ高く響かせたのである。

サマルカンドのレジスタン広場が青く光輝く時、それは旅の終焉であり、ウズベキスタンとの新たな絆の序章であった。



写真は賞状を掲げる野口さんと西川会長

英語を読もう会 しばし休会

英語を読もう会は、平成十四年四月に新日鉄代々木寮で呱呱の声をあげました。初代プロマネ村田さんの呼びかけで、英語の輪読による外国語の習得、読解、国際情勢の勉強などを望む向学・同好の士が集まり、月に一回英語を通じて世界情勢の勉強を始めました。『悠遊』の年史によれば、その後十年間、活発にして知的、文化的で刺激に溢れる高度の勉強が続きました。

その間、延べ約百回、延べ七十人を越える発表者が自分の得意なテーマを選びました。その分野は時事英語の読解、背景解説、国際事情、アダム・スミス、ケインズなどの経済原論、大統領演説、医学、歴史、読み物、オペラ、音楽、万葉集、英王室、スポーツなど極めて多岐に及びました。この分科会で世の中が広がる感を強くした人も多いと思います。

毎月の担当は輪番で、自らテキストを選び事前に配布し、関連資料を整え、英文朗読・難解語の解釈・背景説明・全文の要約を行い、内容についての質疑、議論を行うス

タイルをとりました。それだけに講師には大きなロードがかかり、準備にも時間を要し、内容も高度になって、テーマに関する議論が高まりました。

その間、プロマネは村田、野瀬、中村(将)、佐久間、大泉と、場所も新日鉄代々木寮からオリンピックセンターへと変わり、開始時間も変遷しました。

しかし、メンバーの好みに合わせたテーマの選定の難しさ、資料の事前準備の忙しさなど、発表担当者の負担も大きかったためか、いつしかメンバーが減少しました。

その結果、本勉強会は平成二十五年五月をもってしばらく休会することになりました。

この機会に過去の活動状況を振り返ります。

平成十四年四月スタート 英語読解、訳文を学んだ

平成十五年 時事英語、読解と国際事情の勉強

平成十六年 活動が定着

平成十七～十八年 プロマネ＝野瀬、中村(将)

平成十九～二十年 プロマネ＝佐久間

平成二十一年 毎回約十人参加 新聞ニュース、読み物、
経済など

平成二十二年 政治、スポーツ、小説、文学、社会時評、
医学など

平成二十三年 芸術、歴史、ニュース、経済、文学など
平成二十四年 経済、オペラ、野球、震災、オバマ演説、

外交、万葉集、時事など

平成二十五年の活動は次の通りです。

一月 松谷 隆 HIRONO BECOMES FIRST U.S.

SENATOR BORN IN JAPAN

二月 野瀬 隆平 FEDERAL RESERVE ACT

MONETARY POLICY OBJECTIVES

三月 中村 将陸 COST OF ENVIRONMENTAL DAMAGE

IN CHINA GROWING RAPIDLY

AMID INDUSTRIALIZATION

五月 大泉 潤 WORRYING ABOUT FUTURE

"A Global Forecast for the Next

Forty Years, by Jorgen Randers
A Report to the Club of Rome

(プロマネ 大泉潤)



「何でも書こう会」寸描

毎月第二と第四木曜日の午後、代々木の国立オリンピック青少年センターに七十歳前後の人たち十数人が集まる。守衛さんとも顔見知りだ。場所柄、奇妙な光景である。

十九年も続いている企業OBペンクラブの勉強会の一つ「何でも書こう会」が開かれる日だ。センターで一番豪華な円卓の会議室へ。会場費三百円をそれぞれ支払う。席は自由だが、常連ばかりだから定席らしいものが決まっている。

一時過ぎ、合評会が始まる。司会者が決めた順番で、各自用意したA4用紙一枚の縦書き八百字の作品が出席者に配られ、組上に載せられる。

まず本人が自作を朗読する。感情たっぷり、抑揚をつけて丁寧に朗読する人、見ればわかるだろうと素っ気なく読みとばす人。

プレゼンのように写真、本、地図、自作の絵などを持ち込む人、作品の背景や書き残したことを説明する人、

裏面にも資料を印刷した人、などなど。

特定のテーマのシリーズ、職場での体験や感想、歴史、民俗、政治・経済・社会への批判と提言、映画や本の感想、宗教など、テーマが無制限に広いのが特色だ。

豊富な体験と一言を持つ人ばかりなので、議論の範囲は広く、深い。文章の構成や趣旨、表現法、「て・に・を・は」など文章作法にも議論が及び、一人の作品の批評で三〇分もかかる時がある。

休憩をはさんで五時過ぎまでたっぷり四時間。退屈する間もなく、あつという間に終わってしまう。

思いを述べ尽くした元企業戦士の老書生たちは、満ち足りた気分で二次会の会場へ急ぐ。

テーマ、文体、内容は何でもOK。雑煮のような勉強会だからこそ長続きしているのだと思う。

平成二十五年の一年間に、合宿を含め二十三回開かれ、発表された作品は二七〇点。各人の財産になっている。

（プロマネ 大月、大越、志村）

「掌編小説勉強会」この一年

二〇一三年一月に発売されて好評販売中の『卒サラビとの文芸館』に掌編小説九編が収録されました。この本は当クラブの卒サラ川柳シリーズ第三弾として企画され、これまでの川柳、エッセイに小説が加わった進化形の「文芸館」。この勉強会としても出版デビューを果たした記念碑になりました。

「掌編小説勉強会」は発足して七年、隔月に開く合評会はこの一月で四十二回を数えました。この一年間で四十五編の作品が加わり、累計は三百編に迫る勢いです。作品の内容は、企業物から海外物、時代物、想像物、そして恋愛小説まで多種多様です。

メンバーは、新たに有力な女性が入って、女性三名、男性八名の十一名、それに読者目線から厳しいコメントをくださる評者が加わります。

年齢層は六十代から九十代まで幅広く、キャリアもさまざまな個性的な人たちです。

最近、各自が得意分野を深めて積極的に世に問う動

きが活発で、一部その成果が現れています。

たとえば、最長老の玉山さんが書いたシミュレーション小説が日本の安全問題を扱う学会誌（季刊）に四回に亘って掲載され、現在も継続中です。

また、喜多川（ペンネーム）さんは、自分の身の回りを主役にした寓話をシリーズにして書き続けており、その一篇が大手出版社の文芸誌のショートショート・コンテストに入選しました。

それらはみな、この勉強会で書いた作品を基に目的に合わせて編集したものです。

今年はこれらの対外活動を一層活発に進めるとともに、最近の電子書籍化の流れに注目しながら次の作品集の企画化を検討しはじめます。

毎回の合評会は盛況ですが、もっと新しい人に加わってもらい、さらなる活性化を図りたいと考えます。お気軽に見学参加をお待ちしております。

（プロマネ 濱田、西川、廣澤）

インターネット関連について、次の通り報告します。

・年間アクセス数は四万を超え、会員の重要な通信手段となり、会員相互の意思疎通、対外発表に欠かせない重要なインフラとなっています。

・過去の経緯は次の通りです。

○三年 登録会員の六割がＩＴを導入しました。ウィルス対策、メール通信技術、添付ファイル、ホームページ、ワード校閲、拡張子などの勉強を行い、月例会通知のＥメール配信を開始しました（プロマネ＝多田）

○四年 ベストライフ誌から依頼された長期連載に取り組み、十名十編を掲載しました。また、ＩＴ会員は七割になり、画像処理他の勉強を行いました。

○五年 ＩＴ会員が八割となり、会員相互、対外的にもまたエッセイ、写真などで広がりを見せました。

○六年 ＩＴ文化レベルの向上促進、会員相互の交流、対外的広がりを軸に、三鷹勉強会を開催しました。

（プロマネ＝三宅、中村（將））

○七年 会員交流や対外交流が広がり 中村（將）、松谷平尾の指導で月一回勉強会を継続しました。

○七年 ＨＰの閲覧・投稿、公開ページの充実、エッセイ、写真、８００字文学館の移行を行い、勉強会を継続し、またフォーラム形式の交流が活発化し、パソコンとＨＰ利用の基礎勉強を行いました。

○八～十一年 ＩＴ勉強会を、必要に応じて月例会の前に開催しました。（プロマネ＝平尾、松谷、中村（將））

十二年 サーバーの不具合などから、ＨＰ運営をリブラス社に変更し、一新しました。

十三年 ＨＰの見直しを行ない、ＩＴ勉強会も復活しました。ＨＰの閲覧数のデータ収集を始めましたが、年間四万、一日百件を超えるアクセスがあります。今後会員相互のコミュニケーション、勉強の成果の対外発表を目指して一層のレベルアップを図りたいと考えます。

（プロマネ 上田信隆、大泉潤）

企業OBペンクラブの本年の歩み

Ⅱ平成二十五年(二〇一三年)Ⅱ

一、役員人事

(会員への敬称略)

二〇一二～二〇一三年の任期の二年目に当る二〇一三年は、前年に引き続き、左記の役員が務めた。

会長	西川 武彦(出版担当)
副会長	平尾 富男(事務局長)
副会長	大泉 潤(財務担当)
理事	浜田 道雄(運営委員長)
理事	大越 浩平(運営副委員長)
理事	志村 良知(副事務局長)
理事	清水 勝(会計担当)
監事	山縣 正靖

二、年度方針

①多彩な人材の入会を求め、会員数七〇名以上を維持

- ②ホームページの活用により外部への更なる発信
- ③新春早々に文芸本第三弾を上梓し、電子書籍へも挑戦

- ④「800字文学館賞」の継続実施
- ⑤ホームページのトップページでの『悠遊』他の販売を模索

三、月例会

一月例会(一七日)

・新春ゲスト講演Ⅱ

河村幹夫氏(シャーロック・ホームズ研究家)

『シャーロック・ホームズの履歴書』

・新年会・出版記念パーティー

会員四十二名、ゲスト十六名

『卒サラびとの文芸館』(青蛙房)の出版記念パーティーを兼ねて行われた。

余興Ⅱ五・七・五大会。

俳句（兼題Ⅱ小）、川柳（読み込みⅡ川）、フォ

ト句（お題Ⅱかぼちゃ）

参加者からあらかじめ投句を募り、その入選発表で大いに盛り上がった。

・「何でも書こう会」Ⅱ熱海合宿

第五回となる熱海合宿に勉強会有志十八名が一

泊の勉強・懇親に参加した。

帰途、二宮の吾妻山公園に遊んだ。

二月例会（二十一日）

・退会会員Ⅱ藤岡豊、大庭定男、高口恵子

・新入会員Ⅱ富田佳瑞

・ゲスト講演Ⅱ

下重暁子氏（日本ペンクラブ副会長）

『不良老年のすすめ』

・二〇一三年版会員名簿、確定配付

会員数六十七名

三月例会（二十一日）

・会員講演Ⅱ安藤晃二

『リチャードⅢ世』

・会員講演Ⅱ市川忠夫

『ガラパゴスから見たデジタル』

四月例会（十六日）

・ゲスト講演Ⅱ

平川克己氏（文筆家・立教大学特任教授）

『誰も知らない人口減少社会の意味』

・『悠遊』創刊二十周年記念号配付

・サロン21Ⅱ「日本の目指すべき方向」と題し、ホームページ公開サイトにテーマ別提言を開始

来年四月まで一年間連載予定。

・『卒サラ人の文芸館』Ⅱ全国図書館協会の選定

図書に選ばれる

五月例会（十六日）

・新入会員Ⅱ下山健夫、内藤真理子、黒澤弘子

・『悠遊』合評会

九月例会（一九日）

・ゲスト講演

六月例会（二十日）

・会員講演 門屋信行

『中国今昔二十年（植林活動から見えてきたこと）』

・会員講演 田原敬

『仏像と仏教の由来』

七月例会（一八日）

・新入会員 松浦俊博

・ゲスト講演

林勉氏（元日立製作所原子力事業部長）

『今一度原発問題を考える』

・パソコン勉強会 中村真一郎氏（リプラス社）

『メール活用のポイント』

八月例会（夏休み）

・新入会員 首藤静夫

・第五回「800字文学館賞」公募開始

十月例会（十七日）

・会員講演 森田晃司

『出雲神話は訴える―国譲りの深層』

・会員講演 原田信

『日本語教育の広がり』

・ペン俳句 一泊で奥多摩の御岳吟行開催、七名が参加して宿坊泊、朝のお勤めにも参加

・次期役員選挙公示

十一月例会（二十一日）

・新入会員 木村敏美、横内則之

廣瀬幸夫氏（東京工業大学国際室特任教授）

『大学の国際化と留学生事情（日本企業への就職）』

・選挙管理委員の選出 松谷（二期目）、新井（新任）

・ホームページアクセス数、月間五七五二件を記録

・会員講演Ⅱ杉浦右蔵

『情報通信のお話』

・ペンフォト句Ⅱ十月句会（十四日）に朝日新聞の取材を受け、十一月十八日付け全国版生活文化面に句会の模様が掲載される

十二月例会（十九日）

・退会会員Ⅱ阿久澤泰子、阿部洋己

・ゲスト講演Ⅱ

杉山邦博氏（元NHKアナウンサー）

『名力士、名勝負に学ぶ』

・第五回「800字文学館賞」入選作品決定

ホームページ公開サイトに掲載

最優秀作品Ⅱ野口観道さん

『ウズベキスタンの新しい絆』

優秀作品Ⅱ鈴木聡さん

『古書を求めて』、

優秀作品Ⅱ八木信男さん

『日常の茶事』

四、次期役員人事

二〇一四年～二〇一五年の二年間を務める役員が、

会則に従って会員投票により選出された。

会 長Ⅱ西川武彦（留任）

副会長（財務担当）Ⅱ大平忠（再任）

運営委員長Ⅱ大越浩平（理事留任）

事務局長Ⅱ志村良知（理事留任）

理 事（会計担当）Ⅱ清水勝（留任）

理 事（広報・渉外担当）Ⅱ安藤晃二（新任）

理 事（副運営委員長）Ⅱ森田晃司（新任）

監 事Ⅱ山縣正靖（留任）

まとめ（総評）

二〇一三年二月の名簿に記載された会員数は六十七名。二名が諸事都合で退会したが、実に七名の新入会員を迎える事が出来、年末には七十二名となった。特筆すべきは、新会員七名中五名が六十代と当クラブとしては若年であることで、六十代以下の会員数は二十名となった。

各プロジェクト、勉強会もここ数年來の《若い》会員の参加で勢いづいている。

出版企画では、年初に、川柳、エッセイ、掌編小説のコラボ、『卒サラびとの文芸館』（青蛙房）を刊行した。同書は日本図書館協会の選定図書となった。リタイヤしたビジネスマンの文芸活動の好例となるであろう。

分科会活動では、「サロン21」が、へ日本の目指すべき方向」と題し、広く外部への提言を開始した。各月一つのテーマについて輪番の座長によるプレゼンと、参加者によって交わされた激論の結果がホームページ公開サイトに掲載されている。

「何でも書こう会」から派生した「8000字文学館賞」は、昨年第五回を数え、クラブの対外行事として定着した感があり、応募者有志を新会員に迎えるという例も増えてつつある。

「フォト句会」は、宗匠による投稿句の選句と指導、という形式の多いこの新しい文藝にあつて、毎月互選の句会を開く、という運営方式に注目した朝日新聞の取材を受け、全国版に句会の模様が掲載された。

企業OBベンクラブは、インターネットを前提に活動しており、その中心はホームページである。近年会長方針により、ホームページの充実に力を入れ、単に読んで貰うだけのホームページではなく、提言し、読者の心をつかむホームページであろうとしている。昨年はその萌芽が現れ始め、月間アクセス数は平均で四千件を越え、九月には最高の五七五二件を記録した。ホームページを読んだ入会希望者や、取材依頼もあった。

本年も「攻めのホームページ」による発信、提言、広報、宣伝に、より一層努めて行きたい。そのためには、多彩な人材を新会員として迎え、各プロジェクト、勉強会活動を充実させていくことが基本と考えている。文責＝事務局長・志村良知



氏 名		出 身 会 社
鳥海 博	とりうみ ひろし	山一証券
内藤真理子	ないとう まりこ	
中川路 明	なかかわじ あきら	ダイセル化学工業
中村 晃也	なかむら あきや	三菱化学
中村 爽	なかむら そう	日本工営
中村 將陸	なかむら まさみち	富士通
新山章一郎	にいやま しょういちろう	在日米国海軍基地
西川 武彦	にしかわ たけひこ	日本航空
西川 知世	にしかわ ちよ	三菱倉庫
西田 昭良	にしだ あきよし	東京放送
新田由紀子	にした ゆきこ	シュプリング・ジャパン
野上 浩三	のがみ こうぞう	日本生命保険
野瀬 隆平	のせ りゅうへい	石川島播磨重工業
橋本 政彦	はしもと まさひこ	日商岩井
羽田 壽夫	はねだ ひさお	三菱重工業
馬場真寿美	ばば ますみ	ヤマハ
浜口須美子	はまぐち すみこ	稲畑産業
浜田 道雄	はまだ みちお	労働省
濱田 優	はまだ ゆたか	三菱化学エンジニアリング
林 孝	はやし たかし	大広
原田 信	はらだ まこと	NHK
平尾 富男	ひらお とみお	キャノン
廣澤 重穂	ひろさわ しげほ	シータス
福本多佳子	ふくもと たかこ	日本航空、Creative Tours
古川 幸雄	ふるかわ さちお	安宅産業、石川島播磨重工業
保坂 令子	ほさか れいこ	
細谷 博	ほそや ひろし	日立製作所、日立メディコ
松浦 武弘	まつうら たけひろ	伊藤忠
松浦 俊博	まつうら としひろ	東芝
松谷 隆	まつたに たかし	富士通
水原亜矢子	みずはら あやこ	東急電鉄
三 春	みはる	住友商事
森田 晃司	もりた こうじ	三菱商事
矢澤 正二	やざわ しょうじ	信金中央金庫
横内 則之	よこうち のりゆき	トヨタ自動車、トヨタ紡織
山縣 正靖	やまがた まさやす	三菱銀行
吉寄 清己	よしざき きよみ	関西ペイント

会 員 名 簿 (五十音順)

氏 名		出 身 会 社
阿部 典文	あべ みちふみ	石川島播磨重工業
新井 良侑	あらい よしゆき	ダイセル化学工業
安藤 晃二	あんどう てるつぐ	三菱商事
池田 隆	いけだ たかし	東芝
市川 忠夫	いちかわ ただお	東芝
稲宮 健一	いなみや けんいち	三菱電機
猪股 重子	いのまた しげこ	
岩崎洋一郎	いわさき よういちろう	三菱レイヨン
上田 信隆	うえだ のぶたか	東芝情報システム
上原 利夫	うえはら としお	住友商事
鷗飼 直哉	うかい なおや	富士通
大泉 潤	おおいずみ じゅん	三菱化学
大越 浩平	おおこし こうへい	NECインフロンティア (旧 日通工)
大月 和彦	おおつき かずひこ	労働省
大西 宏	おおにし こう	松下電器
大平 忠	おおひら ただし	三菱化学
大野 晁	おおの ただし	三井物産
門屋 信行	かどや のぶゆき	監査法人/中央会計事務所
木村 敏美	きむら としみ	郵政省簡易保険局
金京 法一	きんきょう ほういち	三菱商事、三菱総研
倉藤 金助	くらふじ きんすけ	桜井会計事務所
黒澤 弘子	くろさわ ひろこ	室町殖産
児玉 忠雄	こだま ただお	三菱銀行
小寺 裕子	こでら ひろこ	
清水 勝	しみず まさる	明治安田生命 (安田生命)
志村 良知	しむら りょうち	リコー
下山 健夫	しもやま たけお	サントリー、B-R31アイスクリーム
首藤 静夫	しゅとう しずお	三菱化学
杉浦 右蔵	すぎうら ゆうぞう	NTT、三菱電線工業
高橋 孝蔵	たかはし こうぞう	丸紅、松竹
田原 敬	たはら けい	和田製本工業
玉山 和夫	たまやま かずお	通産省、日英協会
都甲 昌利	とこう まさとし	日本航空
富岡喜久雄	とみおか きくお	フジタ (藤田組)
富田 佳瑞	とみた よしみつ	三菱商事

▽数年前、勢い込んで装丁まで刷新した『悠遊』の合評会を終えた。あるドイツ企業の日本進出を引き受ける羽目になり、編集のすべてを大平さんに託して、ミニマム会員（『悠遊』投稿、会費支払のみ）に変身して六年間が過ぎた。復帰し、当然のご奉公と編集人を引き受けた。いま改めて、会員諸氏の『悠遊』への思い入れの強さと、それが迫力の作品群となっている事を実感する。

（安藤）

▽安藤さんが戻ってきた『悠遊』二十一号の編集。特集テーマは、これまでとだいぶ毛色の違う「負の遺産」と「男と女」だったからか、一月中旬になっても原稿の集まりが例年になく遅い。「やつぱり、このテーマでは、みなさん、書きにくかったかなーア」とやきもきしたが、その後原稿は順調に集まり出し、締め切ってみると、投稿者はなんと六八人。これまでの最高になった。よかった！

（浜田）

▽今号の新企画は「裏表紙に会員の絵画や写真をギャラリー風に掲載」である。HPや個々の分科会では窺い知れない互いの思いがけない一面や才能を紹介するための一助となることも『悠遊』の役目だろう。また今回は、創設当初からの古参会員である中川路さんの文章にも感銘を受けた。今後も皆さんの支えのもとに、『悠遊』が新鮮で奥行き深い会員交流の場であり続けることを願ってやまない。

（三春）

企業OBペンクラブ同人誌

「悠遊」第二十一号

二〇一四年四月十八日発行

発行者 企業OBペンクラブ会長

西川 武彦

印刷所 株式会社 毎日新聞東京センター

東京都千代田区一ツ橋一―一―一（〒一〇〇〇〇〇三）

TEL 〇三―三三二二―〇四七九

連絡先 企業OBペンクラブ事務局

志村 良知

横浜市港北区大倉山五―三―一―八〇四（〒二二一〇〇三）

Eメール：rychshimura@f0.iiscom.net

クラブURL：http://www.obpen.com

口座 三菱東京UFJ銀行海老名支店（409）

企業OBペンクラブ 会計担当 清水 勝

（普通 1086096）

ペン・フォト句 (後編)



歌舞伎町**天**の岩戸を押し開き

池田 隆



もち肌はもうたまらんと

身を**焦**がす

矢澤 正二



天空に生きるシェルパの**業**かなし

大月 和彦



なさぬ仲**情**が移ればなせる仲

三 春



酔眼朦朧鳴呼六三四^{むさし}

黒澤 弘子



浜口 須美子



野瀬 隆平



福本 多佳子



松浦 武弘